XLX

PL
719
H53

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

Hisamatsu, Sen'ichi
Seio ni okeru Nihon bungaku

Digitized by the Internet Archive
in 2010 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/seioniokerunihon00hisa

久松潛一著

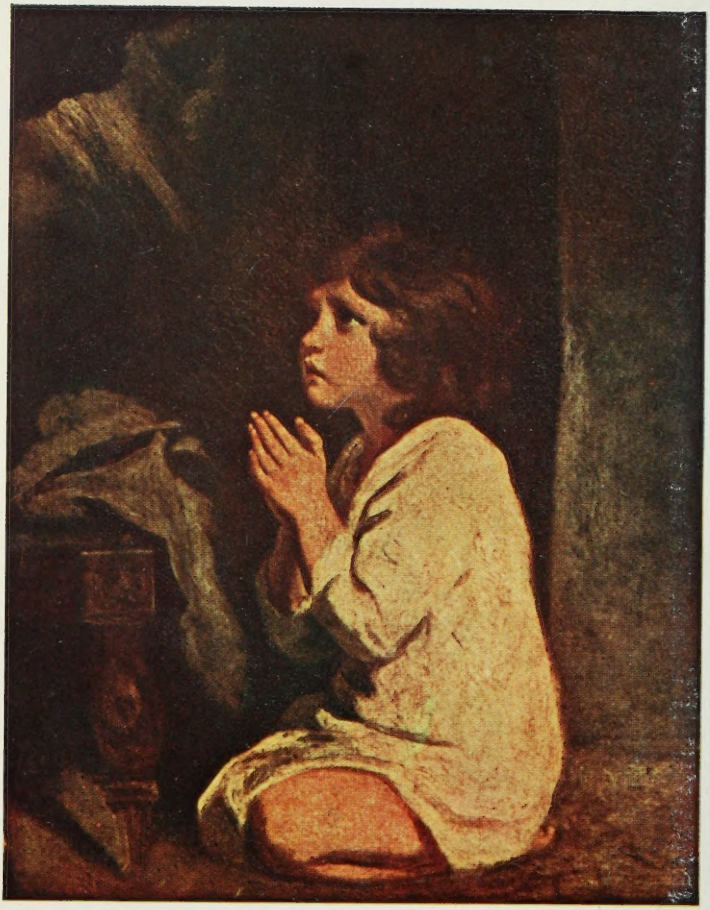
西歐に於ける日本文學

東京　至文堂

十四・十二・十六
松平弘撰堂

LIBRARY
JUL 6 1909
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
719
H53



ライノールド筆幼兒サムウエル（ナショナルガレリイ）

教會的人物和象徵

序

この書は昭和十年の春から翌年の春に至るまでの歐米の旅の間に得た隨感隨想である。自分は新綠の頃倫敦に着いてから四ヶ月ほどの間は主として大英博物館の讀書室で過したが、九月に獨逸にうつつてからは伯林を中心として西歐の諸國を旅行した。さうしてかねて見たいと思つた西歐に於ける日本文學の研究狀況を調べることに重きを置いて、かねて西歐の風土や文化や國民性にまのあたりふれて見た。しかし短日月でもあり語學にもくらいために

見る所まことに狹く聞く所極めて淺いことを感ずる。

歸來求められるまゝに語りもしくは書いたものも相當の量に達したのでここに一冊にまとめることにした。二三の文を除いては中央公論、文藝春秋、國語と國文學、文學、短歌研究、日本短歌、心の花、明日香、東炎、東京帝國大學新聞や大學の學友會誌等にすでに發表したものである。文體も一致せず、內容も重複して居る點もあるが、必ずしも統一することをしなかつた。第一章は本書の主眼をなして居るが、それもすべてを盡したのではなく歸來一年餘をすごして居るので彼地の日本文學研究の施設等も進んで居るであらう。第三・四章は火にたいても惜くないものであるが附錄の氣持で添へた。たゞこれは過ぎし日の回顧錄であるとともに、また旅中失つた亡き子への手向草でもある。

圖版は文章を多少補ふ積りで添へたが、一部分であり、繪畫なども必ずしも代表作といふ意味ではない。風物の寫眞には同行の友の撮したものが若干ある。

なほこの書を刊行するに當つて、私の旅に限りなき激勵と慰撫とを與へられた上田萬年先生、藤村作先生、佐佐木信綱先生、橋本進吉氏をはじめ多くの方々に深き感謝をさゝげる。また西歐の旅に行をともにし、または彼地に於て多くの便宜を與へられた方々にもこの機會に深く御禮を申上げる。わけて佐原六郎氏が跋として思出深い文詞を下さつたのは貧しい本書を光彩あらしめるものとして有難く思ふ。

昭和十二年七月　　久松潛一

目次

序

第一章　西歐に於ける日本文學

一　西歐に於ける日本研究に就いて……一

二　英米の日本文學熱……六

三　日本文學の世界性……四四

四　ウエレイ氏の英譯源氏物語評……五四

五　ウエレイ氏と語る……六〇

六　フロレンツ博士と日本古典文學……七二

七　西歐に於ける日本文學の研究……八五

八　西歐に於ける萬葉集……一〇〇

第二章　日本文化と世界文化
一　歴史・風土・文學……一〇七
二　日本文學と世界文學……一二六
三　歐米諸國の國民性所見……一四一
四　歐洲の演劇所見……一五五
第三章　西遊日記抄　一
一　歐米をめぐりて……一六三
二　上海日記……一七七
三　雨の香港……一八四
四　シンガポールとジョホール……一八九
五　月光のもとの彼南……一九四

六 カンデイに詣づ……一九
七 船中雜感……二〇六
八 エヂプト遊記……二一二
九 デブラルタル遊記……二一八

第四章　西遊日記抄　二

十 オツクスフオード參觀……二二三
十一 エヂンバラより湖水まで……二三一
十二 スウイス日記……二四三
十三 南歐遊記から……二四九
十四 即興詩人と羅馬行……二五八
十五 貴葉紀行……二六一

十六　クリスマスから新年へ……二六八
十七　パリイ日記から……二七二
十八　思ひ出すことなど……二七七
十九　遊歐吟詠……二八〇
跋として（佐原六郎）……二八九

圖版目錄

一　明子遺影
二　ライノールド筆幼兒サムエル（英國ナショナルガレリイ藏）
三　ラフアエロ筆マリヤ　（獨逸國ドレスデン美術館藏）
四　教會のステインド、グラス
五　ヘルバート、ツアフエルト氏の續日本紀宣命の獨逸譯

六　ピヤソン氏の英譯寓葉集

七　チエンバレン氏の英譯古事記

八　ウエレイ氏の英譯源氏物語

九　ハンブルグ大學

一〇　大英博物館讀書室

一一　サソフエロー筆マリヤ（英國ナシヨナルガレリイ藏）

一二　レンブラント筆ホーマー肖像（和蘭ライデン博物館藏）

一三　(a)ヘルマンの像（トイトブルガーヴアルド）

(b)ヴツケブルグの豐年感謝祭にて

一四　古代ゲルマン人の太陽を見た岩（エクセルシユタンネ）

一五　沙翁劇場の模型（米國ワシントン沙翁博物館）

一六　十六世紀の木彫のマリヤ（獨逸國ニウルンベルグ博物館）

一七　ゲーテのガルテンハウス（ワイマール）

一八　ダヴインチ筆聖家族（英國ローヤル、アカデミイ藏）

一九　(a)　スコットランド、ロモント湖上

(b)　グラスゴー大學

(c)　スコットランドの音樂

二〇　(a)　ウエストミンスター寺院

(a)　ロンドン・テームス河畔

(c)　大英博物館・キングス・ライブラリイ

二一　(a)　沙翁の家

(b)　沙翁の家の一室

(c)　ケニルロースの廢墟

二二　(a)　ライピチッヒの雪

(b　スウイス、ユングフラウの雲海

(c)　スウイス、ルツエルンのグレツツエル、ガルテン

二三　ローマの廢墟を顧望するゲーテ（フランクフルト博物館藏）
二四　ミケランジエロ作、モーゼの怒
二五　(a)　ダンテハウス（フロレンス）
　　(b)　ポンペイの廢墟
二六　(a)　ポツツダムの青年學校
　　(b)　ゲーテの書齋（ワイマール）
　　(c)　ライプチツヒ大學
二七　(a)　パンテオン（パリイ）
　　(b)　パンテオンの内部
　　(c)　シヤバンヌ筆パンテオンの壁畫
二八　アメリカインヂアンの踊

第一章　西歐に於ける日本文學

二、西歐に於ける日本研究に就いて

一

西歐に於て、近時日本に對する注意が高まつて來たことは事實である。さうして、それは現代の日本に對する注意とともに現代の日本を生み出した古の日本に對する關心も大きいのである。歐米に於ける日本研究の最年長者であり、それだけ見識も高いハンブルグ大學のフロレンツ教授は、現代の日本よりも、歐米文化の影響をうけない古代日本をより愛するとは、れたがらいふ傾向は大きな力として歐米人の思考の中に存するのである。これは歐米文化の中に立つて居る歐米人は、歐米文化の模倣や影響をうけた文化よりも、

それを受けない文化に興味を有することは異国情緒を愛好する上からもさうなるのであらうが、また歐米文化の影響をうけない前の日本文化が極めてすぐれてゐたことをも立證することと思ふ。

私は日本文學の一學徒としての立場から、昨年から今年春にかけて西歐に於ける日本文學研究の狀勢を中心として見聞した所を、いさゝか述べて見たいのである。叙述の便宜上各國にわけて觀察し、終りに二三の感想を附加へて見たいのである。さうして自分も西歐に於ける日本研究の狀勢を悉く見たわけではないので、自分の見た範圍を述べるのであり極めて一面的な觀察に止るであらうことを恐れる。

二

西歐の中で、日本研究に熱のあるのは最近では獨逸國など著しいであらう。英吉利に於ける大英博物館の日本に關する文獻や北米合衆國のボストン美術館に於ける日本美術品や、近世文學の資料ほど精選されたものはないやうであるが、日本に關する一般の書物を集め

て居る所は極めて多く、また日本に關する講座、研究室を有する箇所の最も多いのは獨逸國である。北米合衆國も大學が多いだけに日本學の講ぜられる所は多いが、率から言へば獨逸の方が多いであらう。即ちベルリン大學、ハンブルグ大學、ライプチヒ大學、ボン大學、フランクフルトの大學には日本語の講義があるのである。この中ベルリン大學にはシヤールシュミット氏が附屬の東洋語研究所（Seminar für Orientalische Sprachen）の方の教授として、日本文學に關する講義をせられて居る。氏の講義は一、二年の講義は東洋語研究所の講義となつて居るが、三年に教へられる講義はベルリン大學の日本學の講義となつて居る。氏はベルリン大學の方は名譽教授となつて居られる。四時間の中、二時間は古代日本文學を講義され、他の二時間の中、一時間は古今集を講義され、一時間は現代文を演習されて居る。さうして外に村田氏が東洋語研究所の講師として日本語を教へて居られる。私は村田氏の好意で東洋語研究所を參觀し、アラビヤ語の教室とチエッコスロバキア語の教室とを見せてもらつたが、日本語研究室でシヤールシュミット教授にあつた時、古今集の講義の時演習として古今集の序に於ける六歌仙の詞とそれ〴〵の作品との關係を分擔して調べ

させたと言はれたさうして業平の批評と作品との關係が僅かに羅かしいから、一時間それに就いて學生に話してくれと言はれ、昨年の十二月九日の頃教授の古今集の時間に一時間話して見た。こゝの日本研究室はシヤールシュミット教授の研究室と、圖書室ともいふべき室と教室とに分れて居り、相當に日本の書物もある上に、日本に關する寫眞や掛圖などもあり、日本の衣服も見本としてあつた。しかし書物は普通のものであつた、が別に東洋語研究所の圖書室は東洋諸國の圖書が集められ、支那に關するものなどなか〳〵多かつた。日本に關するものでは種々の叢書がそろへてあり、前田家の清輔本古今集をはじめ複製品も相當にあつた。學生も一年などは二十人ほどはあり、支那語についで第二位と聞いた。三年などは五六人のやうである。古今集の話をした後、一時間シヤールシュミット教授の演習を參觀したが日本の中學國語讀本の國木田獨歩の文章をよんで居られた。學生によませかつ和文獨譯をさせて、それを教授が批評して居られた。相當に讀める學生もあるやうである。シヤールシュミット教授は著書は殆どないやうであるが古今集にはなか〳〵造詣が深いやうで、古今集評釋其他の註釋の誤なども訂正して居られ、在原業平の奔放な戀愛の歌

などが勅撰集としての古今集にのつて居るのを不審とされるなど、なか〳〵見識の高いものがある。現代文學も研究され、芥川龍之介に關する精細な論文をフロレンツ教授の古稀の記念論文集にのせられてゐた。夏目漱石の初期と後期との作品が同一人の作とは思はれない程、變つて居る點なども珍らしいと言つて居られた。ベルリン大學から東洋語研究所は獨立して、單科大學になるとも言つて居られた。ベルリン大學の日本研究はシヤールシュミット教授の學識と人格とに加ふるに、俊敏な村田氏の助けによつて、今後も一層發展するに相違ないと思はれた。シヤールシュミット教授は私の宿にも訪ねて下さつたので、私もベルリンを去る前にワンゼイにある御宅を訪問したが、赤心を吐露して語るといふ人で、まことに氣持のよい人であつた。家の中を案内して說明してくれ、教授が日本にあられた時集められた佛像その他をも見せて貰つた。

次にハンブルグ大學にはカール・フロレンツ教授がゐられる。私は十一月の半ばにハンブルグ大學を尋ねて研究室を見せてもらひ、教授の私宅を訪ねた。フロレンツ教授門下の若い學生のホフマン君に研究室で逢つて、研究室を見せてもらつたが、日本の古典に關

するものが相當に多く集めてあつた。その學生は支那の近代文學を專攻し、側ら日本の近代文學に興味を持つて芥川龍之介や山本有三氏の作品を讀んだと言つてゐた。しかしここではやはり日本の古典文學としての萬葉集や祝詞や宣命等が多く講義され、卒業生のドクトル論文にもアルフレッド・ロレンツェン氏の萬葉集の人麿研究や、ヘルバート・ツァフェルト氏の續日本紀宣命などのいゝ研究があつた。フロレンツ教授の令息も萬葉集の大伴家持に關する論文を書いて居る。フロレンツ教授と語つた時も、外國文化の影響をうけない古典文化に興味を有して居られ、こゝに日本文化の根源があるといふ立場から、上代文學に中心をそゝいで居る旨を言はれた。萬葉集に中心があるらしく萬葉集の註釋をある程度まで完成して居られる。教授はかつて日本にあられた頃明治三十八年に日本文學史を發表され次いで十年前にも古今集の註釋書を出して居られるのであり、また謠曲にも興味を有してその譯なども「日本」(ベルリンの日本學會の季刊雜誌)に時々發表して居られるやうに、日本文學全體に對して見通しをつけて居られるのであるが、なほ萬葉集を最も尊重して萬葉集は世界文學の價値があると言はれた。世界文學とは世界に於ける代表的文學作品の一とい

hat auch die Semmyô des Shoku-Nihongi bearbeitet. Nachdem sein Ruf schon längst durch seine größte Arbeit, das Kojiki-den sowie durch viele andere Schriften begründet war, hat er sich noch im hohen Alter mit den Semmyô beschäftigt, die erst 2 Jahre nach seinem Tode unter dem Titel *Shokki Reki-chô Shôshi-kai* 續紀歷朝詔詞解 „Erläuterungen der Edikte der aufeinanderfolgenden Aeren des Shoku-Nihongi" in 6 Bänden veröffentlicht wurden. Hier zeigt sich vor allem die unübertreffliche Meisterschaft der Sprache, mit der Motoori seine Ausführungen und Erläuterungen zu den Semmyô schrieb. Es ist ein ästhetischer Genuß, sein klares und vollendetes Japanisch zu lesen. Aus seiner Einführung zum *Shokki Reki-chô Shôshi-kai* können wir ein klares Bild von der Arbeit, der er sich unterzogen hat, gewinnen. Um den Text der Semmyô festzulegen, hat er außer den damals verbreiteten Blockdrucken des Shoku-Nihongi noch einige Manuskripte kritisch vergleichend benutzt. Leider macht er keine näheren Angaben über diese Vorlagen. Zunächst einmal nummerierte Motoori die Semmyô aus praktischen Gründen. Dann aber galt es vor allem, die Schreibung und somit die Lesung festzulegen. Wie ich schon oben kurz andeutete, war die Schreibung keineswegs so einheitlich und korrekt, wie sie uns heute vorliegt. Im allgemeinen schrieb man die Semmyô derart nieder, daß man die Begriffswörter mit größer geschriebenen chinesischen Zeichen wiedergab, während man für die Flexionssilben kleiner geschriebene und nur nach ihrem Lautwert zu lesende Zeichen, gleichsam als Kana, brauchte. Als Beispiel diene der Ausdruck *nori-tama-haku* 勅波久. Während der Verbalstamm *nori-tama* mit einem großen chinesischen Zeichen 勅 geschrieben ist, ist die Flexionsendung *-haku* durch die beiden phonetisch gebrauchten Zeichen *ha* 波 und *ku* 久 wiedergegeben. Diesen „Mixed Phonetic Style"[1] finden wir sowohl als Schreibweise für die Semmyô (*Semmyô-gaki* 宣命書), wie bei der Niederschrift des Kojiki, des Manyôshû und der Norito verwendet. Wir dürfen nicht erwarten, daß die Drucke und Manuskripte, die Motoori für seine Ausgabe benutzte, alle in korrekter Semmyô-Schreibweise geschrieben oder gedruckt vorlagen. Im Laufe der Jahr-

1 Zur Sache vgl. Chamberlain *a. a. O. T.A.S.J.* vol. X. pag. VIII.

ヘルバート・ツアフエルト氏の續日本紀宣命の獨逸譯

Dr. Herbert Zachert.

ふほどの意味であつて、まことに私どもにも同感される言である。教授ほど日本文學全體に對して豐富な知識と識見とを有して居られる方は西歐人の中で恐らく他にないと思ふ。ハンブルグ大學に教授あることは日本研究にとつても誇りとすべきであるが、教授もすでに古稀を越えられ近く職を辭されるやうであるが、（今年三月辭すると言つて居られたから、接早退職されたかも知れない。）六十五歳が大學の停年であるに拘らず、後任なきため七十一歳までひきとめられて奉職されたことは、教授の信望を語るものであらう。

次にライプチヒ大學では、千九百三十二年大阪毎日新聞社の本山社長の寄附によつて日本學の研究室が設けられ、二十餘年日本の京都の大學や大阪の高等學校に獨逸語を教へられたウバーシヤール教授が、その擔任教授として赴任されて居る。教授をその研究室にたづねたのは、十二月十八日の夕刻であつた。教授は日本研究室の方針は、古い日本の古典をも教へるが、現代の日本を知らしめるのを第一の目的として居るといひ、從つて、日常語を使用することが出來、現代の日本を理解せしめるやうにして居るとの事であつた。氏には日本の文法に關する著述もあり、芭蕉に興味をもつて芭蕉の奥の細道を譯譯して居

るとの事であつた。教材としては方丈記なども用ゐられて居り、日本の庶民史なども講じて居られるとの事であつた。別に隣に東亞研究所があり、こゝのウェデマイヤー氏は支那學專門であるが、萬葉集を講じて居られるやうである。東亞研究所では古き日本や東亞をしらべるのを目的とし、日本研究室と異なつて居るとの事であつた。この日本研究室は卒業生もすでに十八人あり、現在も十八人ほどの學生があるとの事であつた。こゝには若き言語學を專攻される貫鍋文學士が講師として日本語の會話等を教へて居られ、初平教の授業を參觀することが出來たが、まだ初歩ではあつたが、なかなか熱心であつた。貫鍋氏は近く歸朝された。更にボン大學では松本德明氏が名譽教授として、日本語や日本文化史を講じて居られる。私は十一月一日の日、ボンにいつた。黄葉の散る中を躋んで、大學の前を通り、松本氏にあつて日本研究室を見せてもらつた。大學から數町南にあるこじんまりとした建物の二階に東洋各國の研究室にならんであつた。松本氏は佛教を專攻される方であるだけに、こゝの日本研究室は文學よりは日本思想史、日本文化史といふ方面に力をそそいでゐられるやうで、書物もさういふ方面が多くあつた。氏も獨逸各大學の日本研究室

にもそれ〴〵特色あらしめたいとの方針で、こゝは日本の思想哲學に中心をおきたいと言つて居られた。まことに妥當な方針であるやうに見られた。氏は恰度由鹿素行に關する論文を審査中で、それを終つて一度日本に歸られるといふ。氏の外にドイツの人が日本語を教へて居るが、見識もあり、熱情もある氏の如きは、これまでに開拓されたこの大學の日本研究室を更にもりたてゝいたゞきたい感が深い。

ボン大學の外に、フランクフルトの大學にも北山氏が講師として日本語を講じて居られる。私がフランクフルトを訪問した頃に氏はベルリン大學の方に講演にゆかれてゐたが、長くドイツに居られてドイツ語も極めて達者であるといふ。

獨逸に於ける大學もしくは大學の附屬としての東洋語學校での日本に關する講義は大體以上のやうであるが、この他ベルリンには日本學會(ジヤパン・インスチイチウト)があつて、日本の文獻は相當に多く集められて居る。日本人及び獨逸人のライターが各一人あつて、日本のライターは一年づつ位の任期で、私の伯林に著く前には東京文理科大學の友枝教授がライターであつたが、氏の後任には東京商科大學の孫田教授が赴任せられた。獨逸

人のライターはラーミング博士が常任として任にあられた。氏も極めて篤學な日本研究家であつて、日本の近世の經濟史を專攻せられて居る。日本語も達者であり、將來のある方である。氏の「日本の船による交通の研究」といふ研究報告をもらつたが、丹念な研究であつた。また氏の近世に於ける人口問題の講演をも聞いた。こゝでは毎月一回位づつ講演會があり、また季刊の「日本」といふ研究雜誌もあつて、獨逸に於ける日本研究家の論文が載せられて居る。日本學會に藏する日本の典籍も相當に多くあるが、日本文化の全般の書物を組織的に蒐集されることによつて、獨逸に於ける日本研究の中心となられることを祈つてやまない。

この他獨逸圏には個人的にも熱心な日本研究家が尠くない。近世の日本演劇などを研究して居られるルンプ氏その他相當に多く、今後に於ても獨逸に於ける日本研究は一層盛んになるに相違ない。フロレンツ教授の古稀の記念論文集を見てもシヤールシュミット教授その他の獨逸國及び日本在住の獨逸人の日本研究家の論文が載つて居るが、前述した如くシヤールシュミット教授は芥川龍之介論を書いて居られ、その他諸家によつて「物のあはれ」

「陶玄」等も研究され、日本に於ける日本文學研究の傾向をも取いれられて居るやうである。

三

和蘭國は日本の近世史に於て日本との關係の最も密接な國であつたし、從つて日蘭關係に關する資料も多く存して居る。さういふ方面に就いてはヘーグにある古文書館に多くの資料を有して居るのであるが、これは既に日本の史料編纂所で殆ど大部分を謄寫されて居るとの事で、村上直次郎氏や齋藤阿具氏、幸田成友氏等の精細な研究も發表されて居るのである。私は日本文學に關する現在の研究狀況をいさゝか報告して見たい。

その方面ではライデン大學の日本研究室、ならびにライデンの博物館を擧げなければならない。私は十一月二十六日から十二月二日まで和蘭の日本研究を調べるべく和蘭國にゆき、ライデンに於て博物館長のクルウゲル氏及びライデン大學の日本語教授のラーデル教授にあつて、種々調査し、またアムステルダムの郊外なるラーレムに萬葉研究家のビヤソン氏を訪問した。先づ博物館長のクルウゲル氏の自宅をば公使館の三好通譯官と下田氏と

で十二月一日に訪問した。氏は徐り日本語を話されないが、しかし熱心な日本研究家で、墨管抄や、更級日記を枕邊において居られた。國木田獨歩の作品なども有して居られ、日本の短篇小說の悲劇性を扱ふにすぐれて居ると言はれたのは獨歩の作品をよく理解された言と思つた。その翌日博物館に行つたが、恰度移轉のためすべて片付けられて一々日本の品を見ることは出來なかつたが、二三の佛像や浮世繪を見た。浮世繪にはクルウゲル氏が一枚一枚丹念な記載のある目錄を作つて居られた。シーボルト等によつて將來せられたライデン大學の圖書館にある日本關係の書目はセルリエル氏(Dr. L. Serrurier)によつてその目錄解題が和蘭語によつて作られ、千八百九十六年に成つて居る。この目錄は英吉利の大英博物館の日本關係の文獻約五千部の目錄書（ドクラス氏編で千八百九十八年に成る。外に增補一册も作られて居る）とともに注目すべき日本文獻の目錄解說書である。大英博物館の日本文獻もシーボルトの蒐集が千八百六十八年に入つたのを基礎として、千八百八十二年にはウイリヤム・アンデルソンの集書、更にアーネスト・サトウ氏の集書が加はつて居るのである。それによつても、シーボルトの日本書を彼の國に將來したことの相當な數に

のぼつたことを示して餘りある。クルウゲル氏に逢つた翌日、ラーデル教授の好意で大學圖書館にいつて日本書の希覯本ともいふべき辭書落葉集と蝦夷島言葉を蒐集した原稿や、その他一二の手稿本を見た。前者は日本にも無き珍らしいもので、近世日本語を知る上に必要なるもの、蝦夷言葉のも他には見られざるもの、これだけでもこの博物館の特殊の價値があるであらう。

ライデン大學に於ける日本研究室はラーデル教授が度々日本に來られて集められただけに豐富であり、かつまとまつて居る。佛教や歴史關係のものが最も多いが、文學に關するものも多く、藤村教授編の日本文學大辭典も索引編とも四冊が完備して居つた。ラーデル教授は好色一代男をはじめ多くの日本のものを譯され、最近は久留米騷動に關する研究をされた。氏自ら歴史的なものに興味を有すると言はれ、今は東京文理科大學の松本教授と協力して愚管抄を飜譯中であると言はれた。こゝの大學では研究室は支那語の研究室の方が廣いが、學生は日本語の方が多いとの事で、恰度研究室を尋ねた時、講義が終つて學生の退席する際で私を見て「今日は」「今晩は」と直ぐに話しかけた率直さが感じられた。ク

ルウゲル氏の重厚とラーデル氏の多才と相まつて、ライデンに於ける日本研究は期待すべきものがある。

十二月一日にラーレムにピヤソン氏を訪問した。氏はかつて大學に日本語を講じて居られたが、今は辭して、閑居して、悠々日本文學研究に從事して居られる。萬葉集の註釋はすでに三冊(卷一、一冊、卷二、一冊、卷三、一冊)を刊行して居られる。萬葉集二十卷を一卷一冊(一冊は四百頁ほどのもの)にして出される豫定で、それには十五年かかると言はれた。妥當でない譯もあるが、極めて努力的な註釋書である。この書はすでに日本にも紹介されて居るがこの事業が完成したならばウエレイ氏の源氏物語の英譯と相ならんで日本文學に於ける注目すべき業績となるであらう。氏はムッソリニイ氏を崇拜され、萬葉集の第三卷にはムッソリニイに捧ぐとある。氏も少しは日本語を話される。かつて日本にゆかれたが萬葉集第五卷を完成するために、今一度日本にゆきたいと言つて居られた。氏は語學的文法的方面に興味をもたれ、氏の萬葉集もこの方面に特色があるやうである。萬葉集の外に漢呉音の研究をされて居り、漢呉音圖と大矢氏の研究とちがふ所があると言はれた。和蘭

Different Readings.

Texts: akazu ka, *akazaru, akarenu, akazu ya.* kimi wo, *imo wo.* (5) yama-gosi ni, *yama-goye ni, yama-gove ni.* okite, *wokite.*

Comment.: (4) akazu ka kimi wo, Kitamura: *akazaru kimi wo.* Keitśû: *akazaru, akarenu, itovanu, utomanu.* All these readings are possible and have approximately the same meaning. Kada: *akazaru imo wo.* (5) yama-gosi ni okite, Kada: *yamato ni okite.*

IV—13 (496) *Kakinomoto no asomi Hitomaro no uta yotsu.* (Four
柿 本 朝臣人麻呂 歌四首
uta's by Hitomaro.)

(1) Mi-Kumanu no
三熊野之

(2) Ura no vama-yuvu
浦乃濱木綿

(3) Momo-ve nasu
百重成

(4) Kokoro va movedo
心者雖念

(5) Tada ni avanu kamo.
直不相鴨

Translation.

(4) Though my heart longs for you, (3) hundred-fold like (2) the vamayuvu of the gulf (1) of beautiful Kumanu, (5) alas I cannot meet you directly!

General Remarks.

For Hitomaro see preface Book-I and special study of Hitomaro's poems by Lorenzen.

Grammar.

(1) *mi-* honorific as in mi-Yosinu. *Kumanu* in Kii prov., Muro kôri. (2) *vamayuvu,* same as *vamaomoto,* have large thick leaves, bloom in April and have white flowers in bunches that hang down like a cotton cloth (*yuvu*). (3) The *momo-ve,* hundred or many folds point to the *yuvu* cloth or flowers rather than to the leaves

語でかゝれた日本助詞に關する研究もある。萬葉集に於て校本萬葉集と正宗氏の萬葉集總索引とを基礎的なものとして推賞して居られた。其等の本の外に、萬葉集古義や、井上通泰氏の萬葉集書考その他多くの日本の書物があつた。氏の夫人もやゝ日本語を話され、小說家である。ウエレイ氏の源氏物語第一卷を佛蘭語に譯されてゐた。ピヤソン氏もまだ若い。氏の萬葉集の註釋の全部の完成をいのつてやまない。

墨

オーストリヤ、ハンガリイ、チエッコスロバキヤ三國の日本研究を視察したのは今年一月十日から十八日まで九日間であつた。オーストリヤ國も日本に對する關心は相當に有して居るやうである。ウイン大學でも東京帝國大學獨文科出身の植田文學士が、こゝの大學のナドラー氏のもとで研究してドクトルを得られたが、講師として日本語を教へて居られ、聽講生も三十人ほどはあるといふ。また氏は領事學校(Consul Akademie)の方でも昭和九年一月より日本語を教へて居られるとの事である。植田氏に直接あつて聞いた所では、日

本の小學國語讀本を基として教へられ、彩色等もあるためになか〳〵讀本そのものも好評であるとの事である。島崎藤村氏の幼な物語や、芥川龍之介の河童も教へて居られる。氏はしかしやがてウインを去られるとの事であつた。ハンガリイのブタペストではハンガリイ人で日本語の巧みなレイツエル・ヨセフ氏を案内として文部省を訪問して秘書官のイヴラン・ドウ・ナギイ氏にあつて、日本語研究を中心として教育方針を質問した。言語としてはハンガリイ語の外に、ドイツ語を必修外國語としその他佛蘭西語、英吉利語、伊太利語の何れかの中から一をえらばせるといふ。大學には東洋諸國語の講義もあつて支那語もかつてあつたが、今は行はれず、日本語は八名ほどの聽講生があるといふ。講師はもと日本名譽領事をして居たドクトル・プレイレイ氏が當られてゐるとの事であつた。氏はすでに六十三歳ほどの老學者であるといふ。日本語の講義の外、東亞の品を集めた、研究所もあり、日本のものも相當にあつた。ドクトル・メツイ氏といふ辯護士は日洪協會を作られて居り、またドクトル・ホルス氏は銀行の重役であるが、名譽領事として日本文化をひろめるために盡力して居られる。

またハンガリイの國民も日本に對して東洋人といふ所から好感をもつてゐるらしく、日本語を語るものも二三あるやうである。日本文化を傳へるには效果のある所と見られた。更にチエッコスロバキヤ國ではプラーグの公使館につとめてゐるクーデンホーフ氏を訪ねて、こゝの日本研究の狀態をきいた。氏は日本の代理公使として日本にあつたハンガリイ人と日本人の女との間に生れた青年であつて、まだ日本にはゆかないが、日本語は相當に巧みである。東亞研究所の日本部長をして居り、一週二度づつ日本語を教へて居り、日本の尋常小學讀本を用ゐて居られる。三十五人ほど聽講生があると言はれた。

更に東亞研究所に所長のハルトマー氏をたつね、研究所を見せてもらつた。ハルトマー氏は日本語は話されないが寛厚の長者の風があつた。消え殘つた雪のある庭園の丘にも案内されて、川を見下す眺望のいゝ所で、方々を説明してくれた。研究所はトルコ語やアラビヤ語やマライ語その他東亞諸國の文獻がある。別の部屋は特殊科學の部門、一般科學の部門にわけてある。雜誌も各國のがあつた。ベルリンの日本研究所で出る日本、その他ジヤパン・マガジンもあつた。日本語の研究室には國文學叢書(物集氏編)の外日本のものも

あつたが、特に示されたチエッコの國で、かの國の人によつて著述刊行せられて居る日本研究の書は興味深かつた。千九百二十六年刊行の一書は日本古來のお伽噺をあつめ、牛若、金時をはじめ各種の美しい繪でかざられて居る。シーボルトの日本研究書五冊も示された。中央公論、改造、文藝春秋もあり、他の部屋には大衆文學全集や財政史、高田氏の漢字研究の著書もあつた。相當に整理されて居る上に、相當の量があり、注目すべき所であると思ふ。

以上オーストリヤ、ハンガリイ・チエッコスロバキヤ三國では日本に關する關心は相當に多いやうであり、著述もそれ〴〵あるやうであるが、同國人ならびに日本人のいゝ指導者が乏しいやうである。この點に力を入れるならば三國における日本研究は相當に進歩するであらう。なほ三井氏が日本研究の書を出されたことは大なる刺戟を與へてゐるらしく殊にチエッコスロバキヤやハンガリイではそれを德としてゐるやうに思はれた。

フランス・パリーのソルボンヌ大學や東洋語學校を視察したのは今年の二月であつた。ソルボンヌ大學には日本語の講座があり、ルボン氏が日本文化史や日本の古典の講義をされて居る外、アグノウエル氏が古事記や今昔物語の講義をされて居る。ルボン氏はかつて日本文學史抄の著書もあり、祝詞その他古代文學に、委しいといふ、數十年前日本の大學に居られたのであるが、今はもう老いて居られる。これに對してアグノウエル氏は數年前まで日本に居られ日本語も達者でまた若いので研究に極めて熱心であり、覇氣に富んだ研究家である。以前はエリセイフ氏が日本文學を敎へてゐたのであるが、氏は今は北米合衆國のハアバード大學に日本語を敎へて居られる。大學の外に東洋語學校があり、東洋諸國の言語の講座があるが、日本語の講座はアグノウエル氏が敎授としてあり、外に内藤氏が講師として日本語を敎へられて居る。アグノウエル氏の話によれば、一年生は十七八人、二年生は四五人、三年生は二人ほどあることを言はれ、一年の時、國語の概論と日本文法の如きことを敎へられ、それから時文により日本の歴史、地理、經濟その他の敎材を敎へ三年は文學を敎へられるとしてその敎材をも示されたが、桃太郎、三人の時計その他文章

を勝寫してくれるやうにして居られた。文學では龍之介の「鼻」、有島武郎の「ある女」、目漱石のもの、徒然草、方丈記、謠曲、狂言、源氏物語、伊勢物語、古事記、萬葉集を少しつつ敎へ、國文學史總說中の文章をも二三敎へて居られた。氏は言語的に研究して居られ、助詞の「イ」の說、タブーを「さゞ」と同義とする如き新說をも持つて居られた。なほこのギメイ博物館にも日本に關する繪畫、彫刻等、若干集められて居る。こゝのアカン氏は東亞美術の研究家として著名であるが、アカン氏の紹介で日本の古美術を多く藏して居るベバル氏の蒐集を見ることを得た。櫛、鍔、根付、繪畫等にもいゝものがあるが、浮世繪でも寫樂をはじめ逸品を多く有して居る。書物では伊勢物語の光悅本の上册の外、普通の本ではあるが、源氏物語小鏡版本、蹄慶物語、太平記圖會、日蓮聖人註畫讃、融通大念佛緣起(元祿刊)、佛說觀無量壽經二册、平家物語繪入版本等を見ることを得た。無論これはその一部分に過ぎない。なか〳〵各方面にわたつて藏せられて居る。

要するに佛蘭西の日本文學研究は獨逸國に比しては振はざるの感があるが、藝術的な國民であるだけに、俳句なども味はれて居る。日本文學の味を理解して居られるエリセイフ

氏が去つて、北米合衆國にあるのは、パリイの日本文學研究のためには惜しい感があるがアグノウエル氏等の努力は將來の望みを多からしめる。ソルボンヌ大學に日本文學の講義を開いてゐて萬葉集に關する論文を書いてゐるといふウイン大學出身の若き學生のマチアス・エデル氏が私の宿を訪ねてくれ、種々萬葉集研究に就いて語つたが、萬葉集の接頭語や接尾語等にも興味を有して居られるやうである。佛蘭西文學の研究も言語學の方面に特色を有して居るやうであるが、日本に關する研究にも言語學的に特色を有して居るであらう。

六

私はまだ英米兩國の日本研究の狀態を書き殘して居る。英國の日本研究家アーサア・ウエレイ氏のこと、大英博物館の日本研究書のこと、北米合衆國のハーバート大學の日本研究のことやボストン美術館の日本研究資料のこと、ワシントンやシカゴの日本研究等のことなど記したい心持であつたが、餘り長くなるので他の機會にゆづつて、こゝで少しく歐米に於ける日本研究、特に日本文學研究に對する二三の感想を記してこの稿を終りたい。

歐米の中、私の見た中では日本文學研究のよい資料は英國の大英博物館、米國のボストン美術館、それに和蘭のライデンの博物館等に多いやうであるが、國内特に大學で日本語や日本文學の研究に最も熱心なのは獨逸國であるやうである。さうして獨逸國では資料の珍らしいものを扱ふよりも、普通の材料を掘りさげて組織つけようとする所に特色がある。これは獨逸に於ける學風にもよる所が多い。さうして日本に於ける明治以後に於ける國文學にも獨逸の文學研究の方法の影響が大きかつたのである。上田、芳賀兩先生によつて主張された獨逸文獻學の立場からする日本の近世國學の再吟味と、それから起つた國文學の文獻學的研究とは獨逸學風の影響も相當にあつたのである。勿論獨逸文獻學と日本文獻學との異なる點もしくは異なるべき點も十分自覺されてゐたのではあるが、その國の古文獻の尊重吟味とその古文獻によるその國の古代文化や精神の闡明といふ點は、近世國學と獨逸文獻學と共通してゐたのである。近時國文學界に於て主張されて居る日本文藝學の立場も日本文學研究に於ける内部的な必然的要求から來て居るけれども、同時に獨逸文學研究に於て文獻學に代つて、ワルツェル・エルマチンゲルその他の教授による獨逸文藝學の主

張と學説との影響も多少あることを否定せられない。一體に明治以後に於ける國文學と獨逸學風との交渉は多いのであるが、これは獨逸側にも反映して居るかも知れない。それに近時の國情の多少の類似などから、獨逸國人も日本に好意と關心とを多く持ち、日本文化の正しい認識を得ようとして居るかに見られる。それが日本文學の研究の上にも現れて居るのであらう。獨逸國がナチス的政策により文化統制も行つてゐることは言ふまでも無いが、外國文化殊に日本文化に對する研究などはむしろ好意的であるやうにさへ見られる。

さうして一般的に言つて注意されるのは、歐米諸國に於て日本に關する研究がかつてあつたやうな趣味的異國趣味的な態度から、本格的研究に進んで來たことである。即ち富士山と櫻と藝者とのみで代表されるやうに考へる立場から離れて、世界の三大强國の一である日本の實質を知らうとする態度になつたことである。同時にその日本の文化の獨自的價値をも認めるに至りつゝあるのである。さうして日本文化の探求に對してもより深きものへの探求に向ひつつあり、繪畫に於ても浮世繪よりも更に深さのある日本の繪畫の研究に向ひつゝあるやうであるが、同時に造形的な藝術から進んで、より觀念的な文學研究に向

つて來たことも言はれる。ウエレイ氏の源氏物語英譯がかなり評判であり、縮册版も出て大いに讀まれて居ることもそれを示すものである。さうして萬葉集や源氏物語等の日本古典は單に日本の代表的文學作品としてのみならず、世界文學史上の傑作として認めつゝあるやうである。日本の代表的文學作品は世界に於ても代表作品として認められつゝある狀況にあると言つてよい。

この事はしかし歐米に於てもまだ十分に認識されて居るとは言ひ難い點があるが、次第に認識されつゝあると言ひ得るのである。これは近時に於ける日本の各方面に於て、日本文化の世界的進出が計畫されつゝある機運によつて一層促進されることと信ずる。學術振興會に於ける萬葉集の英譯その他國際文化振興會の此頃の努力などもまことに意義の深いことと思ふ。たゞ一言感想をのべるならば、海外に於て種々の不便と困難とを忍びつゝ日本文化の研究に專念して居る人々の業績にも注意して、それ等の人々とのより一層の共同が望ましい點がある。今は亡きチェンバレン翁のことは不言、老いてなほ日本研究を棄てざるフロレンツ博士や、病軀をかつて源氏物語英譯その他をなしつゝあるウエレイ氏その他多

くの外人の日本研究家に對して、外人たるが故に、有する不備缺點は多少あるにしてもその功績は大いに認められるべきである。

同時にそれにもまして私は歐米にあつてあらゆる困難に堪へつゝ大學の講壇に、或は野にあつて日本文學の研究に專念し、もしくは日本文化の紹介に努めて居られる日本人の方々に對してもその功績をより多く認めるべきであると思ふ。かの地の大學に於て日本語その他を講じつゝある日本人に對して、かの國々からの待遇は必ずしもよくないらしい。是等の方々の中には尊敬すべき篤學者もあり、またその國の人々の心持に對する理解も多いのであるから、日本文化の海外進出と言ふ上から言つても、是等の人々の功績を尊重し、それ等の人々とのより緊密な交渉連絡を保つことが必要ではないかと思ふ。私が歐洲に於ける日本研究の一端を紹介しようとしたのも、歐米の日本研究を調べ、日本研究家に逢つた時に、さういふ感想を抱いたからである。（昭和十一年四月補中央公論）

追記　ピヤソン氏の萬葉集第四卷もその後刊行された。文中、昨年とあるは昭和十年、今年とあるは昭和十一年である。

二、英米の日本文學熱

一

西歐に於て研究せられて居る日本文學の中、如何なる作品が最も多く研究されて居るかといふことは、私が昨年から今年春にかけて歐米を旅行して、日本文學の研究され、また大學や東洋語學校等で日本文學の講義されて居る狀態を調べて居る中に、先づ起つた問題であつた。もとよりこれにもいろいろの點から考へられる。歐米で最も價値あるものとされて居る日本文學作品は何であるかといふ方面からも考へられるし、また最も多く譯譯されて居る作品は何であるかといふ方面からも考へられる。更に西歐の大學で日本文學の

教材として何が多く用ゐられて居るかといふ方面からも考へられる。さうしてそれ〴〵の方面によつて、多少異なつて來るのである。最も價値ある作品といふ上からは萬葉集や、源氏物語が擧げられるであらうが、多く譯されて居るといふ點からいふと、案外小さな作品が數多く譯されて居る。しかしながらアーサー・ウエレイ氏の源氏物語英譯は日本文學の譯譯を壓倒した感があるし、萬葉集にしても種々の抄譯はあり、また近頃はピヤソン氏の萬葉集の全譯が進行しつゝある。すでに初め兩卷は完成して居るのである。

たゞ大學などで用ゐられて居る教材としては萬葉集や古今集等は多いが、源氏物語は殆ど用ゐられてゐない。却て短篇の竹取物語等が多く採はれて居る。これは量的にも扱ふに便利なためであらう。方丈記とか、芭蕉の奥の細道等が教材として多く採用されて居るのも、是等の作品のすぐれて居ることにもよるであらうが、同時に量から言つても適當であるためもあらう。

明治大正文學でも、國木田獨歩の作品集は多く讀まれて、たとへば和蘭のライデン博物館長のクルウゲル氏にあつた時にも、讀んで居られて日本の短篇小說の悲劇的構成がすぐ

れて居ると評して居られたし、芥川龍之介の作品なども多くよまれて、ベルリン大學のシヤールシユミツト教授などは細緻な龍之介論を發表して居られる。それ等も作品のすぐれて居ることによるであらうが、短篇小說は量の上からも早く讀まれ、多く研究される機會がある。

かういふ意味で、日本文學の何が多く研究されて居るかといふことは種々の條件によつて定められて居て容易に定めがたいが、やはり萬葉集、源氏物語等は日本古文學としての代表的作品として認められて居り、それ等は世界文學としても優秀な作品であると考へられて居り、さういふ考は次第に一般的にならうとしつゝあるやうである。萬葉集の成立した時代には、ホーマアの詩篇などは無論すでに出來てゐたが、ダンテをはじめ、英・獨・佛等のシエークスピイア、ゲーテその他目ぼしい作品などは殆ど生れない前である。その點だけでも萬葉集の如きは注目すべき作品である。世界文學に高い位置を占めるのは當然であらう。今こそ東方文藝の光を世界に示すべき時が來たやうに思ふのも、我々の增上慢ではあるまい。

whole question of the so-called "Divine Characters," which Motowori, the most patriotic as well as the most learned of the Japanese *literati*, dismisses in a note to the Prolegomena of his "Exposition of the Records of Ancient Matters" with the remark that they "are a late forgery over which no words need be wasted." But as this mare's nest has been imported into the discussion of the Early Japanese social state, and as the point is one on which the absolute silence of the early traditions bears such clear testimony, it was impossible to pass it by without some brief allusion.

V.

RELIGIOUS AND POLITICAL IDEAS OF THE EARLY JAPANESE, BEGINNINGS OF THE JAPANESE NATION, AND CREDIBILITY OF THE NATIONAL RECORDS.

The religious beliefs of the modern upholders of Shintō[57] may be ascertained without much difficulty by a perusal of the works of the leaders of the movement which has endeavoured during the last century and a half to destroy the influence of Buddhism and of the Chinese philosophy, and which has latterly succeeded to some extent in supplanting those two foreign systems. But in Japan, as elsewhere, it has been impossible for men really to turn back a thousand years in religious thought and act; and when we try to discover the primitive opinions that were entertained by the Japanese people prior to the introduction of the Chinese culture, we are met by difficulties that at first seem insuperable. The documents are scanty, and the modern commentaries untrustworthy, for they are all written under the influence of a preconceived opinion. Moreover, the problem is apparently complicated by a mixture of races and mythologies, and by a filtering in of Chinese ideas previous to the compilation of documents of any sort, though these are considerations which have hitherto scarcely been taken into account by foreigners, and are designedly neglected and obscured by such narrowly patriotic native writers as Motowori and Hirata.

In the political field the difficulties are not less, but rather greater;

[57] The Chinese characters used to write this word are 神道, which signify the "Way of the Gods." The term was adopted in order to distinguish the old native beliefs from Buddhism and Confucianism.

私はその心持から西方の日本文學研究を求めて諸國を歩いて見たのであつたが、こゝでは英米を中心として少しく書いて見よう。

二

英國ではかつてチエンバレン翁のやうな優れた日本語の研究書を出し、現在もアーサー、ウエレイ氏のやうな立派な日本文學研究者がある。ウエレイ氏とは昨年の九月はじめ東京美術學校の矢代教授等とともに一夕逢つた。(その折の會見記は「ウエレイ氏と語る」の項參照。)十一年もかかつて源氏物語の英譯を完成し、あれだけの成果を擧げただけに、日本語の理解にも文學に對する感受性にも深いものがあつたやうである。日本文學の外に漢文學にも造詣深く漢字に興味をもつて居られた。近頃は支那文學の方により專心してゐるらしく紅樓夢の英譯などもある。日本文學の方では源氏物語の出る前に日本詩歌の抄譯や謠曲三十數篇の譯、枕草子の英譯なども出て居る。

身體が弱く、毎年半歲位はスウイスの方にあり、ロンドンに居られることは多くない。

人物は帝國文學賞金賞である、氏の源氏物語はかなり彼地でも好評で、最近は六冊からなる原冊が普及版一冊となつて廣く讀まれて居るやうである。日本の文壇學界にも好評を博し、正宗氏等を嘆賞せしめたことは言ふまでもない。和蘭の萬葉集研究家ピヤソン氏の細君は一部分を和蘭譯にして居る。

さうしてワエレイ氏はもと大英博物館につとめて居る中に、日本語にも習熟したらしいが、大英博物館には日本に關する美術の外に、多くの日本の書籍もあるので、大英博物館からワエレイ氏の如きが出たのも當然であらう。大英博物館の日本の書籍はシーボルトの蒐集が千八百六十八年に入つたのを基礎として、千八百八十二年にはウイリヤム・アンデルソンによつて集められたもの、またアーネスト・サトウ氏の蒐集も加はつて居る。千八百九十八年にドクラス氏によつて書目をあげ解題を加へた書が出來て居るが約五千部の日本書がある。後增補一冊も出來て居る。天草版の平家物語、伊曾保、金句集(以上一冊)の珍本もあり、その他日本文學の本文も大體そろつて居る。この目錄はヨーロツパに於てなつた最大の日本書目であると、ドクラス氏も言つて居るが、注目すべき業績である。

またロンドン大學の附屬の東洋語學校には吉武氏が日本語を教へて居られるが、一體に英國では大英博物館のやうな日本に關するいゝ文獻を多く有しながら、大學では日本語や日本文學の講座が殆どないのは殘念である。たゞ私の在英中には矢代教授が日本美術の講義を各大學で巡回的に行つてゐられた。かういふ企てが更に盛んになることが望まれる。

三

北米合衆國ではボストンに日本美術に關する資料が最も多く、また日本文學研究も盛んである。それはボストン美術館と、ハアバード大學に於ける研究室とがあるからである。

ケンブリツヂ街のハアバード大學にエリセイフ教授を訪ねたのは三月十二日であつた。大學の一般圖書館の隣りに支那、日本研究室と歴史の研究室とがある。支那と日本の研究室はエンシン・インスチイチウトとなつて居る。エリセイフ氏はハアバード大學の日本語の教授である外、この研究所の主任のやうな位置にあるのである。氏は明治四十五年頃の東京帝國大學の國文科の卒業生である。上田萬年博士芳賀矢一博士等の教を受けられたの

である。刺を通ずるとエリセイフ氏は居られて、その研究室に通された。ロシヤの帝政時代の貴族の出身だけに人物も寛厚で圓滿である。長くパリーのソルボンヌ大學に日本文學を講ぜられたが、二年ほど前、こちらへ來られた。まだ兩方に位置があることなど言はれる。

先づ支那日本研究室であるハアバード・エンシン・インスチイチウトに就いて語られる。このインスチイチウトはチヤールス・フオール氏が、五百萬ドルを寄附したのによつて設立したのであり、支那を中心とし、日本その他の東洋諸國の文化の研究を行ふことを目的として居る。一年に五千弗書物を買ふが、その率は支那に關するもの七割五分、日本に關するもの二割、その他は五分である。さうしてこの研究所から支那の各所の大學七所に補助をするとともに研究生を派遣して居る。その中には日支交通史を研究して居る學生もあるとの事である。

大學の講義は日本語、日本文學はエリセイフ氏がすべて擔當して居る。千九百三十六年——七年にかけては基礎日本語として一年では朝鮮總督府編の日本小學讀本を用ゐ、前半に三冊、後半期に三冊をよむといふ。

後半期には讀本二時間文法一時間を行ふ。大抵漢語を一年習つた上で日本語を學ぶから漢字を多く知つてゐるので早く日本語に習熟するといふ。一年に漢字を約千字覺えるといふ。二年では夏目漱石の社會と自分、竹取物語等を教へる。文法は山田博士の日本文法講義を用ゐてゐられた。

その他日本文化史の講義もあつた。日本語の演習等もあつた。支那語の方は日本語よりは多く、エリセイフ氏は支那語の方も數時間講じて居られる。日本語の方は大體二年で終つて、三年生はないといふ。それから書庫を案内していたゞいた。

閲覽室には學生が多く自分の机をもつて研究してゐた。そこのカードは相當に完備してゐて、書名と作者名、とになつて居り、作者名の方にはその生歿年代が一々記してある。單行の書物に對して、叢書本には一々カードに色が付けてあるので便利であつた。漢字の四隅番號化檢字法といふ間宮不二雄氏が記した日本の書物が備へてあつた。日本の書庫には現代刊行されて居る書物はかなりよく完備して居つた。前田家本の複製も備へてあつた。雜誌の完備して居る事はエリセイフ氏も誇つて居られたが、國學院雜誌や考古學雜誌や史

學雜誌、國語と國文學、思想、改造、中央公論、國民の友その他全部そろつて居る雜誌が多い。當書叢書も先備して居た。

支那に關する文獻も數多くあつた。莊子の如き書入のある古版本があつた。

一通り觀て居る中に正午になつたので、エリセイフ氏と大學の食堂で食事しながら話は文學研究の事、日本の大學の事などが出た。エリセイフ氏は種々この世の打擊から經濟的にも打ちひしがれて勉强も出來なかつたが、これからは勉强したいと言はれた。氏は日本語の文章法の研究をまとめて見たいと言はれた。私ははしなくもパリーのアグノウエル氏の日本言語の研究を思出した　佛蘭西の文學研究として言語美學的な傾向が盛んになりつゝあるといふことを言つたが、その點で日本文學研究家も言語的な方面に着目するやうである。たゞアグノウエル氏は東洋語の比較から純粹語學的に進まれるやうに見えたが、エリセイフ氏はアグノウエル氏のやうな言語學的でなく、言語美學的な方面に進まれるであらう。エリセイフ氏の日本趣味に深い點から言つてもたしかに藝術的な所がある。その意味でエリセイフ氏の文章法といつたのも言語美學的な方面からの日本文學の研究をたど

る事であらう。氏の東大の國文科の卒業論文が芭蕉であつた事なども思出された。言語美學的な研究といふ點から言へば、定家の美論の如く言葉のつゞけがらの上に重きをおく見解の如き言語美學といふ立場から言へるであらう。芭蕉のさび・しをりの如きもこの方面から相當說明されるべき點が多いと思ふ。エリセイフ氏との話はこの點からも興味深いものがあつた。氏は上田萬年先生を思出し、藤村先生の講義を聽いた頃の思出をいろ〳〵語つて居られた。

樓庭を歩きながら青年時代七年間をすごした日本から多くの感化をうけて居ると言はれた。この大學も古く、今年九月、三百年祭が行はれ、日本からも姉崎博士や高柳教授など列席される筈であるなど語られる。氏も今年十二月から支那にゆき、日本に本年五六月ゆくと言はれた。まことに寛厚な人がらをなつかしく思つた。

二日ほど過ぎてからこゝのフオツグ・ムウゼアムのウオーナア教授の助手をして居られる野中氏の案内で再びハアバード大學にゆき、ムウゼアムの東洋美術を觀賞した。ウオーナア教授は非常に日本贔屓の方である。日本美術に詳しく天平美術に關して立派な著書も

あられる。氏とあつた時も天平彫刻と鎌倉彫刻との間に彫刻史の空間のあることや、彫刻の技術の方面なども話に出た。

ハアバード大學に於て、日本研究の盛んであることを心から祝せずには居られない。

四

ボストンでは美術館に日本美術を見た。第一日はこゝの美術館の一部を見たが、第二日には全體を一通り見た。その中、日本美術の所には能衣裳、その他、數多くあつたがわけて繪卷物として、平治物語繪卷は逸品たるを失はない。その他繪卷物にはうたゝね草紙繪卷と先年こゝに將來された吉備大臣入唐繪卷とがあつた。浮世繪の所には各時代の代表的な作が出て居つた。何分五萬枚もある中の一部分であるから、これだけでこゝの浮世繪の全貌を探すことは出來ない、がなほ初期のものなど珍らしいと思つた。ことにこゝで注意されるのは隆達節を書いた屏風であつて、これは隆達自筆といふ事で、歌謠史の上には重要なる資料であることは日本の學界にも知られて居る。

一通り見た上でこゝの東亜研究室をたづねて平野女史にあつた。女史は五十歳頃に見えたが、こゝでアジヤ部長の富田氏を助けて浮世繪を研究して居られる。なか〳〵自信をもつて居られるらしく、室町時代の繪畫でこゝにあるものを昨年頃展覽した、その時の目錄を見せられた。精巧な寫眞集でなか〳〵よいものがある事を知つた。それよりも自分の驚いたことはこゝに江戸文學の資料の相當に豐富だつた事である。繪畫附も古いのがあり、表紙も相當にある。明和七年の中村座、明和八年森田座の顔見世の繪畫附があり、勝川春章が書いて居る。天明五年の千代菊音頭淨瑠璃、天明五年の雪嬌竹振袖源氏(中村座顔見世)の繪畫附もある。元祿十二年の延命壽はこの頃の俗語をいろは順に集めたもの、辭書としても珍らしいものである。第二日もこゝに終日ゐて、假名草紙や浮世草子を見た。ゆや物語、鞍馬物語(一本菊)、信田草子その他珍らしいものもあり不忍文庫の印のあるのも相當にある。伊勢物語の光悅本もあり、西鶴のものでは永代藏、武道傳來記などあつた。第三日は黃表紙を調べたが京傳のもの多く更に馬琴、三馬、一九などのもの、楚蘭道人その他のものも多い。時間のあるだけ目錄をとつておいた。

思ふにボストン美術館は美術に於て日本の逸品が最も多く入つて居る事は傳聞してゐたが、文學に於ても極めてすぐれたものが多く入つて居る事を見聞した。それも室町時代から德川時代にかけての小說戲曲を中心としてあることに、蒐集も組織的である感があつた。

五

ワシントンではライブラリイ・オブ・コングレスの日本部を訪問する。支那の部にもなか〳〵いゝ本があつたが、私は日本部にゆくと日本部長坂西しほ女史が居られた。かねて女史の事は聞いて居り、日本大使館で齋藤大使にあつた時にも、女史の英譯「亂れ髮」を示された。面著石川啄木の「一握の砂」が內容的であるために非常に成功し評判もよかつたに比して「亂れ髮」はまた最近出たばかりであるし、それに內容的でないから「一握の砂」ほどの評判はないらしいがと言はれた。大使はそれにひきつゞいて維新の志士などの寸言など內容の深いものを譯譯することの意義の深い事など言はれたが、大使の言はれる如く、內容的なものほど、外人には理解し易いであらう。こんな點で坂西女史が和歌その他日本文學

の紹介に努力して居られる事は知つてゐたためであるが、遂つて見ると如何にも聰明そのものやうな女性であつた。英語が極めて堪能ですでにドクトル・オブ・ヒイロソヒイをも得て居られるのであつた。萬葉集を先づ集めて居ると言つて、萬葉集に關する書物は大抵そろへてあつた。古寫本、古版本は別として活版本はそろつてゐるやうであつた。その他一般の國文學の書物もそろつてゐた。私は萬葉集めやうにして各種の文獻が整理されてそろつたらと希望した。

さうして女史は側ら種々の著作をして居られる。日本歳曲に關する外國人の論文、著書目錄を作つて居られた。これは神樂、催馬樂等から田樂、能樂等をへて、淨瑠璃、歌舞伎等に至る全部の目錄であり、沼澤氏の日本文學史表覽の外國文論文目錄を補ふものも相當ありさうである。「一握の砂」と「亂れ髪」とは明治の代表歌人として啄木、晶子氏についで伊藤左千夫、島木赤彦、齋藤茂吉、北原白秋、四氏の代表歌集の譯と併せて完結さるべきもので完成の日をいのつてやまないものがある。「一握の砂」と「亂れ髪」との四六版のこつた裝釘も女性らしい。「一握の砂」には齋藤大使の懇切な序文もある、忘れ女史は近く狂言め

譯も出される由である。日本文學の紹介といふ點に我々は女史に對して感謝しなければならない。

ニウ・ヨークではコロンビヤ大學を訪ねた。こゝの舊圖書館に日本支那の圖書室があつて、日本の書物も多くある。角田氏といふのが、こゝのライブラリイに居られるのである。こゝの圖書も日本美術に關する書籍も多いが、文學のも多少存して居り、藤村博士の日本文學大辭典もそろへてあつたし、また外國に於ける日本文學研究書もそろつて居つた。ウエレイ氏の源氏物語の英譯もそろつて居つた。こゝの大學にも日本語の達者な學者が居ると聞いたがあはなかつた。

更にシカゴではアート・インスチイチウトを訪ねた。こゝにも日本に關する繪畫など相當陳列されて居つたが、探索はじめ、多少疑はしいものもあつて、どうもぴつたり來なかつた。私はボストン美術館の平野女史から紹介をもらつたグンサルス女史をたづねた。もう五十を越した上品な老婦人である。日本文學の書物が見たいといふと、それらを收めてある部屋に案内してくれ、どういふ方面の書物を特に見たいかと言はれるので、物語とい

つたら、その方面の本朝を聞いてくれた。明暦四年版の京童、寛文十一年版の往生要集、宇津保物語の俊蔭卷の版本、酒竹文庫藏書印のある首書方丈記、その他等見る。多くは版本であり、また德川時代の版本である。戸田氏の目錄には、版本の發達史的な目錄を作つて居られ、挿繪のある版本を主として挿繪の方から種々の說明や價値批評を行つて居られるのは面白い試みである。書物の數は相當にあり、立派な一部の目錄になつてあるが、ボストン美術館のそれに比すれば質は落ちるやうである。しかしなほ注目すべき蒐集であることは勿論である。浮世繪も相當にあるとの事であるが、ボストンには比較にならないだらう。多少は陳列してあつた。女史は親切に私のいふものを目錄によつて出してくれた。女史は日本文學に就いては相當の知識を有して居られるやうである。

シカゴの大學にも日本憲法や日本文化に關する講義はあるとの事であつたが、日本語としての講義はないやうである。

六

更にバークレイにあるカリフオルニヤ大學にも日本語の講義があるといふので訪れたがその講義をされてゐた市橋氏は他大學に轉せられたとの事であつたが、恰度この地方の各大學に日本美術の講義を巡回的に行つて居られる原田安郎氏が、私の訪れた日に講義されてゐたので、それを聽講した。この地方の熱心な日本人も相當に多く聽いてゐた。太平洋岸には日本人も多く住し、それ等の第二世に對する日本語教育といふ點は相當に大きな問題であることを知つた。

最後にハワイ大學には、四月七日、こゝの日本文學を教へて居る國友氏に案内されて參觀した。東洋研究所といふ建物は芝生の中にたてられて居る。先づ日本語の研究室に通される。狹いが窓から芝生の明るい光が見渡される。日本語を教へて居る上村征生氏も居られる。上村氏は來られてから二年、國友氏は七年になられるといふ。アンガー・グラジュエートで二年教へて、更に一年教へるといふ。田上新吉氏の鑑賞讀本を用あてゐた、これには志賀直哉の文章や芥川龍之介の文章なども收められてゐた。修善寺物語なども用ゐるとの事である。學生をあつめて芝居をさせるといふ。國友氏は東京帝國大學に居られた頃の

調査の小學國語讀本に現れる語の現れた回數を綿密にしらべたものなど示された。それからこゝの圖書部に案内される。

學生が索引カードで引出した本を自由にさがしてくるのである。熱心に讀書して居る。日本の圖書は三階にあつた。叢書が多いやうであるが、故實叢書や、日本風俗圖繪などもある。校本萬葉集、廣文庫、帝國文庫、有朋堂文庫なども見える。一年に國文學のもの四五百圓は購求するといふ。これから國際文化振興會の方から、補助が出るやうになつたとの事であるから、一層充備してくるのも近い事であらう。國友氏は現代日本文學思潮を研究し、現代詩を主としてゐられるやうである。歴史の方では清岡氏が短期で日本文化史の講義をして居られる。まだこの大學も出來てから二十年ほどにしかならないやうであるが今後日本文學などもより多く研究されることであらう。

北米合衆國は獨逸國とならんで大學に日本語を講ずる所も多く、またボストン美術館をはじめ日本の古典籍を藏する所も多いことを感じた。（昭和十一年六月、文藝春秋）

三、日本文學の世界性

一

一國文學の構成要素として、言語性、藝術性、民族性の三を擧げて考へて見たことがある。思ふに文學は言語による藝術である點から見て、言語性と藝術性とは缺くべからざる要素をなして居ることは言ふまでもない。さうして文學は如何なる文學にしても、ある國の文學である。グンテにしてもシエクスピイヤにしても、それ〴〵國に屬するのである。この點は生ける言語が殆どすべて國々の言語であることと關聯して、文學の國家性、民族性は他の藝術に於てよりも一層多くの制約を文學の上に與へることと思はれる。さうして民族性

はその國の歴史や風土の影響をうくること多い意味に於てその國の文學もその國の歴史と風土との影響をうけることの多いのは言ふまでもないのである。かくて日本文學に於ては言語性と藝術性と民族性といふべきものの三位一體の上に構成されて居るといふことが言へるのである。然らばかういふ日本文學に於て世界性といふべきものが考へられるとしたら如何なる點にあるであらうか。

日本文學の世界性、もしくは日本文學を世界文學として見ることは近時次第に考へられて來て居る點である。歐米に於ける日本文學研究家のカール・フロレンツ博士を獨逸のハンブルグに訪れて、日本文學に就いて種々語つた折にも萬葉集の文學的價値を認めて、世界文學の價値があると言つて居られた。源氏物語がアーサア・ウェレイ氏によつて全譯された場合にも源氏物語の世界文學としての價値を西歐に於て說かれたやうである。更に能や歌舞伎の如き日本藝術の價値に對しても同樣のことが考へられつゝあるやうであり、また明治以後に於て漱石等の價値が著しく認められて來て居ることから言つても、日本文學の世界性もしくは世界文學的價値が次第に認められつゝあるかに見える。このことは萬葉集

や源氏物語等のある作品や作家に就いて言はれるとともに、日本文學全體が世界文學として認められて來つゝあるとも言へるのである。日本文學研究が近時歐米に於ても相當盛んになり、萬葉集や源氏物語の如き、日本人にしてもこれに全譯を施したりすることが容易でない作品に對して、歐米人が全譯をしたり、またビヤソン氏の萬葉集の如き詳しい註釋を續けてゆくやうになつたのは、單に異國趣味的な態度のみではなくして、眞に日本文學の價値を認めて來つゝある結果と見るべきであらう。日本文學の世界性もしくは世界文學的價値といふことは今日に於て十分考へられるべき點であるのである。

文學の世界性もしくは世界文學的價値といふことは、一の方面から言へば藝術として文學としてすぐれて居ることの上に立つて居ることは言ふまでもない。ムウルトンの世界文學の中で聖書やホーマアやダンテやシエクスピイヤ、ゲーテ等を擧げて扱つて居るのも是等が世界の代表的文學作品といふ程の意味であらう。然しこの世界の代表的文學作品となるべき作品は如何なる點にすぐれて居るかといふ點を具體的に考へると種々の點が擧げられるであらうが、こゝには二の點から少しく考へて見たい。

二

一はある程度の普遍性であり、人間の誰れもが理解することの出來る內容なり形式なりを有することである。

第二としては世界文學に於てもその國の特性をはつきり有する事によつて、世界性若しくは世界文學的價値が生ずるものと思はれる。第一の點から少し考へたい。この問題は日本文學の普遍性といふ事になるが、文學である以上は如何なる人間にもある想像の美と感動とを與へうる事は豫想される。只ある特殊な民族や人間にのみ了解される事はいふまでもないし、そこに一方の民族的特殊性が生じてくる。そして一般性若しくはすべての人間に理解される點に於ても本質的な意味でなく、部分的若しくは表現の材料等の關係から一般的な理解をさまたげるものがあるのである。藝術の上でいへば文學にくらべて線や音や色等からなる繪畫音樂等は言語の樣な特殊的障礙がないために早く一般的に理解されるのである。日本の藝術の中でも浮世繪は早くから西歐人に理解されて居り、その價値が認め

られて居るのもそのためであらう。もとより浮世繪には日本繪畫の中でも基調とする所が比較的低俗な感覺を主としてゐる點もあり、大和繪等に比べて早く理解されたのであらう、兎に角繪畫は一般的に早くある程度の理解を得られると思ふ。又繪畫に限らず、鍔とか、根付等が西歐に早くから研究されたのも造型的な性質のためであらう。文藝的な方面からいつても演劇等は文學性のみならず、舞踊性若しくは音樂性等を含んでゐるために、それ等と相まつて早く理解され得るのである。能や歌舞伎が西歐人に早く推賞されたのも種々の理由はあるが、その點も大きな動機であらう。又純粹文學の中では詩歌に比べて小說は早く理解されるのは同じく言語的な點はありながら、特殊の韻律その他を有しないために外國語に譯譯する事も容易であり、それ丈理解も容易であるとみられる。

もとより詩歌には音樂的な韻律を有するから、原文を朗讀して純粹感覺的方面だけで味はふとすれば、散文である小說等よりもある程度の理解は早く得られるわけであるが、言語の理解と相まつてその言語の上にたゞよふ情緒を味はふとすれば、小說等よりも理解は容易でないのである。言語藝術として考へれば小說の方は情緒內容もあるけれど、意味的

觀念内容がより豊富であるから、外国語にも傳へ易く理解も容易であるのである。是に對して詩歌の方は觀念内容も存するけれども、情緒内容の方が主であるためにそれを言語的表現を通して傳へる事も容易でなく理解も困難である。源氏物語の英譯が西歐に於て非常に好評を博したのも散文であるために文藝としての源氏物語をある程度まで容易に傳へて居るためであらう。萬葉集の譯詩等は、萬葉集の文藝性を傳へる事が容易でないために註釋としての意義は多いのであるが、それ自身を文藝として譯詩するのが容易でないのである。

もとより詩歌としての範圍でいへば、萬葉集は古今集に比して譯詩も容易であり理解もより可能であらう。即ち萬葉集の歌は長形式が多く、古今集等に比べて觀念内容も豊富であり、又韻律も比較的素樸で單純であるから、譯詩も古今新古今等に比べれば容易である筈である。この點は最近ワシントンの議會圖書館の坂西女史が石川啄木の一握の砂と與謝野晶子氏の亂れ髪とを譯詩した場合、一握の砂の方が好評を博したといふのも南青の歌風の相違が理解を異にして居る事も一つの理由であらう。この事は日本詩歌の中でも和歌と

俳諧に於ても相違があらうし、又和歌や俳句や近世の俗謡等の間にも相違があるであらう。即ち擬古的傾向等は近世の特殊な情緒を内容とするために一方からいへば理解が容易でない様である点、又その情緒内容が俳句等に比べて通俗的であるために理解の容易なるものがあることも浮世絵の如きであるかも知れない。かゝる文學藝術に於ける西欧人に理解される事の難易なことはその文學の本質的價値からいへば第二義的の問題の様であるが、併し日本文學の世界性を考へるためには一應考慮に入れるべき點であらう。夢くとも欧洲に於て考へられ且つ是れる日本文學の世界性、若しくは世界文學的價値といふ事はかゝる點が關係して居ることを考へられるのである。

三

暫くの間く日本文學の世界性を考へるためには西欧人に容易に理解されるといふ一面、即ち文學の理解や、享受の方面に於て容易であり、共通的な方面といふ事が考へられてくるのであるが、併しこの點はあくまでも第二義的な問題であつて、より本質的には日本文

學には日本的特性を有する事によつて始めて世界性を獲得する事が出來る。西歐人にしてもその文學の形式内容に於て西歐文學と共通する方面のみであればそこに魅力といふものが起り得ず、また價値も認められないであらう。西歐文學なり日本文學なりの獨自的なものがあつて、始めてその價値を認め得るのである。源氏物語が世界文學的價値を有するといふ事は西歐に於ける人間生活からみて共通なるものがあるにしても、併しそこに日本の獨自の歴史性と風土性との上に生れ出た日本獨自の民族性を根柢に有する所に西歐人を引きつけ、又その價値を認めしめたのである。能や歌舞伎が西歐人に推賞されるのも西歐の演劇にみられない所の日本獨自の演劇的性質を有するためである。この事は日本文學の立場に於て世界性を主張する場合に西歐人にある程度の理解を認めた上で、日本的獨自性を主張する事に據つて世界文學の中にある意義を知るべきである。そこに萬葉集や源氏物語が日本に於ける最高の文學であるのみならず、世界文學の中に於ても獨自な他に比類なき位置を要求する事が出來るのである。

この日本文學に於ける民族性と世界性との關係は文學に於ける個性との關係に於ても同

樣である　日本文學は全體として日本の言語によつて表現される文學であり日本的特性といふ事はその根幹をなすものであるが、その日本的特性を中心とする事は決して日本文學の個々の作家や作品の個性を輕視する事ではない。日本文學の秀れた作品や作家は夫々偉大な個性を有した作品作家である。源氏物語には紫式部の個性が明瞭にみられるのであり、そこに他の作品と異なつた點があるのである。源氏物語が宋穗物語に比して秀れて居るのは、この源氏物語の個性にあるといつてもよいのである。近松や西鶴の作品が日本文學に於ける偉大なる作品である事に異論はないが、それは近松や西鶴の他の作家と異なつた秀れた個性を通してみられるのである。他の作品に比して秀れた個性のない作品は結局平凡である事をまぬがれないのである。さうしてかくの如き個性を具へた上で而も日本的個性を自から具へてゐる所に、近松や西鶴の偉大なる點もあるのである。かゝる意味で日本文學の秀れた作品作家は何れも個性を有して日本的特性を有してゐるのであるが、更にいひかへれば日本文學の秀れた作品は日本的特性を中心として、その中に個性と民族性と世界性とを調和してゐるとみるべきである。日本文學は日本的特性を根幹としてそれとの調和

概念に於て世界性を有してゐるのである。ある立場では個性をなくする所に民族性があり、民族性をなくする所に世界性があるとも考へられてゐるが、個性をなくした民族性は抽象概念であり民族性を失つた世界性も亦抽象概念にとゞまるのである。世界語といふのは夫々の國語が世界的進出をみる事によつて世界語となりうるのであつて、その言語の民族性を失ふ事ではない。その民族性を失へばその國語の消滅である事はあまりに自明な事である。日本人が世界人となる事は、日本人としての特性をあくまで有する事によつて世界人となるのである。それと同じく日本文學の世界性著しくは世界文學的價値といふことはあくまでも日本文學の構成要素としての言語性・藝術性・民族性の融合の上に立つて日本的特性を有しつゝ、世界性と調和する事に違ひないのである。（昭和十一年十二月、文學）

四、ウエレイ氏の英譯源氏物語評

日本の種々の文學作品が、外國語に飜譯せられた事も既に多い。古事記や記紀の歌や萬葉集や平安朝の物語日記隨筆や謠曲や近世の戯曲小說、明治以後の文學もそれ〴〵多少は譯せられて居る。バシル・ホール・チエムバレン氏の英譯古事記の成つたのは明治十六年のことと思ふが、近時では土居光知、大森安仁子兩氏によつて更級日記、紫式部日記、和泉式部日記が譯せられ、加藤玄智、ゴルドン夫人、星野日子四郎三氏によつて古語拾遺が譯せられたのは記憶にも新しく有益にも思つた。かくして日本の文學が世界に擴められることは喜ばしい次第である。が今度アーサア・ウェレイ氏によつて源氏物語の全部の英譯が企てられたことはそれが至難の業であるだけに殊に喜ばしく思はれる。

departed lady, save the daughter of the Empress Mother. She indeed is a lady of rare beauty.' So she spoke to the Emperor, and he, much wondering what truth there was in it, listened with great attention. The Empress Mother heard of this with great alarm, for she remembered with what open cruelty the sinister Lady Kokiden had treated her former rival, and though she did not dare speak openly of her fears, she was managing to delay the girl's presentation, when suddenly she died.

The Emperor, hearing that the bereaved Princess was in a very desolate condition, sent word gently telling her that he should henceforward look upon her as though she were one of the Lady Princesses, his daughters. Her servants and guardians and her brother, Prince Hyobukyo, thought that life in the Palace might distract her and would at least be better than the gloomy desolation of her home, and so they sent her to the Court. She lived in apartments called Fujitsubo (Wistaria Tub) and was known by this name. The Emperor could not deny that she bore an astonishing resemblance to his beloved. She was however of much higher rank, so that everyone was anxious to please her, and, whatever happened, they were prepared to grant her the utmost licence: whereas the dead lady had been imperilled by the Emperor's favour only because the Court was not willing to accept her.

His old love did not now grow dimmer, and though he sometimes found solace and distraction in shifting his thoughts from the lady who had died to the lady who was so much like her, yet life remained for him a sad business.

Genji ('he of the Minamoto clan'), as he was now called, was constantly at the Emperor's side. He was soon quite at his ease with the common run of Ladies in Waiting and Ladies of the Wardrobe, so it was not likely he would be shy with one who was daily summoned to the Emperor's apartments. It was but natural that all these ladies should vie eagerly with one another for the first place in Genji's affections, and there were many whom in various ways he admired very much. But most of them behaved in too grown-up a fashion; only one, the new princess, was pretty and quite young as well, and though she tried to hide from him, it was inevitable that they should often meet. He could not remember his mother, but the Dame of the Household had told him how very like to her the girl was, and this interested his childish fancy, and he would like to have been her great friend and lived with her always. One day the Emperor said to her 'Do not be unkind to him. He is interested because he has heard that you are so like his mother. Do not think him impertinent, but behave nicely to him. You are indeed so like him in look and features that you might well be his mother.'

And so, young though he was, fleeting beauty took its hold upon his thoughts; he felt his first clear predilection.

Kokiden had never loved this lady too well, and now her old enmity

源氏物語はかつて末松謙澄氏によつて一部分譯譯せられた事はあつたが、全部は完成されなかつた。然るに今ウェレイ氏によつてこの事業が企てられたことは、日本人としても、また祖國文學の一學徒としても、厚く感謝しなければならない所である。

平安時代の文學はその文章の複雜なる點に於て、またその生活の今日と非常に異なる點に於て現代の日本人にとつても容易に入り得ないものである。源氏物語は平安時代の文學の中では既に多くの研究がなされて居つて、宇津保物語や蜻蛉日記等に比して入りやすくはあるが、その婉曲な優雅な表現は決して理解しやすいと言ふことは出來ない。亡くなられたアァネル氏がかつてある席上で源氏物語は枕草子よりは遙かに難しいと言はれたことを思ひ出す。簡潔な枕草子に比して源氏物語が、日本人以外のものには殊に難解であることは直ちに想像せられる所である。而してこの長篇をよみこなすだけでも餘程の勞苦と學力とを要することは言ふまでもない。ウェレイ氏がこの難關をおしのけて、この事業を企てられたことはたゞたゞ感歎に値する。ウェレイ氏は先きにも高業集や梁塵秘抄の一部の譯を試みられて日本語に對する深い學識を示された。大英博物館の東洋部に居られる年齒

壯なる篤學者であると聞いて、この事業が完成される事は、期して待つことが出來る。

而して今度成つたのはその第一卷で「桐壺」から「葵」までの九帖の譯である。その序には――『源氏物語は五十四帖から成る。最初の四十帖は源氏の生涯を描き、後の十三帖は彼の子の薫の生涯である。源氏の死の記述を含んで居る筈の第四十一帖はたゞ題名が存するのみで決して書かれなかつた。私の譯は恐らく六卷になるであらう。第七卷に於て私は著者の日記(紫式部日記)を譯し、作者としての彼女の位置を論じ、また彼女の生活した時代に就いての事項を述べる。源氏物語の知きまだ餘り知られてゐない作品の場合には、譯譯に先だつて作品や作者の一般的な論述をするよりも、後に行ふ方が明らかによいであらう。』――とある。氏の計畫や態度はこれによつて知られる。

更に本文の前に第一卷に見える主要なる人物の說明と系圖とを加へてあり、卷末に紫式部の年表と、伊勢の齋宮と賀茂の齋院に就いての說明が備考として加へてある。年表の中に疑點をうつてはあるが、紫式部は西紀九百七十八年(天元元年に當る)に生れ、九百九十四年(正曆五年に當る)宣孝と結婚し、宮中には千五年(寛弘二年に當る)に仕へたとして

ある。譯者が如何なるテキストにより、また如何なる註釋書によつたかの記述は見えないが、それ等も後に示されることと思はれる。たゞ桐壺の巻の脚註に、

此巻に於て、紫はなほいくらか未熟な先輩の影響のもとに、宮廷の年代記と傳奇的な神仙譚との混淆であるやうな樣式のもとに書いて居る。

とあり、この巻を餘りすぐれてゐない巻であるやうな意見を述べて居られる事によつて、譯者の源氏物語觀の片鱗を伺ふことが出來るやうに思はれる。

本文を見ると、この複雜なる文脈をよくよみこなされて原文に大體忠實に、而もその味を出されつゝ譯されてゆく態度は敬服すべきものがある。「帚木」の巻は源氏物語の中でも難解な部分であるが、よく文の構造を理解されて居る。たとへばはじめの部分では、語り傳へむ人のものいひさがなさよ」などは出てゐないが、あの分りにくい文脈をあれだけ論理的に譯してゆかれるのを見ても、原文をよくつかんで居られることが分る。雨夜の品定めの部分の如きも嘆然と譯してゆくので、却て原文より意味のはつきりして居る所がある。一體に複雜な論理的に曖昧な文脈を理解してはつきり譯せられてゆく所に特色があるので

はたいかと思ふ。（もとよりこれは平安時代の古文と英文との相違でもあるが。）しかし叙景の部分など相當に氣分が出て居る。「若紫」の卷で稚い紫の上が雀をにがして悲しんで居る所など、生々として描かれて居るやうに思ふ。

たゞ些少の缺點を探すならば文脈の曖昧な文章をはつきり解釋するために忖度や多少の誤をなして居られる所もあると思はれる。たとへば「夕顏」の卷で、

立ちさまよふらむ下つかた思ひやるに、あながちに長高き心地ぞする。いかなるものの集へるならむと様かはりておぼさる。

とあるのは曖昧な解釋に苦むやうな表現であるが、これを譯して

At first he thought they had merely peeped out as they passed; but he soon realized that if they were standing on the floor they must be giants. No, evidently they had taken the trouble to climb on to some table or bed; which was surely rather odd! (p. 92)

とあるのははつきりはするが、忖度に過ぎてはゐなからうか。またこの時代の物語に見え

る家の構造や衣服などにはなほ解釋に苦しむ點が少くないのであるが、さういふ點にも多少の缺點は見出される。たとへば「若紫」の卷に紫の上の服裝を記して「白き衣山吹などのなれたる着て走り來る女子」とあるのを

The girl running into the room dressed in a rather worn white frock lined with stuff of a deep saffron colour (p. 140)

の如く譯せられたのは從ひかねる。その他語彙の上にも「めざましきもの」を the upstart who had disturbed their dreams" (p. 17) とした如き多少直譯に過ぎてどうかと思はれるものもある。かかういふやうな多少の缺點はもとより深く問ふ必要はない。

ウエレイ氏がこれだけの事業を企てられ、またこれだけの成果を擧げられて居ることを深く尊敬するものである。なほ細く全體にわたつて批評を試みることは別に其人があると思はれるから、自分はたゞ此書を一瞥して得た感想のみを述べて、更に氏の努力によつて全部の譯が完成せられ、この日本文學上の貴重なる作品が廣く世界に讀まれる日の一日も近きことを祈つてやまない。（英譯源氏物語第一卷の刊行せられし大正十四年頃記す）

五、ウエレイ氏と語る

英吉利に於ける日本文學の研究家としてのウエレイ氏の名を聞いてから、既に久しい年月がたつた。氏の源氏物語第一卷が出た時、一讀したのが私のウエレイ氏に關心をもつた始めであるが、その時にウエレイ氏はすでに能の英譯その他で相當に名を知られてゐたのであつた。源氏物語の第一卷に對しては五十嵐力博士の詳しい批評も出たし、私も當時ある雜誌に一言したことがある。その源氏物語も數年前完成して日本の學界や文壇を賑はした。源氏物語の原作を讀むよりも英譯の方が面白いといふ批評も正宗氏等によつて言はれた。

ウエレイ氏はその後支那文學の方に進んで、詩經その他の支那文學の英譯をされて居ると、倫敦で姉崎博士からも聞いたが、なほ國文學にも全然離れてしまつたのではあるまい。

今度の外遊に際しては外人の日本文學研究家に二三逢ひたいと望んでゐたのであるが、その隨一はやはりウエレイ氏に逢ふことであつた。惜し氏は病氣でもあり、英吉利に居ることが尠いとの事で、逢へるかどうかは疑問としてゐたのであつた。

五月の末倫敦に着いて大英博物館の東洋研究家や讀書室に通ふことを日課にするやうになつても、氏が博物館を退いて居られることは殘念であつた。博物館に數年居てスタインの發掘物の整理などしてゐたといふ、版畫を業とする漆原氏にあつた時、氏の博物館に居る頃、ウエレイ氏も居て日本語の研究などして居たが、まったく間に非常な進歩をしたこと、また博物館に居ることを利用して日本文學の研究を行つたことなども聞いた。大英博物館には日本に關する典籍が、五六千部はあり、ドクラス氏の作つた相當に立派な目錄も出來て居る。例の天草版の平家物語・伊蘇保物語・金句集（以上、一冊に合冊されて居る）をはじめ、萬葉集の古版本に書入のある本や、アーネスト、サトウ氏舊藏の八雲御抄古版本その他國文學の主なものはそろつて居る（これ等の二三についてはいづれ別に報告したい）從つてこゝに居られることから、日本語や日本文學を研究されるやうになつたのは自

無であらう。ウエレイ氏は極めて冷靜な人で、源氏物語の度つて世評高かつた頃、ある人が完成を祝ひ、署名を請うた所、一言々言は寡默々として署名をして通りすぎたことなども聞いた。その後ウエレイ氏と親交あり、英吉利の大學に日本美術の講演に來て居られる美術學校の矢代幸雄氏にあつた時も、ウエレイ氏が極めて冷靜な人で、コールド・フイシユと友人の間によばれて居ることなどを話された。しかし極めて篤學な眞摯な人物であることも聞いた。

倫敦では矢代氏と始終往來してゐたから、ウエレイ氏に逢へるやうにたのんだが、ウエレイ氏はスイスの方に居られる頃で、倫敦には居ないので逢ふ機會もなかつた。その中八月もすぎ、九月にもなつて、倫敦を去る日も近づいた頃、矢代氏からウエレイ氏が歸つて來て逢はれたこと、その折源氏物語の近頃ひろく知られた古寫本のことを聞かれたことなど言はれた。それから間もなく逢つた一高の井上思外雄氏もウエレイ氏にあひたいとの事であつたので、九月五日矢代氏にウエレイ氏の都合をきいてもらつたら、今晩あふとの事であつた。午後七時半からオツクスフオード・ストリート近くのイソダ・ベラといふレス

トランで夕食を共にしながら話をすることになつた。夕方矢代氏とイソダ・ベラにいつた。九月も五日になると、もう秋である。ハイド・パークの芝生も色があせて、倫敦へ來た當時から見ると何とたくうらされたやうに見える。その上今晩は珍らしく雨がしと〳〵と降つて一層しめやかな感じがした。レストランに着いたのは七時半すこし過ぎてゐたので、ウエレイ氏はもう來て居られた。澤山居る客の中から、一人のまだ四十餘り位に見える(實際の年は知らないが)英國紳士が矢代氏と挨拶されたのがそれであつた。私にも御紹介(ハンドウ)ようと言はれたので私も挨拶した。私はウエレイ氏と向ひあつて席をとり、矢代氏は私の隣りに席をとられた。井上氏はまだ來ない。矢代氏が見しくとりなして下さるので、私も餘り固くならずに居れた。矢代氏が前に送はれた時、聞かれた源氏物語の古寫本に關しては、近時源氏物語の古寫本が種々出て來たが、尾張德川家の河内本源氏物語は近く複製がなつて一般によく知られたこと、さうして京都の東山御文庫にも源氏物語の古寫本があることなど矢代氏に話してもらつた。また故芳賀博士の記念事業として源氏物語の校本の事業が行はれ、諸註集成の計畫もあるが、これはまだ完成しないが、校本の方はほゞ完成して居

るといふことを言つたら、誰れが主として行つて居るかと聞かれたので、東京帝國大學教授の藤村博士が中心となつて、池田龜鑑氏が仕事に當つて居る旨も傳へた。私だけでは十分言へないので、矢代氏に言つてもらつたり、補つてもらつたりするので、どうにか通じてゆく。

私にどういふ方面を特に研究して居るかと聞かれたので、萬葉集と文學批評史とを研究して居る旨をこたへた。萬葉集では佐佐木、橋本、武田博士等と校本萬葉集の仕事の一部を分擔したとこたへた。それから英吉利の文學批評史研究について一しきり話が出た後、ウェレイ氏は年代順にした萬葉集があるかと聞かれたので、澤瀉久孝、森本治吉氏共著の年代順作者別萬葉集と土屋文明氏の萬葉集年表が近頃世に出た旨をこたへた。

あれだけの飜譯をするだけあつて、作品の基礎的方面に注意と關心とを持つて居られるやうである。逢ふ前は文士肌の人かと思つたが、逢つて見ると學究肌の人であることが分つた。脊は相當に高く、やせては居られるが、血色はよく病後らしくない。内に沈潛するやうな所、多少の幽鬱さはあるが、時折微笑をたゝへて氣むづかしさうな性格とも思へな

い、しかし冗談などは言はない。篤學眞率で、而も鋭いひらめきのある學者、これが私のウエレイ氏に逢つた第一の印象であつた

その中井上氏が見えたので、食事をあつらへる。私らは矢代氏にまかせたが、ウエレイ氏は好みの品を註文された。氣輕な英語のうまい井上氏が加はつたので一層席はにぎやかになる。

あなたの源氏物語の英譯は日本では非常な評判でしたといふと、ウエレイ氏は何か間違を御氣付になりませんかと言はれた。かう言はれると、平安朝の服裝とか家屋の構造などに就いて、十分明らかでない所から來た誤と思はれる所など、氣付いてゐたこともあつたがこんな場合に一々指摘することも好まないし、そんな細かいことはとても話せないので、文學的に見て非常に結構だと思ひますとこたへた。ウエレイ氏は微笑して居られた。それからは矢代氏からも井上氏からも種々な話が出たが、いづれ氏等からも何かの機會に語られる事であらうから、私は國文學に關係したことで――もつとも話の大部分は國文學に關したことであつた――私が質問したやうな點を書きつけておきたい。

源氏物語の英譯にはどの位かゝられたかと言つたら、第一卷をほどめた時から順次數へてすべてで十一年ほどかゝつたと言はれた。紫式部と清少納言とどちらがお好きですかと聞いたら、清少納言はよくしらべないのではつきり言へないと言はれた。氏は枕草子に就いても述作をされて居るのであるが、如何にも優美なまたいやしくもしない答へであつた。氏の綿密さがこんな所にも分る。堤中納言物語のことを言つたら、いゝ作品であるとこたへた。嘆めづる姫君のことも話に出た。蜻蛉日記はすぐれた作品であると言つたら、うなづいた。私はかういふ心理的寫實的な作品が全部英譯されたら、こちらに大きな驚異を與へはしないかと思つてゐたので、蜻蛉日記の全譯をされることを希望する旨をいつたら否と言はれた。多分しない意かと思ふが、蜻蛉日記を讀んだものなら、そのすぐれた作品であることは認めても、本文の惡いためもあるが、難解なことも氣付くであらう。ウエレイ氏も讀んでその難解さにとても譯されないと思はれたでもあらう。もつとも氏は今支那文學の方に中心をうつして居られるためもあらう。更級日記もすぐれた作であることをウエレイ氏が言つたので、蜻蛉日記よりも易いでせうと言つたらうなづいて居られた。

矢代氏が若目田氏の古今集の譯を御存じですかと言はれた時、知つて居るとウエレイ氏がこたへた。如何ですと更にきかれたら、テリブルとウエレイ氏がこたへたやうである。若目田氏の古今集の全體の英譯本は私の倫敦で下宿して居た宿の主人の著で、千九百二十二年に倫敦で出版されて居る。日本にも有朋堂で昭和四年に再刻されて居ることは、西下經一君からも言つて來て居たので、それを矢代氏にも御目にかけたのであつた。この話についで、日本に居られるボノー氏の古今集の研究などの話も出た。また和蘭で西鶴の好色一代男を研究して居る人の名も出た。西鶴の譯などはむづかしいことも言はれた。なほ藤田德太郎君からその著の夜はのねざめの校本をウエレイ氏に送るといふ旨、手紙にあつたので聞いて見たか、まだ届いてゐないとのことであつた。夜半のねざめが近時はじめて刊行され、この頃研究されてゐることもその折に話した。

その中、ウエレイ氏が萬葉集のヤスコといふ名を言はれたので、聞きかへすと「ヤスコ得たり」と言はれる。私は藤原鎌足の

われはもややすみ兒得たり皆人の得がてにすとふやすみ兒得たり

の歌のことですかと言つたら、それであるとウエレイ氏が言つた。思ふに平安朝の宮廷女流にもなんで、やすみ兒の事を思出されたのであらう。ウエレイ氏は漢語が意味がちがつて日本語として用ゐられるのは興味があると言はれて「緣に」の語を例として言はれた。流石に漢語にも造語の深い氏を思はせた。「ほとけ」といふ語のことも出て、ほとけと訓じた例が萬葉集にあるかと聞かれたので、私は「佛作るまさほ足らずは」といふ歌を思出してあると答へたら、更にほとけの語義の話が出たので、浮屠の家ではないかなど思ひつきも出たが、ウエレイ氏は「け」はスピリツトの意ではないかと言はれた。私は「ものの」の「け」はたしかにスピリツトの意であらうとこたへて、ほとけのけの解釋はなか〳〵むづかしいと話し合つた。

矢代氏が日本語は誰に習つたかと尋ねたら、誰にも習はない、自分で學んだと答へた。なほ氏はこのことに關聯して倫敦大學の東洋學校で日本語を教へて居られる吉武氏の名を擧げてほめてゐられた。吉武氏の假名の研究を知つて居るかといはれたので、まだ見ないといふと、同じ假名でも文字の相違から音が二あると言はれるので、萬葉集の特殊假名遣

の研究のことを言はれたと分る。私は日本の國語學界で近頃萬葉集時代の特殊假名遣の研究が盛んであることをのべ、江戸時代の石塚龍麿の研究があり、明治以後橋本博士がこの研究を獨立して別に繼續されたことを述べ、同じ「ミ」でも違つた漢字を二樣に區別して用ゐて居ることから音が異なるであらうといふことが推測されると語り、十三音は二種の假名遣が用ゐてあるから、音が異なつてゐたと見られるのであり、それ等が違つた音を有するであらうことは韻鏡の研究などから推測されるなど、日本の上代の特殊假名遣の研究の近狀を紹介した。ウエレイ氏は熱心に聞いて居られた。後で聞けばウエレイ氏は漢文の音を熱心に調べて居られるとかで、こんな方面から更に氏の日本文學や日本語の新しい研究にも進まれるのではないかとも推測された。それにしても氏の日本文學研究はかなり專門的になつて居ることを感服した。

その他佐佐木博士からかつて梁塵秘抄を贈られたことなども話に出た。また國文學以外の日本のこと、支那の古典籍のことなども種々言はれたが、今は略しておく。

食事もすみ、あたりも一人へり二人たつて靜かになつた。雨は一しきりはげしく降つた

が、やゝ小降りになる。九時半頃にたつたのでそろ〳〵席を閉ぢようとする。私は持つてきた、高葉集考説を日本の風呂敷につゝんだまゝ、貧しい本ですが、日本をたつ時に出版したからと贈つたら、聞いて目次などを見ながら讀ましていたゞくとうけとられた。さうして風呂敷を裏がへしにしてつゝまれた。席をたつて外套を着ながら私は今夜御目にかゝれたことは非常に喜ばしいと言つたら、ウエレイ氏も非常に愉快な夜であつたといひ、れ握手された。

戸外へ出るとまだ雨がすこし降つて居る。車をよばうとすると、黙してウエレイ氏は左(グッド)樣ならと言ひながら三人に握手して別れていつた。

學者らしい、勿體ぶらない率直な人がらに極めてよい印象を與へられたことは愉快であつた。矢代氏もウエレイ氏が今夜は非常に元氣であつたと言つて居られた。ウエレイ氏の健康も以前よりよくなつて居られることとたのもしく思はれた。まだ〳〵これからも日本もしくは東洋研究に大なる仕事をされるに違ひないと思つた。歸りにとある喫茶店で茶を飲みながら三人で今日の印象を語りあつた。

なほこのウエレイ氏と語つた時の覺書を記すに當つて、ウエレイ氏と逢ふことのためにまた逢つた時に於ても矢代幸雄氏が私どものために非常に盡して下さつたことを深く感謝したい。この覺書はその折のことを備忘のために、出來るだけありのまゝに書いたつもりではあるが、たゞ自分の英語に不甚のため、ウエレイ氏の話を聞きちがへた點もあらうかを恐れる次第である。（九月六日認む）（昭和十年十二月、國語と國文學）

六、フロレンツ博士と日本古典文學

ドイツには、日本語のゼミナールが伯林とハンブルグとボンの各大學にある。近頃フランクフルト・アム・マインの大學にも日本學の講義が設けられた。その中、ハンブルグ大學には老フロレンツ博士が教授としてゼミナールを支配して居られる。フロレンツ博士はすでに七十餘歳の高齢で本來ドイツの各大學教授の停年は六十五歳であつて、フロレンツ博士はすでにその年限を經過して居るに拘らず後繼の人なきの故に繼續されて居たのである。事實年齢といひ學績といひ人格といひフロレンツ博士は日本研究家としてドイツに於ける否世界に於ける最高の位置を占めて居られるので、氏に代る日本研究家は多士濟々たるドイツ學界に於ても容易に求めがたいのであらう。私はハンブルグ大學にフロレンツ博士の

ゼミナールを見せていたゞくために十一月十五日の午前ベルリンからハンブルグにいつたのである。ベルリン北部のレエテル・バーンホーフから十一時の快速の汽車に乘つて、二時間餘りで途中一回の停車もなくハンブルグ驛に着く。車中には食堂もあり、車の形の美なる點からも遊覽車の趣がある。一時すぎ、ハンブルグ驛前のベルリンナー・ホーフに宿をとつた上、すぐ大學に車を飛ばせた。

ハンブルグ大學は外觀はさう大きくも見えないが、なかゝゝ氣持のよいものとつた感じがする。受付で大使館の昌谷氏の紹介と名刺とを出したら、すぐ二階のフロレンツ博士の研究室へ案内してくれた　博士は居られないらしく隣室から五十餘りの女事務員が出てきて、お宅に居られるといふ。すぐ伺はうと思つたが、紹介狀にある如くゼミナリイを見せてくれとの希望に對して御目にかけるとの事で、見せてもらふ事にした。博士の比較的狹い室の隣がゼミナリイである。三間に二間ほどの相當に廣い部屋である。正面に黑板があり、三面に書棚があり、本がつまつて居る。日本の書物も相當にあり、廣文庫、その他の叢書もある、國語と國文學の研究學號も一冊あつた。しかしこのゼミナリイの本として最も

目立つてゐたのは歐洲に於ける日本研究書であつて、これはなか〳〵そろつてゐて感心した。フロレンツ博士の古今集土佐日記(一九二五年刊)をはじめ、歐洲の日本研究書も相當にあることを感じた。

その中、女事務員がフロレンツ博士のお宅へ電話をかけてくれて、まだ博士は歸宅されないが、六時までには歸るとの事であつた。この時女事務員はこゝの日本研究の學生も五六人あるが、一人日本語の相當に話せる學生が今ゐるがよんで來ようかといつた。まことにいゝ機會とたのむと、暫くしてその學生が入つてきた。背の高い、いかにも秀賢らしい學生である。挨拶をした後いろ〳〵語る。さう日本語は達者でもないが、意味はよく通ずる。支那文學を研究してゐて支那語は達者であるが、日本語は餘り上手でないと卑下して居られた。支那文學のどういふ方面を研究して居られるかといつたら、胡適の文學史等によつて、支那最近の文學に關する、ドクトル・アルバイトを書いて居るが、それがすんだら、日本の近代文學をやりたいといつて、芥川龍之介氏や山本有三氏や菊池寛氏などの作家に興味をもつてゐると言つた。さうして日本のそれ等の作家のいゝ短篇小說を飜譯して

ハンブルグ大學

見たいとの事であつた。

さうしてフロレンツ博士は日本の古代文學を研究されてゐて、萬葉集、古今集、祝詞、竹取物語等を講義して居られるとの事であつた、そのためにこゝの日本研究はさういふ方面の研究をする人が多いらしい。フロレンツ博士の日本文學史の外前述の古今集の研究（千九百二十五年刊）なども見せられた、ゼ更にヘルバート・ツァフェルト氏のドクトル・アルバイトの

Die Kaiserlichen Erlasse des Shoku-Nihongi

in Text und Übersetzung mit Erläuterungen（千九百三十二年刊）

やアルフレッド、ロレンツエン氏のドクトル・アルバイトの

Die Gedichte Hitomaro's aus dem Manyoshu

in Text und Übersetzung mit Erläuterungen（千九百二十七年刊）

などを見せてくれた。ツァフェルト氏は今日本にあつて松本高等學校につとめて居られるといふ。この他フロレンツ博士の令息のフロレンツ氏も日本文學を研究して、萬葉集の大

作家持の作を研究されて、ドクトルを得られたのと併せて、萬葉集はじめ上代文學の研究がこゝでは中心であることを知つた。

なほ同君から日本文學史の代表的著書をきかれ、日本の現代作家の二三についてきかれ、また當代の日本に於ける支那文學の研究家をきかれたので、簡見によつて若干答へておいた。さうして私も現代のドイツに於ける文學理論の研究家をたづねた所、君はボン大學のワルツエル(Oskar Walzel)教授を第一にあげられた。氏はすでに七十歳であり、氏の編輯になる文藝學の二十餘巻の著書は注目されてゐるといふ。ワルツエルの代表著書は (Gestalt und Gestalt であるといふといふことも言はれた。

その他ハンブルグ大學のペッチ (Petzel) 教授や、フランクフルト大學の マールホルツ (Mahrholz) 教授など注目すべきをいはれた。ベハーゲル (Behaghel) の狐遲詩語に關する研究もよいとの事であつた。エルマチンゲル教授の事をいつたらやはりすぐれて居ると言はれた。別れにのぞんで名を聞いたら Alfred Hoffmann 君といはれた。この後手紙を交換することを約してゼミナールにも別れをつげて宿にかへつた。同君からツァフェルト氏とロ

レンツエン氏との著書をいたゞいたので、私もたづさへた「能樂論と支學精神」とを贈つた。

宿で食事をすましてゐ時すぎタキシイでフロレンツ氏の所へうかゞつた、六時には少し早いのでその前の通りをゆきゝした。ワーゲナン・ストリイトといふ靜かな通りである。六時少し前、伺ふと親切な女中によつて通された、まだ御歸りにならないから、暫く御待ち下さるやうにといつて令息が二階の部屋に通された。令息が、英語を話されますかときかれたのは英語なら話をして時を待つつもりであつたらうが、餘り話せないといつたので、父に電話しますからといつて席をたゝれた、この部屋は博士の書斎らしく周圍に本がならんで居る。ゼミナリイよりも日本の書物は多いやうである。萬葉集のものが一番多く、萬葉集古義、萬葉集新考、折口氏口譯萬葉集、萬葉集の鑑賞及批評、分類萬葉集、萬葉集の新研究、佐成氏の謠曲大觀などある。二葉亭の其面影がある。フロレンツ博士の令息のフロレンツ氏のドクトル・アルバイトといふ家持の研究の引用參考書目としてあつたのはこゝにある書物であるらしい。

二十分ほどして博士は部屋に入つてこられた。髮はすでに白いがよく肥えた血色のいゝ

親切さうな老人である。日本語も相當に達上手である。

先づ東京帝國大學の藤先生の御話が出る。井上哲次郎博士は御丈夫ですかと御話され、上田萬年博士は御元氣と承つたがといはれる。その後御よろしいやうに承つて居りますとこたへたら、それはよいと言はれた。芳賀博士も八九年前になくなられた事が話され私の知つて居る人も多く世をさられたとしみ〴〵と語られる。姉崎博士には先だつて逢つたと言はれた。その折上田先生の事もきかれたかと思はれる。私もすでに七十一歳で、本來ならば六十五歳が停年であるが、後任がないためにまだやつて居るが、來年は退職するつもりであるから日本へ再びゆくかも知れないと言はれた。私も來年四月にはかへりますからその時には御待ちしますと申した。令息の萬葉研究の事をいつたら、日本に四五年やつて勉强をさせたいと言はれた。松本に居られるツァフェルト氏は先生の御弟子だと承りましたといふと、松本のやうな所がいゝと言はれた。老博士の子どもの將來を氣遣ふ親心を拜見してしんみりとした心持を感じた。あなたはどんな方面の著書をなさつたかと言はれたので書棚の畑者萬葉集の新研究をさして、これは私のかいたものですといつたらすぐとり出し

て、この本なら、せがれと一所に講讀をしてもらつたといつて、幾横にある書入を見せて下さつた。過分な御言葉をもいたゞいたのであつた。さういへば令息の家井研究に拙著の影響が少あるやうに感じたのであつた。私はこれは十年前の著で、この間、一冊萬葉集の本をかいたから歸つたらすぐ御送りしますとこたへた、なほ博士は萬葉集の二十卷の註釋をかいて居られて、死ぬまでに刊行したいが、或は原稿を弟子にわたして完成をゆだねるかも知れないと言はれた。

博士は支那の萬葉集研究にどんなものがあるかと聞かれたので山田孝雄氏の萬葉集講義卷一、二、と澤瀉久孝氏の萬葉集全釋、及び菊池壽人氏の萬葉集精考とをあげたら、その書名をかいてくれと言はれた。注文したいからと言はれたので私が送るやうに致してもよいがと言つたら、さう願へればといつてドイツのインフレーションの結果貧乏になつて、外國の書物もなるたけ買はないやうにとの事であるから日本の新しい書物は除り買つてないと言はれた。

ハンブルグは離れてゐるから、日本から來る學者もベルリンか、ライプチヒの方にいつ

て、たいらにくるものが尠いこと、また日本から來る學者は獨逸文學その他の研究者が多くて、日本文學研究者が尠いのでこちらで日本の方にあふ事が尠かつたと言はれ、あなたのやうな日本文學の研究家が半年もこちらにゐて下さるといゝなどとも言はれたのには有難く思つた。

日本も先生の居られた頃から見るとかはりましたといつたら、來年は新しい日本を見にゆくですといはれた。しかし私は古い日本の方が好きです、西洋文化の影響をうけない純粹な日本が好きですと言はれた。博士が日本の古代文學を研究されて居る眞意もこゝにあると思つた。私は日本も最近古典文學の研究が盛んになつてきたとこたへた。博士に萬葉集と古今集とどちらが御好きですといつたら、古今集は典雅であるが、萬葉集の方が深いものを含んで居る。長歌には極めてすぐれたものがある旨をいはれて、萬葉集は世界文學の水準に達して居ると言はれた。私はその言をうれしく聞いた。

餘り長くなつた上に博士は食事をすまして居られないやうにも見うけられたので辭しようとすると葡萄酒をあなたは飲みますかと言はれたので少しはと答へると、差上げませう

と下に降りてゆかれたが、すぐ上つてこられて下に來て下さいと言ふ、無遠慮なから言はれるまゝに食堂に導かれると、まだ令息と令嬢とが食事をして居られた。部屋を片付ける間といつて、下の應接室や書齋を見せて下さつた。二階の書齋はなぞけ居つて、夏はこゝに居ると言はれた。やはり日本の書籍が多くある。眞淵全集、育朋堂文庫もある。有朋堂文庫を推賞して居られた。その中の一冊をとり出したら、贈呈フロレンツ博士とあつた。日本の親切な弟子が贈つてくれたのですと言はれた。まだ三階にも書物があり、隨分いゝ日本の本がありますといはれ、大學のゼミナリイのものも多くは自分のものですといはれ、死んだら大學にすべて寄附するのですと言はれた。日本から歸られてから二十二年間をこの大學ですごされた博士にとつては、ハンブルグ大學の日本研究室は吾子と同じい愛をもつて居られるのであらう。

應接室はアハイツングをして居るから何物もないがと言はれながら、室町後期の山水畫の屏風を示され、これはいゝものですと言はれた。食堂へ歸つたら令息と令嬢の外に奥様も見えた。博士と五人で葡萄酒をいたゞく、私は食事はすでにすましたからと言ふと、南

菊酒はすつぱいのがいゝか、甘いのがいゝかと言はれたので甘いのをとこたへた。博士はハムやパンを食べて居られる、やはり夕刻前であられたのかとすまない感が起る。奥様も日本に八年程ゐられたので日本語を話される。しかしもう忘れたと言はれる。博士が通譯して下さつている〳〵話をする。奥様に東京のどこにすんでゐられたかといつたら小石川匂原町とこたへられた。先生は御元氣ですといはれたら、博士が妻は私より十八歳若いですとこたへられた。先生も御若く見えますといつた。博士は兩國の川開きはまだありますかといはれるのでありますといつたら、あの時はいつて藝者をあげて酒をのんだと言はれた。若き日の博士の日本に於ける生活をなつかしんで居られるやうである。

芳賀さんとは兄弟のやうにしてゐたとも言はれる。先日スウイス、イタリイに參りましたといつたら、イタリイは食糧は少くはなかつたですかときかれた。たいした事もありませんでしたが、イタリイは今のイタリイより古のイタリイの方がいゝといつたら、うなづいて居られた。令息にローマにゆかれましたかといつたら、ローマにはゆかなかつたと言はれる。博士が令息とともにスウイス、イタリイへ自動車でいつた事をいはれる。ドロミ

ーテンへいつた事を話したら、あすこはいゝ所ですといはれた。萬葉集を研究された令息ですかときいたら、それはこの兄であるとこたへられた。あなたは何を御研究ですかといつたら、カウフ・マン(商業)といはれた。

博士にドイツの繪もなか〳〵いゝものがあるといつたら「かなり」といはれた。ハンブルグに見るべきものをきいたら、ハーゲンベツクの動物園の外、ハンブルグの歴史博物館、藝術工藝博物館などをあげられた、明日ハーゲンベツクへゆきたいと思ひますといつたらあなたの取る宿から十二人乘のバスで行くと二十五ペンニヒでゆきますといはれ、一人でゆくかと言はれたのでさうですといつたら、明日あなたと一所にいつてもいゝのだが、あひにく大學の教授會があるから行けないと言はれた。私は博士の御親切を謝した。

まことに博士の人格が中心となつて和氣靄々たる心持の中につゝまれる。私は暖い家庭的な氣分を久しぶりで味つた事を御禮を申して、辭退することにした。もつてきた日本の小さい風呂敷と、能樂論と文學精神、加藤博士から託された胡蝶の英譯等を呈して、辭した。博士は寒いからといつてオーバーまでかけて下さりさうにした。博士と令息とは玄關

まで見送られた。青木博士や木村さんにもよろしく傳へてくれと言はれた。辭して表門を出る時、振りかへつて見たら、まだ博士と令息とは立つて見送つて下さつてゐた。私は暗い通を歩きながら博士の學識と暖い人格とが周圍を感化することのいかに多いかを感じた。

附記　これはハンブルグを訪問して、ベルリンに歸つて直後書いた覺書である。讀みかへして見ると、書き改めたい感もあるが、今はその暇もなく、またなつかしい思出もあるので、このまゝ掲げる。たゞたま〳〵臺北の瀧田貞治君から贈つてくれた近刊の臺北文學に安藤教授のフロレンツ教授に關する研究のあるのを知つた。フロレンツ教授の學績はそれによつて知られるであらう。私のこの文はたゞ、老いてなほ日本研究にいそしむ老博士の近況を幾分傳へ得れば幸である。（昭和十一年九月朔日書）

七、歐米に於ける日本文學の研究

歐米に於て日本文學の研究が近時盛んであるといふことは一般に言はれることであります。私も昨年の春から今年の春にかけて歐米を旅行しました際に、時間のゆるす限り、各國の日本文學の講義のある大學を參觀したり、主なる日本研究家にもあひました結果、多少の感想を得ましたので、それを御話ししたいのであります。はじめに各國に於ける私の見聞した日本文學研究の狀況をいさゝかのべてみたいと思ひます。

先づ最初に英國に參りましたが、英國では源氏物語を十一年ほどかゝつて全部英譯したアーサー・ウエレイ氏が日本研究家として最も光彩を放つて居ります。氏はかつて倫敦の大英博物館につとめて居られまして、その間に日本文學にも堪能になられたと思はれます

が、病弱のため今は止めて、スウイスとロンドンとに一年の半ばづつ住まはれて、日本文學や支那文學の研究や譯譯をして居られます。かつて日本の古代詩歌や謠曲を譯され、また枕草紙の抄譯をもされましたが、殊に源氏物語は長篇であるだけに、苦心の結果完成されたのであります。この書は最近普及版が出まして、歐米人にひろくよまれて居ります。和蘭の高業研究家のピヤソン氏の夫人はその一部を和蘭語に譯して居るのであります。

ウエレイ氏は漢詩の知識も豐富であり、日本文學に對する理解も深く、藝術的な感受性も鋭い方でありまして、その譯も好評を博して居ります。英國にはかつてチエンバレン翁を出し、今ウエレイ氏の如きすぐれた日本研究家があり、また大英博物館には日本に關する典籍も相當にあるのであります。これは十九世紀の半ば(千八百六十八年)にシーボルトの蒐集したものが入つたのを基礎として、更にアーネスト・サトウ氏等の蒐集も入つて居り、ドクラス氏の千八百九十八年に作つた目錄も出來て居ります。目錄の增補一冊も出來五六千部の書目を收めて居ります。この目錄は西歐にある日本關係の典籍目錄の中で最も大きいものであるとドクラス氏も序の中に言つて居りますが、それだけに日本の文獻を大

英博物館に豐富に有して居ることを知られるのであります。

たゞ英吉利は大學では日本文學や日本語に關する講義は殆ど見られないのは殘念に思ひました。東洋語學校で吉武氏といふ方が日本語を講じて居られます外、大學に於ける日本語や日本文學の講義はドイツが現在では比較的活潑であることを感じました。

ドイツではハンブルグ大學やベルリン大學、ライプチヒの大學に立派な日本文學や日本語の講座があり、またボン大學やフランクフルトの大學にも日本學の講義があるのであります。さうしてドイツに於ける日本文學の研究家の中で第一に擧げたいのはカール・フロレンツ教授であります。フロレンツ教授はかつて東京帝國大學に二十年餘り奉職され、獨逸語や獨逸文學を講義せられた外に、日本文學に關する多くの著書や譯譯がありますが、殊に日本文學史は明治卅八年に刊行されましたが、それ以後もこれにつぐやうな日本文學史は歐米人によつてかゝれず、歐米人の書いた日本文學史の中で最も優れた書物であります。チェンバレン翁の亡き後は、歐米に於ける日本文學研究の最長老であります。大正三年にドイツに歸られてからは、ハンブルグ大學にあつて、日本文學の教授をされて居ります。

私は昨年十一月の半ばに、ハンブルグを離れて大學の日本文學の研究室を委託し、教授にも御目にかゝりましたが七十一歳とは思へぬ程の元氣な御樣子でありました。教授は萬葉集や觀音や古今集等、日本の古典文學を大學でも講義して居られ、十年程前に古今集の註釋書を出されて居ります。謠曲の獨逸譯なども時々發表されて居り、萬葉集の註釋も多年續けて漸く完成して居るとの事でありました。從つて教授の門下には日本の古典の研究をする者が多く、教授の令息も萬葉集の女作家等の論文をまとめて居られますが、外にアルフレッド・ロレンツェン氏が柿本人麻呂に關する論文を發表され、ヘルバート・ツアフエルト氏が續日本紀の宣命の論文を書かれて居ります。私の見た中では、フロレンツ教授の研究室が日本の上代文學の研究に最も精彩をはなつて居ると思ひます。教授と親しく語つた所では、日本を眞に理解するにはその模範である日本の古典を研究しなければならないと云ふ考から萬葉集等を研究してゐると云はれました。又萬葉集は世界文學としての價値があると云はれました。世界文學とは世界の代表的文學作品と云ふほどの意味でありませうが、ホーマアやダンテや、イギリスのシエクスピア、ドイツのゲーテ、その他の文學と共に萬

葉集の如きも世界文學史を書く場合に、除く事の出來ない作品である事は歐米に於ても次第にみとめられつゝあると思はれるのであります。とにかくフロレンツ教授の日本文學に對する見識と、日本に對する正しい理解とは私の敬服した所であります。然し獨逸の大學の日本文學研究もフロレンツ教授のやうな態度ばかりでなくライプチヒ大學の日本研究室のウーバーシヤール教授は日本文學の教科書としては方丈記や芭蕉の作品等を用ゐて居られ、又ベデマイヤー氏が萬葉集の講義をして居られましたが、こゝの日本研究室では現代日本語の習熟と現代日本の理解とを第一の目的として居ると云はれて居りました。日本を理解するといふ點では同樣でありますが、古典から入るか現代より入るかといふ點でフロレンツ教授といき方を異にして居りました。又ベルリン大學のシヤールシユミツト教授は、一方では古今集や竹取物語等を講義されると共に、現代文學の漱石や芥川龍之介等も研究して居られました。教授はフロレンツ教授の古稀の記念論文集に龍之介氏に關する論文を發表して居られます。日本語の會話も極めて巧でフロレンツ教授について私の印象に殘る日本研究家であります。獨逸ではこの外ボン大學に私の參りました頃には松本德明氏が名

學教授として日本學を講義せられて居り、フランクフルトの大學では北山氏が日本學の講義をして居られました。さうして是等の大學の日本研究室には日本文學に關する書物も相當にありますが、ベルリンには別に日本學會がありましてラーミング氏と云ふ方が獨逸側のライターであり、日本の近世文化史の研究をされて居ります。日本文學に關する文獻も多く集めて居られます。その他個人として日本文學の研究をつゞけて居る方も相當にあるやうであります。次に和蘭に於てはライデン大學に日本文學の研究室がありましてラーデル氏が日本語の教授をして居られます。氏は度々日本にも來られますので、其研究室には最新の日本文學研究書も多く揃つて居りました。ライデンの博物館長のクルーゲル氏は篤實の日本研究家で其書齋には眞筆抄や更科日記があり、又國本田獨歩の作品もありまして其短篇の構成が優れて居ると批評されて居りました。こゝの博物館にはシーボルトの招來した珍らしい日本研究書もあり、落葉集といふ辭書や蝦夷言葉の辭書もありました。この他和蘭にはビアソンといふ篤實な萬葉集の研究家がありまして、今はアムステルダムの近郊のラーレムにあつて、孜々として萬葉集の全譯を續けて居り第四卷まで發表されて居り

ます。前に申しました如く氏の夫人はウエレイ氏の英譯源氏物語の一部を和蘭語に譯して居ります。和蘭は古い日本との交渉の深い所であり、日蘭交通史に關する豐富な史料もありますし、日本文學や日本語の良資料も多くあるのであります。

オーストリヤ、ハンガリーやチエツコスロバキヤに日本文學研究の狀況を視察に參りましたのは、大正一月中旬でありました。オーストリヤでは東京大學文科出身の植田文學士がウイーン大學で日本語を教へて居られ、ハンガリーのブクベストの大學では、ドクトル、ブレイトー氏が日本語を講義して居られました。また、チエツコスロバキヤでは、プラーグの日本公使館に勤めて居るクーデンホーフ氏がプラーグにある東亞研究所の日本部長をして居り日本語の講義をして居られました。東亞研究所長のハルトマー氏も日本文化に關する興味を有して居られました。これ等の國々には、まだ日本文學研究が殘り殘んでゐると言はれませんが、日本を知らうとする熱意はさかんである事を感じました。

フランスには、一月の初に參りましたがパリーのソルボンス大學に日本文學の講座があり、ルボン氏が日本學を講ぜられて居ります。ルボン氏は永つて日本の大學に奉職された事が

あり、日本文學史に關する著書を著されて居ります。外にアグノエル氏がソルボンヌ大學に講師として古事記や今昔物語等の講義をされて居り、東洋語學校の教授として日本語を講義して居られます。氏は熱心な日本語の研究家であり、時々日本語に關する論文を發表されて居ります。

アメリカではハアバード大學にエリセイフ氏が日本文學の講義を擔當して居られます。エリセイフ氏は東京帝國大學の國文科を明治四十五年頃卒業され、パリーのソルボンヌ大學に教へて居られましたが近くハアバード大學の日本文學の教授となられると共にエンシン・インスチイチウトと云ふ支那日本の圖書室に務めて居られます。この圖書室には日本文學に關する書物や雜誌も多く蒐集されて居ります。エリセイフ氏は日本の文章法の研究をしてゐるとの事でありましたが日本に對する理解の極めて深い方であります。獨ボストンの美術館には浮世繪をはじめ、日本美術の材料が多くありますが、日本文學、特に近世文學に關する優れた資料もあります。明和天明頃の芝居の繪番付や黃表紙等もあります。その他アメリカではコロンビヤ大學の圖書館にある東洋研究室やワシントンの國立圖書館の

日本圖書室、シカゴの美術館の日本圖書室、ハワイ大學の日本語研究室をはじめ日本文學に關する典籍を方々に有して居ります。それ等の圖書室には歐米人のみならず、日本の優れた研究家も居られて日本文學の研究や紹介につとめて居られます。ワシントンの圖書館の日本部長をして居られる坂西女史も石川啄木や與謝野晶子氏の歌集を譯して居る外、日本文學に關する種々の研究をして居られます。

以上申上げた外にも歐米に於て日本文學の資料を有する所や、日本研究家は多く居られますが、今は略しまして、次に私の見聞した所から得た二三の感想を述べて見たいと思います。第一に歐米に於て日本文學に關する文獻を藏する所は多くありますが、比較的優れた資料を多く有して居るのはイギリスの大英博物館やアメリカのボストン美術館、オランダのライデン博物館等でありまして、英國や和蘭のは早くシーボルトやブーネスト・サトウ氏等によつて招來されたものであります。一體に英米に於ては日本文學の研究にしても資料を第一にする樣であります。それに對して獨逸の方では日本文學の書物にしても珍らしい材料と云ふよりは普通の材料が多い樣でありますが、極めて無心な研究家があり細密

た研究法を用ゐて扱つて居るやうであります。殊にドイツは大學に於ける日本文學の講座が比較的充實して居ると思ひました。

次に全體に歐米に於て日本文學の研究の方法を見ますと、日本文學を讀むといふことから入つて居りまして、從つて譯譯といふ形式が多いやうであります。これにもウエレイ氏の源氏物語のやうな譯文を主として所謂註釋を加へられたものと、ピヤソン氏の萬葉集の註釋のやうに譯文そのものよりも註釋に力をいれたものとの相違がありますが、とにかく日本文學の作品を自國語に譯譯するといふ點が最も多いやうであります。これは大學の日本語の講義に於ても大體さういふ方が多いと見られます。從つて日本文學に關する研究論文にしても、日本文學の作品の譯譯といふことに相當の量もさき、それに續いて同もしくは解說的な論文をそへる形式が多くあります。フロレンツ教授の門下の書かれた續日本紀の宣命や萬葉集の人麿や家持に關する論文もさういふ形式であります。これは言語の全く性質の違つた日本文學の研究としてはさうなるのが自然の結果であります。

さうして日本文學の研究にも二の傾向があるやうであります。一つは日本語を習熟した

いといふ、言語方面から入つて、次第に日本文學に關する研究に進まれる方と、日本文化に對する情緒、日本趣味の同感といふ方面から、日本の繪畫・彫刻等の研究に入り、次第に日本文學研究に進まれる方とがあるやうであります。そこに日本文學の研究にもこの二つの傾向が分れて來るやうでありますが、勿論これは日本文學の研究の理解の深まるにつれて一になるべきものでありますが、なほ出發點の相違から方法の上に多少違つた特色を示して居るかと思ひます。第二に日本文學の中で如何なる作品が多く研究されて居るかと申しますと、大學の教材としては古典の方が多く扱はれて居り、萬葉集や古今集をはじめ竹取物語等の短篇物語が多く扱はれて居り、方丈記や芭蕉の俳文等も扱はれて居ります。明治以後のものでは國木田獨歩や芥川龍之介の作の樣な短篇小說が比較的多く讀まれて研究されて居ります。これは教材としてよりは一般の研究家に多く讀まれて居るのでありますが、現代文の教材としては日本の中學讀本や小學讀本が多く扱はれて居ります。殊に日本語の最初の課程では小學讀本が多く扱はれて居り、一年間に六册程讀まれて居る樣であります。さうして日本文學の作品として最も高く評價されて居るのは萬葉集や源氏物語等で

ありません。源氏物語の方は長篇の爲に教材としてはあまり扱はれませんが、ウエレイ氏の英譯が出て以來廣く讀まれ、その價値も認められて居る樣であります。さうして日本文學が歐米に飜譯されて居る狀態を見ますと、萬葉集や古今集、源氏物語、謠曲の如き日本の古代中世の作品に於ては、日本文學の代表作品が飜譯されて居る樣でありますが、近世文學や明治以後の現代文學に於てはその作品の數が多い爲に必ずしも優秀な作品が紹介されず、偶然の機會から紹介されてゐる作品が多い樣な狀態が見られます。かういふ點から近世以後の作品の代表的作品を飜譯し、もしくは歐米に紹介される事が必要であると思ひます。同時に日本文學の作品の全體の見通しをつけ得るやうな立派な日本文學史が作られることが必要であると思ひます。勿論これに對しては、フロレンツ教授の日本文學史をはじめ數種の文學史は出來て居り、それ〴〵の有益な役目を果して居りますが、フロレンツ教授の著も三十年前の著述でありますし、日本文學の研究も進んで來た今日、それ以後の研究をとりいれた日本文學史の優秀なものが作られる必要があると存じます。

第三にこれ等の日本文學の作品が歐米人に如何に認められてゐるかと申しますと、從來

は多少異國趣味的な立場から愛好されてゐた傾きがありました。これは日本文學に限らず日本の藝術、日本の文化、もしくは日本全體を見る場合に於てもかういふ異國趣味的な態度が多かつたのであります。從つて日本文學の價値に於ても、世界文學を代表する作品としてより核、篠系に立つ異國趣味的な意味で見られたのでありますが、最近になりまして日本の國際的位置の高まるにつれ、日本の眞實を知らうとする必然的要求から日本文化や日本藝術を研究される傾向が多くなりました。同時に日本藝術や日本文學の優れた價値をも認めて來たと思はれます。文學は繪畫、彫刻等と違つて言語と云ふ障壁がありますから、繪畫等に比して其研究が一歩遲れて居ますが、次第に文學研究も注目される樣になりまして、日本文學の研究も本格的になりつゝあるのではないかと思ひます。さうして文學を論ずる場合、日本文學も必ずその中に扱はれねばならなくなりつゝあります。フロレンツ教授が萬葉集を世界文學の價値があると云はれましたのは、その意味に於て興味ある言であります。勿論萬葉集或ひは廣く日本文學が世界文學として扱はれます事は決して日本の特殊性を失ふ事ではありません。日本的な特殊性を強く持つ事によつて日本文學が眞の

意味の世界文學となり得るのであります。日本的特色を失つて西洋的な文學の後を追ふ作品は結局西洋文學の模倣に止まり、すぐれた日本文學でないのみならず、世界文學としての日本文學でもあり得ないのであります。もとより西洋文學のよき所を取りいれ、それを日本の特殊性に同化させることは必要でありますが、たゞ西洋的なるが故にとりいれるといふことは日本文學の本質を高める所以では決してないのであります。

日本人が世界人となり得るのは日本人たる所の自覺を強く持ち日本人としての特色を根柢に持つてはじめて世界人となり得るのであります。それと同じ樣に日本文學が世界の代表的文學作品となり得るのは、日本的特色を強く有して居るといふ事が中心となつて居ると思ひます。萬葉集や源氏物語が世界文學と考へられ、能樂や歌舞伎が世界に於ける優秀なる演劇であり、藝術であると歐米人からも考へられますのも、それ等の藝術性のすぐれて居ることは勿論でありますが、それ等の作品が日本的なるものを根柢にしつかりと持つて居るために外ならないのであります。さうして日本文學に於て藝術的にすぐれて居るといふことと日本的なるものを有して居るといふことは離すことの出來ない關係にあります。

我々は歐米に於て日本文學が本格的に研究され、その眞實なる價値を認められようとする機運の起つて來た時に際して、日本文學の研究をいよ〳〵深めて、その眞の意義と價値とを我々日本人がより正しく理解することにつとめるとともに、日本文學の眞に優秀なる作品をひろく世界に知らしめることによつて日本文學の世界文學史の上に於ける眞の位置を與へることも必要なる一面であると存じます。（昭和十一年四月廿九日述）

14.11.22

八、西歐に於ける萬葉集

西歐を旅行して居た間、萬葉集は身につけて何かの折にはひもといてゐたし、萬葉集の事で自然目にふれる事があれば注意するやうにして來たが、比較的短い期間でもあり、西歐文化のよいものを出來るだけ見ることによつて日本文化の特質を反省したい心持もあつたので、西歐に於ける萬葉集に就いても深い調べもして居ない。それに萬葉集の世界文學的位置とか飜譯に就いての感想はすでに書いたことがあるので、こゝではとりとめもない感想を書くに止めたい。

倫敦に着いて大英博物館で「文學の起原」といふ研究題目を出して入室を許してもらつてから、比較的書物を讀んだが、日本のものを調べはじめたのは暫くたつてからであつた。

大英博物館・讀書室

ドクラス氏の博物館藏の日本書目録によつて萬葉集に關するものをいろふと若干ある。一例をいふと萬葉集の寛永版本に書入を加へた本もある。書入を見ると萬葉集撮要の說が最も多く書入れてあり、見安の說も引き、季吟、契沖、眞淵、宣長等に至るまで存する。春滿の說としては「荷田東麿翁箋ヲ神代紀、カタマト訓リ。毛ハ助詞與ハ呼イタス詞」等ある。宣長では「本居宣長云、菜摘須ノツマスハツムヲ延タル詞也。卷七、小田刈爲子卷十長歌伊達爲兒ナトヨメルモ同ジ例也」などもある。誰れの書入かはつきり分らないが、江戸後期の書入本であることは明らかである。とにかくかういふ本を見て居ると身は倫敦にあることを忘れて、東京の圖書館の一隅にあるやうに感ずるのである。たしかに西歐の圖書館の一隅には、日本の圖書館がそのまゝ移されたやうな部分がある。大英博物館にしても、ボストン美術館の日本書の部にしても、和蘭のライデンの圖書館にしてもさういふ部分があり、そこには萬葉集といふ古典が日本に於てあると同樣な性質を以て存在して居るのである。

この事は歐米の大學に於ける日本學の講座にしても、多少はさういふ傾向を有するので

はないかと思ふ。多くの歐米に於ける日本文學の研究家は現代文學や近世文學よりも、古典文學に研究の中心がある。さうして日本の古典の中でも萬葉集あたりが最高のものと考へられて居るのである。ウエレイ氏の源氏物語の英譯が近時完成されてから源氏物語が日本文學として注目されて來たが、なほしかし日本學の講壇の上では源氏物語は萬葉集を凌駕するに至らない。萬葉集はやはり日本古典文學の中心として講ぜられて居るのである。西歐に於ける日本學講座の中でも古き歴史を有するハンブルグ大學のフロレンツ教授の日本學講座でも萬葉集は中心をなして居る。教授自身がかつて日本文學史を著し、また古今集や藩島の註釋や譯譯を發表されても居るが、最後の研究は萬葉集に歸着されたことは度々書いた事がある。萬葉集の註釋も長い間かゝつて居られるし、萬葉集を世界文學の價値があると言つたのも、日本の古典であるとともに世界の古典であることを認められたのである。その門下から柿本人麿の論文や大伴家持の論文などが現れて居るのを見て、古典文學としての萬葉集は、こゝの講座に於て尠くとも現在の西歐に於て一番高い水準にまで達して居るやうである。フロレンツ教授の後をうけてこゝの講座を擔任せられたグンデル

ト教授によつてどういふやうに變化せられつゝあるかは、新しい報告を聞きたいものである。

ライプチヒ大學のヴェデマイヤー氏の萬葉集の講義をはじめ、西歐の大學の日本學講座で萬葉集は多くよまれて居り、殊に和蘭のピヤソン氏の萬葉集の飜譯が多少の缺點はあるにせよ卷四まで完成して居るのを見ると萬葉集の研究も相當に進んで來たことを感ずるのである。源氏物語を英譯したウエレイ氏が萬葉集の特殊假名遣を注意して居たことを見ても、日本の萬葉研究の狀態が西歐にも反映して居ることを感ずるのである。恐らく萬葉集は今後に於ても日本の他のどの古典よりも一層多く扱はれ讀まれてゆく事であらうし、その價値も一層高まつてゆく事であらう。それは日本の一古典としてといふよりは西歐の現實の中に生きた古典として認められて來るであらう。

年代的に見ても萬葉集の成つた頃は現在の西歐の中心をなす諸國には何ほどの文化も實つて居ない。萬葉集にある最も年代の古い仁德天皇の御代は西暦の四世紀であるが、最も歌の多く見られる舒明天皇の御代から孝謙天皇の御代までの年代は西暦で七世紀から八世

紀の半ばであるから、エヂプトやギリシヤの文化はすでに花と咲きにほうた後であつたけれども、現在の西歐の中心をなす諸國の文化は未だ言ふに足りず、文學作品としても無いのである。その時代に、四千五百首に近い一大抒情詩集がなつたことは世界文學史の上から見ても驚くべきことである。萬葉集はそれほど遠い頃の作であるに拘らず、極めて近く身に生きて居るのを感ずる。古今や新古今集に於て感ずるよりも遙かに身に近いことを感ずる。古く尚生げるものとしての萬葉集の古典の意義は大きい。日本的なるものをこれほど生き生きと現して居る古典はさう多くは無いのである。もとより日本は國家間に見て西歐諸國と異なつて常に一貫の道を生きて來たから、神話等もそのまゝ現在に生きて居るのであるが、抒情歌集としての萬葉集もそのまゝに生きて居るのである。この事は我が國文學として見る時ひし〳〵と感ずることであるが、萬葉集の心は西歐に於てもそのまゝ生きて居ることを私は屢々感じた。

私はハンガリイのブタペストに行つた時、日本語の巧みなレイツェル・ヨセフといふハンガリイ人が宿に訪れてくれて、ハンガリイの文部省、ブタペストの大學の日本語の講師の

私宅やその他方々案内してくれたが、ハンガリイの民謡をも聞かしてくれた。私はそれらの中には萬葉集の東歌にかよふ幾多の歌を見出した。恰度こゝを私より前にたづねた早稲田大學の杉山謙治氏から聞いたといつて萬葉集の「つぎねふ山城路を人づまの馬よりゆくにおのづましかちよりゆけば見るごとにねのみしなかゆ云云」の歌を手帳に書きつけて甚だいい歌だと感心して居つた。さうして萬葉集の事をしきりに問はれるので、種々話した上で私も數首を更に補つたが、かういふ萬葉集の民謡的な歌になると西歐の人にもよく理解されるやうである、が日本人である我々が西歐に居て直ぐ思出す歌も萬葉集の歌が多い。これは私自身が他の歌集よりも萬葉集により親みを有して居るためのみではないらしい。萬葉集の羈旅の歌はどの日本人にも直ぐ親みを以て思ひうかべられるのである。人麿の

天ざかる夷の長道ゆ戀ひくれば明石の門より倭島見ゆ

の歌などは西歐に旅に出て日本にかへる時など心からぴつたり同感されるのである。萬葉集の歌は西歐の旅で口吟んでも不自然には感じない。古今集の歌などは西歐の自然や風土ではどうしてもそぐはない。

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

といふ歌の調にしても、その中に感じられるこまかな季節の推移感にしても西歐ではしつくり味ひ得られないのである。しかし萬葉集の歌は西歐でよんでも不自然を感じない。これは萬葉集の調が大きく、古今集ほど特殊化纖細化しないためでもあらうが、かういふ點から見ても萬葉集が日本の詩歌の中でも日本的であつて、而も世界的であるといふことが言へるのかも知れない。それは日本的なるものの本質や核心を有して、而もゆきわたつた人間性を備へて居るためであらう。（昭和十二年四月、文學）

第二章　日本文化と世界文化

一、歴史・風土・文學

歴史・風土・文學と云ふ題の下に、文學が歴史性と風土性との關係に種々の問題をもつ事について所見を述べたい。歐米諸國を旅行して來たので特に日本文學を考察する上に歴史風土が相當深い關係を有してゐる事を感じたのである。

一

文學とは何かと云ふ問題に對しては種々の說があるが、今、文學は言語による人生の美的表現であると考へるならば、そこに表現形成されてゐるものがある譯である。するとその表現なり形成なりをさせる根源的のものがある。一言で云へば、文學の形象、形成、精

神の問題である。文學の存在する姿に對し、その精神が存在し、その精神の形成される過程によつて形象が生れるのである。

文學の形成と云ふ點で他の藝術に對して文學が特徴とするのは言語による形象を持つと云ふ點である。音樂や繪畫が音や線によつて表現されてゐるのに對して文學は前述の如く言語による表現である。言語も發生的には象形文字或は擬音語等があるのであるが、更に一歩進んでは知覺的觀念的の性質を有するので文學の理解は言語の理解であると云へる。更に言語の理解は觀念的段階を經て行はれ、單なる言語の有する知的意味以上に、その藤情を理解する事によつて初めて眞の理解が出來るのである。日本の文學論における藤情は即ちこれであつて同樣の事を藤原定家も既に述べてある。それ故に歌の心も單なる知的意味ではなく、それは藤情であると云へるのである。文學の理解はここまで徹しなければならない。從つて文學は感覺的具體的と云ふ點では他の線や音による藝術には劣つてゐても、思想的である點においては遙に優れてゐる。そして觀念的のものとの融合の上に情緒を表す。そこに文學獨自の藝術的性質が存するのである。かくの如き言語現象から文學の形態

の研究、樣式の研究が行はれ、その綜合の上に文學のありのままの姿を掴むのである。所謂文學の作品において文學の姿を把握する事は文學研究としても必要な事である。その作品を見るには作品が製作されてゐる問題、例へば書物と作品との關係等について一應の考察が必要となつてくる。書物として作品が表現されれば記載文學であるが、一方これに對立して傳誦文學が存在する。從つて書物は作品であるのではなく、作品に附屬する性質である。又傳誦文學においても何時までも口頭で傳誦されてゐるものは少く、或時期には必ず文獻となるのである。從つて傳誦文學と記載文學との關係は作品の完成した時と書物として成立した時期とが一致しないとするとの相違である。ここにおいて文學の姿を把握するには書物としての研究が必要となつてくるのである。又不文批評と云ふ事も重要である。要するに文學研究は作品による姿の研究から出發しなければならない。そして、その作品が成立する過程、文學形成の問題が取上げられて、ここに作家の問題、更に作家が表現する過程が考へられてくるのである。更に、作家が作品を表現する過程の誘因として、自ら歴史的、風土的の問題が起つて來るのである。

先づ歴史的方面から考察して行くと、歴史的形成の問題が表現と結合して形成作用を完成させると云ふ事が出來る。即ち文學形成を考察するに當つては、先づ表現を中心として、その他に歴史的形成について考へなければならない。例へば作品の本文は自然的に變化發展して行く。記載文學はその性質上かくの如き變化は餘り著しくないのであるが、傳誦文學になると、一度文學の原型が成立しそれが傳誦されて年月を經て行くうちに自ら原型が成長して行く。或は他の文學と融合して複雜な形式をとる樣になつて來る。かの浦島傳說は風土記其の他の文獻に見えてゐるがそれらを順次に考察して行くと、色々の變化を經て現在に到つてゐる。又同樣に風土記其の他・文獻に見えてゐる羽衣說話も同樣の現象を呈してゐる。降つて平家物語の原型と流布本との關係を考察してみると、その成長過程は非常に複雜であつて、その結果異本が夥しい數に上つてゐる。又演劇方面における室町時代の能樂から現代の能に到るまでには相當の變化を經てゐるのである。然し能の變化は單なる墮落ではなく藝術的なるものの成長であると見るべきであらう。繪畫や彫刻においても長年月を經過するうちには寂びを生じて來る。奈良の古い佛像から受ける崇高な感じは、

サソフエロー筆マリヤ（ナシヨナルガレリイ藏）

おそらく作者がその佛像を作製した頃の感じとは異つてゐるに相違ない。即ち年月の經過によつて加へられた崇高さであると云はれるであらう。建築物や築山の如きもその藝術性を成長させるのは悠久の月日の經過である。かくの如く觀察してくると藝術の始めより終りまでの變化は、藝術性の形成過程を示してゐるのである。文學における傳說、說話、獸譚等は特にその變化過程が明瞭である。記載文學における原型と流布本との相違は多く蟲害を蒙つたり或は誤寫したりして生ずるものであるが、これとても尙一概に單なる機械的の關係ばかりとは云ひ得ない。故に文學形成の問題に當つては本文批評が必要となつて來るのである。

文學形成の問題は以上述べた所でも明瞭である如く、表現過程を中心とする歷史的風土的方面の形成がそれである。そしてこの形成の根源に精神が存在する事は勿論である。この點において文學精神の研究が必要となつて來る。精神の研究に入るには素質、形成の兩方面の過程が存するのであるが、文學形成の方面から入つて行く時、表現過程の研究が必要となり更に表現の力として歷史風土との關係を考察しなければならない。この事は、

文學が人間や人生の美的表現である以上文學全般に通ずる點であるが、具體的特殊的な文學形成がなされるには特殊的な歴史風土と密接な關係を有してゐるのである。文學の具體的なるもの、それは或る國の文學である。その各々の國の文學としての特殊性、具體的の中に文學一般を示してゐるのである。故に一般文學は具體的でない　從つて文學研究は先づ或る國の文學から入つて行かなければならない。この事は言語にあつても同樣で、生氣にみちた言語は或る國の言語であつて、エスペラントなどは生きた言語とは云へない。故に言語は各國の特性の大いなる力となつてゐるのである。この點から見て言語藝術である文學は他の藝術よりも理解が困難であらう。音樂繪畫彫刻等は、一應の理解においては、その意味の特殊的な理解を通さずとも直ちに入る事が出來るのであるが、文學は先づ言語の理解から入つて行かなければならないのである。これが、文學の理解が困難な理由であるとともに、他の藝術に比して國際的となる事の不便な理由であり、文學が國家的背景を濃厚に有してゐる事を裏書してゐる。かうした點を通してはじめて文學は理解されるのである。

今日日本文化の研究狀態から見ても、早く西洋に理解されたのは繪畫、中でも浮世繪等

であり、又西歐の博物館に陳列されて居るものでは、刀の鍔や根附等が多く、それ等に關する研究も進んでゐる。かく繪畫や根附の研究から日本文化を理解しはじめたと云ふのも文學の理解過程が困難である事を示すものである。最近にいたつてはじめて日本語を通しての日本文學の研究が行はれる樣になつたが、かく日本文學の研究が遲れたといふ事はそれが他の藝術に劣つてゐるからではなく、日本文學が有する制約の故であると思はれる。かくして日本文學の研究は漸く專門的となつてその價値が認められるに至り、世界的の文學であるとの見解に達しつゝあるが、そこには文學が有する言語の關係が他の藝術と異つた特殊性を發揮してゐる。文學にあつては或る國の文學といふ具體的な姿を通して一般文學となるものである。日本文學といふ具體的のものを通して、その特殊性を發揮し、はじめて世界文學となり得るのである。もし日本的な特性を有して居なければ世界的文學とはなり得ない。この意味で文學が特殊的なものを一の根柢として有する所謂形成過程においても日本文學の上に日本的な特性を表現するのである。日本的なものに對する自覺の形成には歷史的方面と風土的方面とが着目される。嘗て日本に對する自覺から編纂された歷史

には奈良時代の初期に文獻として成立した古事記及び日本書紀、風土記等がある。これは天武天皇から奈良時代にかけての國家的自覺の表れであつて、風土と歴史との二方面に着目してゐる。即ち古事記、日本書紀は歴史的の、風土記は風土的の自覺から編纂されたものと思はれる。然し更に考へれば風土記の編纂は歴史的のものの中に含まれる一材料としてある事が分るのである。從つて文學の形成において日本的のものが大いなる力となつてゐるが、これを外形的の問題から分けて考察すれば歴史的と風土的との二方面から入る事が出來る。これは日本文學のみならず、歐米文學を考へてもさうである。

二

今歴史的關係と云ふ點において日本と歐米とを比較して見ると、歐洲はエヂプトから發してギリシヤ、ローマを經て現在に到つたので、現在の歐洲諸國の文化的關係は日本のそれとは異つていづれも遡ればギリシヤ、ローマの文化に還つて行く感がある。その意味で歐洲諸國家の區劃は根本的のものではないと考へられる。生活樣式も共通して居り都市國

家では都會が共通してゐる。ヨーロツパの都市の見物で興味のあるのは、最初のうちで各地を旅行するにつれて餘りに共通して居るために飽いて來る傾きがある。これは一には、たとへ區劃が存してゐても共通點の方が一層着目され易いためでもある。イギリスの大英博物館においてもエヂプト、ギリシヤの彫刻、ローマのルネツサンスの繪畫等が中心に位してゐるのである。かく歐洲にあつては國家的特性が稀薄に感ぜられ、その歷史的關係は結局、國を超越して、エヂプト、ギリシヤ、ローマに還る樣に思はれるのである。かくの如き歐米各國の歷史的關係を考察した上で、日本文學形成の歷史を振り返つて見ると日本的のものの上に建設されてゐる事が明瞭となる。博物館の例を引いても日本の博物館は日本の文化のみで成立し得るだけの材料を有してゐるのである。これは正倉院だけについても同樣の事をいひ得る。日本に於ては種々の點においてあくまでも日本的のもののみで歷史を辿る事が出來るのである。これが日本とヨーロツパに於ける歷史的關係の相違である。日本歷史を光輝あらしめるものは建國以來の歷史に見出す事が出來る。皇統連綿たる天皇を中心に仰いでゐるといふ點は常に日本文學に表れる。忠誠を根柢としてゐる君臣又は主從

關係を說明する事を得るのである。國家中心の精神、家尊重の精神及びその表れである孝の精神が日本文學の指導的立場にあるといふ事を云ひ得るのである。古事記、風土記をはじめ降つて軍記物における主從關係の精神等はここから發したのである。近世文學中の「忠臣藏」「勸進帳」等の演劇が今に到るまで觀衆の興味と感動とを惹起するのは日本歷史を背景に有してゐるからである。「菅原傳授手習鑑」の身代り思想の如き、外國人には理解され難いが日本に於ては子を身代りにする事は却つて子を生かし、大きい意味では自己をも生かすのであると考へられるのである。これも日本歷史を背景にしてゐてはじめて理解し得る思想である。以上の如くこれらの演劇が特に上演されてその都度新たなる感動を與へるのは歷史的のものを根柢に有してゐるからである。以上が歐米諸國と日本との歷史的のものの相違であるが、ここから文學の根本的の相違が又考へられてくる。文學に於ける歷史的なるものの力の偉大な事は神話に於ても見る事を得る。日本の古事記、日本書紀の神話とギリシヤ神話とを比較すると、日本神話は歷史的、ギリシヤ神話は藝術的である。しかも日本人からギリシヤの神話を見ると、非國家的、非道德的なものを感じるのである。

ギリシヤ神話の中心であるオリンポスの神は父を殺す不孝の子であり、又美の神アポロデイテの美は人間的感覺的である。しかもその美の結果トロイ戰爭が起る。かくの如く不孝な子や美のためには國家をもかへりみないと云ふ如き神がギリシヤ神話にあつては中心となつてゐるのである。日本の國家的歴史的な上から見ては大いに非難さるべき點であらうが以て歴史的の相違が文學に及ぼす力の大いさを知り得るであらう。

三

歴史的なるものが文學藝術上に影響を及ぼしてゐる一方、風土とそれとの關係も相當に著しいものがある。和辻博士は「風土」と云ふ書をあらはしてゐられるが、風土は日本的なものを形成する上に大きな力を與へると同時に文學の上にも大いなる影響を及ぼしてゐる。歐洲の各地を旅行して強く感じたのは風土の相違と云ふ事である。日本は山紫水明で美しい自然を持ち四季の變化に富んでゐる。こゝから國民性が生れ、文學が作られて行く。然るにヨーロッパにおいては全體として土地が平坦で山川の起伏に乏しく、有名なドイツの

ライン下りも濁期に反して平坦な流れで決して危險を感じさせない。あのローレライの歌からうける白い飛沫や渦卷く流れの感は到底受ける事が出來ないのである。スコツトランドやスイスは日本的な自然を有してゐて美しい。然し水の清淨さは見る事が出來ない。四季の變化においても冬と夏との二季に分れ、夏は晝が長く、冬は三時頃から陽が落ちて陰鬱な日が續く。北方ドイツの陰鬱さに內省的哲學的ならしめはするが非常に暗いものがある。中には南フランスの如き土地もあるにはあるが、全體としては四季の變化に乏しい。從つて濕度の上下があるにかゝはらず寒暑の差は餘り感じられないのである。これに反して日本では春と秋の美さがある。春夏秋冬の變化は美しい自然となつて表れる。山野起伏、豐かな四季の變化、これが日本自然の特色である。從つて文學にも自然が多く採入れられ、和歌、俳句は特に自然詩が多い。歌集はまづ四季からはじめられ俳句は季題が伴ふ。これらは自然を離れては成立し得ない。この自然詩の發達には日本の風土の關係が力がある。この事は小說においても同樣で自然を背景として進展してゆく。源氏物語の自然描寫、枕草子の銳い自然觀察がなかつたとすれば如何であらう。日本は自然に隨順する。ヨーロツ

パでは自然を征服する。印度では自然に屈服してゐる。自然の景風に驚異を感じてゐる印度、人間の子によつて自然を征服し、人間的、感覺的な美をつくりあげた歐米に於いては、さうした點が、夫々の文學に反映してゐる。自然に隨順する日本の美は、歐洲のナホロヂイテとは異り、木花開耶姫の如く自然を背景とする美であつて、自然を離れては、日本の美を考へる事は出來ない。

かくの如き日本の自然美の影響は風土のしからしめた所である。日本の文學性の上に歴史的風土的の二方面が大いに關係を有し、特にその形成上に力ある事は以上でも明らかであらう。文學研究の主眼は即ちこゝにあると云へる。

この日本的な歴史風土の影響によつて形成されてゐる日本文學又は日本藝術の形と心との關係は形を小さくしてその中に豐富な内容を盛らうとしてゐると云ふことが出來る。これに對し歐米の文學藝術は心を精密に形の上に表現しようとする。從つてその形が大きくならうとする傾向がある。之が日本文學と西洋文學との一大特色として擧げたい點である。とは云へ勿論文學は形を離れては存在し得ないから日本文學が形を有する事は勿論である

が、その時にあたつて出來得る限り小さい形をとらうとするところに日本文學の特色が存するのである。この事は言語の上からも考察し得るであらう。日本古代の「言靈」或は「言擧げせぬ國」と云ふ信仰は言語に存する生命を尊崇して、言は必ず事として實現すると信じそこから言あげせぬ國の誇りが生れた。かくの如く言葉を重視して輕率には言擧げしないと云ふ關係から見ても日本文學の形を小さくして豐富な内容をその中に盛らうとする事は即ち形を輕んじない故であることが分るのである。小形態であることは種々の點から說明し得るのである。

四

今詩歌を取り上げてその點を考察してみると何れも日本の詩歌はその詩型が小さい。しかもその發展を見る時には上代の萬葉集、記紀の時代には相當に大きい詩型を有してゐたものが年月を經過するにつれて現在の如き短歌、俳句の如き小詩型に發達して來たことに氣づくのである。短歌は一の抒情詩としてそれ自身有する特質から日本の詩歌中最も融通

性を有する優秀なる詩歌と云ひ得る。その特性をつきつめれば俳句となるのである。この和歌、俳句とが相俟つて日本詩歌の重要なる詩型を形成してゐるのであるが、これは豐富な内容を小さく盛らうとする傾向が生み出した詩型と云ひ得るであらう。

更に小説方面を考察しよう。日本の小説は全般に短篇的の傾向を有してゐる。長形式の小説においてすらその構造を見ると短篇小説の集合である。例へば短篇的のものとして、「伊勢物語」「堤中納言物語」等の外數多く存するが、長形式と見做される「源氏物語」「平家物語」「太平記」「南總里見八犬傳」等においても興味の焦點は部分的の點に存してゐるのである。源氏物語は全體の構想の發展よりも部分的な人生に興味がもたれてゐる。又五十嵐力氏が連續的形式と云はれた軍記物も源氏物語と同樣である。降つて西鶴の「一代女」「一代男」を見ても部分的の興味のみであつて全體の構想は文學的興味が稀薄であると云ひ得るであらう。馬琴の八犬傳を見ると長形式ではあるが初の部分と終りでは文章も相違し、構想も無理に引きのばした如き感があり一貫する思想に乏しい。明治以後の小説も日本的傳統にもとづく短篇的であることを特色とし、その小形態の中に人生全體を凝縮してゐるの

である。かうした特色が存すればこそ平安時代の「伊勢物語」があの小篇であるにも拘らず今日に到るまで愛讀されてゐるのであらう。

五

次に演劇方面について聊か述べて見よう。日本の演劇が短篇的であることは謠曲、狂言は言ふまでもないが淨瑠璃、歌舞伎の如きものにおいても、全篇よりもその中の一幕が多く上演される事は、たとへその全部を上演しても統一がなく興味に乏しいからである事を表はしてゐると云へよう。歐米では一興行三時間位で、一つの筋を通して上演するのから見ても日本戲曲が短篇的性質を存してゐることを知り得るのである。我が國の劇は一見綜合的であり音樂、舞踊、文學其の他の藝術が綜合されてゐる如き感じをあたへるのであるがこれを全體的に觀察すると短篇的であると云はざるを得ないのである。又我が國の文學には隨筆形態が多くとられてゐる。文學論、哲學論共に論文と云ふよりはこの形態をかりてゐるのである。これも日本文學の表現が短篇的の表現をとる事を裏書するであらう。

以上の如き性質は自ら日本文學の表現上弱極において象徴的性質をとつて來ると考へられる。西洋藝術の根柢が寫實にあるならば日本文學のそれは象徴的なものである。勿論日本に於てもロマンティツクな性質、寫實的な性質を有してゐないのではない。例へば「源氏物語」や西鶴の「一代女」などである。しかしそれは寫實に徹してゐず、且つロマンチツクな主情的なものをも多分に包含してゐるのである。この事は「一代女」の最後を見ても明らかに知り得るし又「源氏物語」もそこに描かれてゐるものは人生にあり得るものの表現ではない。「もののあはれ」はロマンチツク、理想的のものを中心とする日本の浪漫精神と云ふ事が出來よう。終局においてはロマンチツクのものも寫實的のものも象徴的なものに歸着するのである。一時は華やかな表現をとつても後に枯淡な味はひを有すろ樣になるのは象徴の極致であつて、象徴は即ち豐富な内容を小形態の中に盛ることである。日本の文學、藝術の理想はこゝに存する。これは歴史的に見ても云ひ得るし、日本文學の發展過程の結局はそこに到達するであらう。象徴的になれば從つて暗示的の性質を有して來るであらう事が考へられる。屢々述べた如く小形式に無限の内容を盛らうとする事から自然を描寫

するにも單に言葉の表す意味のみではなく、そこに無限のものを包含して常に象徴的表現をとるのである。能に於てもあの簡素な中に暗示的、象徴的な表現を有してゐることは言ふまでもないことであつて、それなしには能は理解し得ないのである。日本の生活樣式についても同樣のことを云ひ得る。日本の築山と西洋の庭園とを比較して見よう。後者は花壇式で非常に美しいがどこまでも人工的の感じを脫する事が出來ずその中に大自然の姿を見出すことは難しい。これに反して築山は奥山の心を表すものと云はれその中に偉大な大自然の心を髣髴として味はふ事が出來る。又三疊や二疊の茶室にこもつて松籟の音に耳を澄ますあの茶道も生活の象徴化としての精神を表はしてゐるのである。かうした點は日本藝術にのみ云ひ得るのではないであらうか。西洋の藝術、特にギリシヤの彫刻における寫實性は一定の所まで既に完成してゐるかの感があるが西洋の藝術はこの寫實性を根柢としてゐる。そして日本文學は象徴的のものを根柢としてゐることは前述の如くである。象徴的のものは全體を一にして表す。人形淨瑠璃は三味線と一つにとけ合ひ、歌舞伎では音樂性、舞踊性等が渾然として言ひあらはし難い境地をかもし出してゐる。かくの如く劇、能、歌

舞伎の如き綜合的表現は西洋には少ない。オペラは音樂が、ドラマは文學性が中心となつてゐて、いづれも完全に綜合されてはゐない樣に感じられるのである。この意味で日本文學の有する象徴性と云ふ事は前述の如き必然的要求の結果である。從つて文學論等をとりあげて見ても論理的ではないが直觀的なるものが多い。故に合理的な立場からのみでは日本文學は摑み得ない。直觀の力が特に必要である。こゝに日本文學の特色が說明されるのである。その內容、その精神は歷史性、風土性の力から掘り上つて來た日本的な姿である。

かくの如く歷史性風土性は文學に大きな力を與へ、密接な關係を有してゐるのである。

（昭和十一年八月述、學苑）

二、日本文學と世界文學

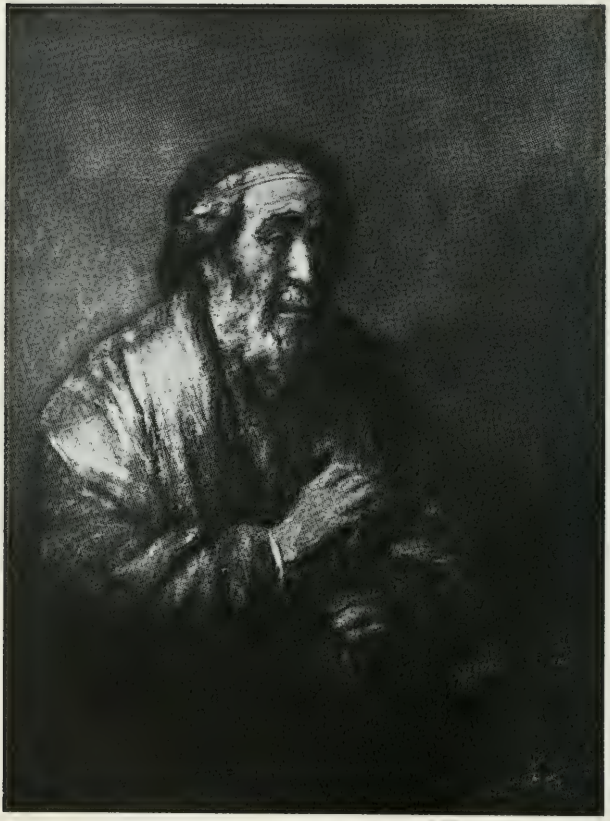
實は一年ばかり外遊し、方々廻つて參りましたが、獨逸のハンブルグでフロレンツ教授にお目にかゝりました。氏は東京帝大に獨逸文學を講ぜられ、傍日本文學史の研究をなし、立派な日本文學史の著書があります。この他外國人の書いた日本文學史としてはアストンの文學史その他二、三ありますが、フロレンツ教授のが一番優れて居るといふ風に見られます。それが出來ましたのは明治卅七、八年でありますが、今日に於いても尙且つ優れた外國人の著した日本文學史であります。氏は已に齡七十一歳で歐米の日本研究の長老であります。私がハンブルグ大學の研究室に訪れ、又家庭でお目にかゝつた際にも色々日本文學に對する感想を述べられましたがその中で、萬葉集は世界文學の價値があると云はれま

した。尙氏は古典文學を愛好せられ、特に萬葉、祝詞を尊崇されて居ります。世界文學と云ふ言葉に就いての深い意味は聽きませんでしたが、私はその意味を考へて居ります。

世界文學と云ふ事はゲエテも言つて居り、またアメリカのムルトン教授も「世界文學」を書き、「聖書」「ホーマー」「ダンテ」や「シエクスピイア」「ミルトン」等の代表作家の物を擧げて、世界文學として居ります。即ちこれは世界の代表的文學と云ふ意味でありまして、世界の文學史に必ず載る可き物と云ふ意味であります。世界文學となつた點に就いて考へますに、先づ世界文學の意味、又それに入り得る標準を考へると色々擧げられますが、萬葉集が世界文學であると云ふ事は興味のある事であります。世界文學の中に入る作品を選ぶに當つては大きく見て日本文學は世界文學の中に入る事は必ず今日では考へられます。ムルトンの「世界文學」には日本文學は全然書かれて居ませんが、現在世界文學を書く場合には日本文學は必ず入り得るものであるし、又入れなければならないと考へられます。世界文學に入り得ると云ふ事は藝術的に優れて居ると云ふ點から見て「ミルトン」「ダンテ」「シエクスピイヤ」が優れて居る事は事實でありますが、世界文學となり得たと云ふ事を考

へると色々の意味があります。一つは文學的價値に優れて居ると云ふ事が大切であるが、矢張り世界文學となり得るものは、一面から云ふと、世界に於いて、よく理解され得るもの、同時に一つの文學の有する特色、日本文學ならば日本的要素を最も豐富に持つ作品と云ふ事が出來ます。それを實際的方面から考へて見ますと、それが世界でどう云ふ風に紹介せられて居るかと云ふ事も參考になるのであります。世界文學史に於ては又作品の年代とか云ふものも考へられます。さう云ふ意味で世界文學的價値あるものを擧げると、その中に萬葉集が擧げられるのは明かであります。その他日本文學の中からさう云ふ意味の作品を拾へば色々あるが、假に日本文學の中から十の作品を選ぶとすれば「古事記」「萬葉集」「源氏物語」「能樂」「近松」「芭蕉」「西鶴」「歌舞伎」それに明治の「漱石」「鷗外」を擧げる事も一の標準であります。具體的には色々考へられますが、假に今申した中で、萬葉集と源氏物語とを取り出し、世界文學として扱はれ得る點を、今云うた點から考へた上で、更に廣く考へて見たいと思ひます。

第一に作品の作られた年代から考へると、萬葉集の出來たのは、所收歌の出來た主な年代



ホーマー、レンブラント筆
（ライデン美術館藏）

は欽明天皇から淳仁天皇まで、七世紀から八世紀までですから西洋文學史の中に入れても古い作品であります。萬葉集にある最も古い歌である所の仁德天皇の御製は三百廿年代に當るから、約四世紀の初めで、源氏にしても十一世紀の初めと見られるから斯う云う作品の出來たのは、「ホーマー」「聖書」以後の作品としては、「ダンテ」「シエクスピイヤ」「ミルトン」なども未だ出來て居なかつたのであります。かく萬葉集は年代的にも古く西洋文學の黎明の時期にあると考へられます。

第二の問題としての日本的特色、世界的理解性を中心として考へると、世界的理解性と云ふ上からすると造型的藝術が先づ理解され、その意味で日本藝術に於ける浮世繪が先づ理解された事がわかります。歐洲を廻ると、浮世繪が先づ最も多い。それは繪畫が理解され易いからであります。又繪畫に限らず、鍔、根付け等が非常に多く行つて居ります。これは造型的な物が早く理解されるからであります。文學的な方面から云ふと演劇的な物が理解に容易であります。演劇になると單に文學性のみならず、舞踊性音樂性等の外形的なものを含み、見ると云ふ力により純粹文學的な物よりも早く理解されます。それには理解

の限界があるが理解に至る迄が早い。此の意味で今日能樂、歌舞伎がヨーロッパの人々に推賞されて居るのは、さう云ふ意味で、形に觸れ得る物がある故で、此の點が大きな理由をなすのではないかと思ふのであります。其の點だけで推賞されるのではないにしても、さう云ふ點が一の理由をなして居るのであると思ひます。

更に純粹藝術と云ふ方面から云ふと散文と詩歌との二の方面がありますが、散文の方が早く理解される。と云ふのは、その異つた國の文學を見るにその國の特有の韻律情緒は容易に理解されないからであります。隨つて飜譯の場合にも散文の方は容易で韻文の方は困難であります。ウエレイ氏の譯した「源氏物語」が好評を博し、六冊本が普及版一冊になり多く讀まれ、世界的作品とされて居るが、これは勿論「源氏物語」の優れて居るにもよるが散文である點に早く理解を與へ得る點があり、また飜譯により、多く傳へ得るのであります。詩歌は散文よりも特有の調からも理解し難い點があります。此の點、詩歌の方が容易でありません。が一方詩歌は韻律を持つのでそれによつて言語的理解は出來なくても或る程度まで理解され得る方面もある。只詩歌に於ける韻律的理解は知的意味を知らなければ詩歌

の韻律は充分には理解出來ないかと思ひます。それで小說等に比して詩歌は容易に理解されないのではないでせうか。世界の理解性の上からすると詩歌は一番容易でないのであります。同じ詩歌でも理解を與へ得る物とさうでない物とがあります。此の點で日本の詩歌にも色々違ひがあり、假に「萬葉集」と「古今集」とを比較すると、「萬葉集」はリズムが素朴で大まかで長形式であるので比較的容易に理解され得る點があります。それに比し「古今集」はより纖細な調を主として居る點からして容易に理解されないのではないでせうか。その點は色々考へられ、最近アメリカのワシントンの議會圖書館の日本部長坂西女史が明治の和歌を譯して居ます。啄木の「一握の砂」と品子氏の「亂れ髪」との二つを譯して居ります。「一握の砂」はよく讀まれ、「亂れ髪」は理解されないと云つて居ましたが、「一握の砂」は調よりも智的意味が多いから理解され易いが、それに比し「亂れ髪」は調子が主であるから理解され難いと思ひます。その點は萬葉集と古今集との關係に於ても云はれる所であります。最近來朝中のフランス人ボノー氏が「萬葉集」と「古今集」との飜譯に就いて「古今集」を先にするのがよいと云つて居たのを見たが、私の考では「古今集」よりも「萬葉集」の方が理

解され、飜譯も容易であると思ひます。「萬葉集」には難解な歌もあるが、然しその點は第二義的であつて寧ろ歌全體がどう理解されるかが重要であります。その點で「萬葉集」の方が理解され易いと思ひます。しかし理解の難易は世界文學の立場からは第二義的な點であります。

次に萬葉集が世界文學となり得る點は、日本的特色を持つ作品が世界文學となり得ると思ひます。日本的特色でなく、寧ろ普遍的な物が世界文學となり得ると言ふ人がありますが私は反對で日本的特色のある作品が世界文學となり得ると思ひます。この點は言語に於ても、世界語となり得るのは言語が有する國情と云ふものを持つて居る。日本語、英語、獨逸語皆さうでありますが、さう云ふ國性を有しつゝ世界語となり得る。ヨーロッパ族行の際に、日本から印度洋を通り過ぎる港は大抵英語が使はれて居ります。獨逸語は國内はいふまでもなく、チェツコスロバキア、ハンガリイ、オーストリヤに於ても行はれて居り、スイスでは獨逸語が北に、フランス語が西に、イタリイ語が南に、と云ふ風に一國内に於ても別々に用あられて居るがその國語の流通の廣さにはその國の勢力と云ふものが應じて

居ります。世界語としての言語と云ふのもさう言ふ點から考へられます。文學が世界的位置を高めるのは、其國の特色をより多く發揮する事により、多く世界文學となり得るのであります。世界人と云ふ事を考へるにしても、日本人なら日本人的なる事によつて世界的となり得ると思ひます。此の點は歐米文化に接する時でもどの國にも共通の部分は却つて閉却されます。その國の特性を持つ事により尊重される事は常に見る所であります。此の意味で日本文學が世界文學の位置を占めるのは日本の特色を何處までも伸ばす事にあると考へられるのであります。これは理解性の多いと云ふ事と矛盾する如く見えますが兩者の調和される所に世界文學として尊重される所以があります。世界に理解されると云ふ事は世界文學となるために一應必要であるが、それは日本的特性を失つたと言ふ事でなく、特色を澤山持つて居ると云ふことが一層必要であります。此の點「萬葉集」は日本的特性を一面豐富に持つて居ます。日本文學の出發點たる上代文學として日本的特色を有するのであります。同時に理解性を容易ならしめる特性がありますから、その意味で「萬葉集」は世界文學的なものであり得るのは容易であると云へるのであります。「萬葉集」の東歌の如き

種類の歌は例へばハンガリーのブタペストで謠はれる民謠にもあります。夜待つても愛人が來ない事を謠つて居るのでありますが、三十一文字に致しますと、

明け近く待てど來ませすま寂しく床には入れどい寢もやられず

といふやうにも成り萬葉集的な歌になります。萬葉集の歌が古今集、新古今集に比し、內容的にも世界の理解を容易ならしめるものがあり、同時に日本的特色を有すると見られます。その意味で世界文學としての位置を容易に得る作品は一面に世界的理解性を持ち、一面日本的特色あるものと云ふことになります。次に、具體的に西洋で何んな作品が研究されて居るかと云ふ事について、日本文學や日本語を敎授して居る大學や向ふの人がどう云ふ作品を讀んで居り、また何う云ふ作品が飜譯されて居るかを調査すると「萬葉集」が一番讀まれて居りますし、又よく扱はれて居るのであります。方々の大學で日本文學の講義をして居りますが、獨逸ではハンブルグ、ベルリン、ライプチツヒ、ボン、フランクフルト等が日本文學や日本語の講義があります。その中でハンブルグはフロレンツ敎授が萬葉集を、ライプチツヒではウエデマイヤー氏が萬葉集を講義して居ります。オランダに參りま

すとビヤソン氏がアムステルダムの郊外のラーレムで萬葉集を譯して居ります。卷四迄完成しましたが萬葉集に對し熱心な努力をして居ります。個人的にも研究して居る人が多くあります。教科書としても萬葉集が多く、譯譯としても詩歌の方では萬葉集が一番多いと云ふ事は沼澤氏の日本文學史表覽を見ても判ります。讀まれて居る範圍から云つても多いのであります。「古事記」に就いてはチエンバレンの譯譯のある事は御承知の通りでありますが教材としては少いのであります。ピイツマイヤーは記紀の歌謠を譯して居ります。「源氏物語」にはウエレイ氏の譯が日本文學の譯譯の中で、注目されます。源氏物語は大きなものであるだけに教材としては餘り使はれてゐないやうであります。教材としては「古今集」が比較的使はれて居ります。ベルリン大學のシヤールシユミット教授は古今集の演習を行つて居りました。「謠曲」の譯譯は現在でも色々譯譯されて居ります。フロレンツ教授も謠曲を譯し、伯林の日本學會で出る「日本」と云ふ雜誌に時々發表して居ります。以上の如く萬葉集、源氏物語、古今集、謠曲等は比較的多く研究されて居ます。更に「竹取物語」が教材としては用ゐられて居ります。量の上からも理解の點からも適當であり、比較的

多くの學校に用ゐられて居ります。ベルリン、ハンブルグその他諸所に用ゐられて居り、米國のハヴァード大學にも用ゐられて居りました。取扱ふ範圍から申しますと、上代、中古、中世までが多く、近世以後は比較的扱はれて居りません。近世になると西鶴物やその他の翻譯も多少あつて注意されて居りますが、作品が多いので何れが最も良いかと云ふ點が理解されて居ません。明治文學では國木田獨歩が讀まれて居り、或人の如きは獨歩の短篇物の構成が面白いと云つて居ました。又芥川龍之介の短篇が讀まれ、又研究されて居ります。然し古典に比して範圍や作品に對する理解が一般に十分ではありません。斯う云ふ風で今日ヨーロッパで讀まれて居る作品から考へると、大體古典に詳しく其れがよく讀まれて居ます。此の點などは世界文學と云ふ事の標準を定めるに外形的な點ではあるが又多少參考になる點もありませう。それが更に外人の研究理解の側面や日本的特色と云ふ點と合せて日本文學の世界的位置を得るのを見る上に資する所があると思ひます。

私の觀察から申しますと結論として日本文學に限られた日本藝術に對する西洋人の理解なり價値の判定が次第に高まつて來て居ります。從來の日本藝術、日本文學の研究や扱はれ

た點を考へて見ますと世界の代表藝術と云ふ立場で日本文學日本藝術を研究するよりも、東洋と云ふ離れた所の文學として異國趣味的な興味を引く文化として取扱つた樣に思ひます。日本では第一義的なものとしない樣なものに興味を持つらしい。國々の都市に民族藝術と云ふ物を主とした博物館があるが、それは世界の各地の文化を主とするが、その中に日本に關するものも入つて居る。それは我々が見て不滿を感じる物が多い。日本人としては外國にまで持ち出してもらひたくないものが麗々しく掲げられてある。或土地では偏した間違つた配列をして居るのを見ました。雛人形の陳列に就いてもその並べ方やその樣子を見ても噴飯される樣なのがあつた。その他藝者によつて日本婦人が代表されるやうな考へ方もあつたのである。それによつて日本文化が代表されて居る樣に感ぜしめられるのは甚だ不滿であります。日本文化あるひは遺物を配列するに際して異國趣味で配列する態度がある。最近はさう云ふ態度を離れ異國趣味としてではなく世界文化史上で高い位置を占めるものとして、世界文化史の研究には日本文學を研究せねばならぬと云ふ機運が高まつて居ります。日本の世界的位置が高まつたので日本を眞に知らねばならないと云ふ必然的要求

から來て居るが同時に其處から日本文學に對する眞の理解を進め、日本文學の優秀である事を認めるに至つて居ります。日本文學でも世界文學に於て高い地位を占める事が次第に異國趣味的でなしに認められて來ました。それに當つて日本文學中の萬葉集、源氏物語等が代表的なものとして考へられて來つゝあると云ふ事が感ぜられました。その點から最近の日本文學の研究を見ると從來の考へ方や研究の仕方とその點で違つて來て居ます。それは尤であるが我々も日本文學が世界文學に比して劣つて居るとは考へません。西洋の演劇にしてもオペラにしても其の他或ひはシエクスピイヤの演劇を見た上で日本の歌舞伎や能を見る時に日本の演劇の優秀性が認められます。歐米から歸ると早速、歌舞伎を見ましたが、其の印象が西歐の演劇に比して劣つて居ない事を感じました。ヨーロツパ人が能や歌舞伎を鑑賞することが決してお世辭でない事を感じる。理解の程度は西洋人は西洋人としての限界があります。これは一般文化その他國民性を見ても日本がヨーロツパに劣らない、少くとも現在は劣らない、今後は一層優秀性が世界に認められ得ると思ひました。ロンドンタイムスに或書物の批評が出て居ましたが、ヨーロツパ文化は盛りを過ぎ、それに變る

精神文明は日本にあり、物質文明はアメリカに移りつゝあるといふ内容の書物でありました。エジプトからギリシヤ、ローマを經て行く間に生み出した西歐文化のかなり優秀なる一面があつたことはみとめるが、それは現在完成に達した後の腐熟に陷つて居る。エジプトのピラミツトを見て感ぜられる、肉體を殘す事により魂も復活すると云ふ樣な考へ方、それがギリシヤ彫刻、寫實を主とした歐洲藝術を生む原因となるのであります。兎に角日本と樣式を異にして居るが、世界的地位をしめる歐洲文明の行きづまりが感ぜられ、それに代るものとして日本文化や日本文學が高い位置を占める事は疑はないのであります。此の意味で日本がヨーロツパ文化に學ぶよりは對等の位置でむしろ日本的なるものを西洋に傳へる可き意味もあります。是は今日ヨーロツパに日本的なるものを取り入れる事も多く、それにより歐洲文明の新しい創造をしようとして居る事を認めました。此の意味で、日本文學に限つて見ても優秀な藝術であると考へると同時に世界文學史上に提げ出され評價されても重要な位置を占めると考へます。その場合に於ても日本文學が日本的特色を失つたものでなく、日本的特色を充分に發揮する事により世界文學としても高い地位を占めるも

のと思ひます。日本文學の世界文學としての地位を占めるのはさう云ふ點にあると思ひます。これは理論的にいつても西洋人の實際の考へ方によつても確められます。フロレンツ教授が、自分は日本文化を愛するがそれは西洋文化の影響を受けない前の眞の日本的なるものに於て引きつけられると云はれたのは、異國趣味としてもさうであらうが、眞の價値から言つても同感されるものがあるのであります。

（昭和十一年六月逃、洋光）

三、歐米諸國の國民性所見

一

國民性といふのは國民の性格であつて、日本の國民性といふのは現代の日本人の有する日本人としての性格である。この國民性と國民精神との相違は國民精神は國民の自覺であり、理想であるに對して、國民性はさういふ自覺を通り越して、それが國民の型となつて居るものである。何れの國民も必ず國民性を有するのであつて、そこには長所もあり短所もあるがそれ等を通じて性格的のものとなつて居るのである。

この國民性は現代にも生きて居る國民的性格であるが同時に、さういふ國民的性格はそ

の國の過去にわたつて存した性格であり、また未來にわたつても去ることの出來ないものであると思ふ。さうしてかういふ國民的性格が如何にして生じたかといふに、種々の事情があるであらうがその著しいものとして、その國の歴史と風土とを擧げたいと思ふ。一國の建國以來の歴史と、その國の地形氣候その他の風土とが相まち相よつて國民的性格を作りあげる點が多いと思ふ。日本人の國民性は、建國以來の歴史と、この日本の風土とによつて次第に形作られたと見られよう。

我々日本人の一の性格にも、日本の歴史と風土とが脈々と波うつて居る。現代に生きる我々は歴史に生きる日本人でもあるのである。國民性は決して過去のものでなく、日本人の今に生きて居る性格であるが而もそれは悠久の日本の歴史と、美しき日本の風土とを常に背後に負うて居るのである。私はかういふ立場から日本文學の歴史を通して日本の國民性が如何なるものであるかを探求しようとして居るのであるが、たま〳〵歐米に在留することになつた機會に歐米諸國の國民性を見聞することによつて、日本の國民性を反省したいと思つたのである。しかしもとより一國の國民性の研究にもその國の生ける生活の中に

入るとともにその國の歴史と風土とを觀察することによつて出來るので短日月に出來る事ではないのである。私の觀察は極めて一面的な觀察に過ぎないのである。

歐米の中でも英國に四月餘り、獨國に五月餘り居つたので、自然この二國を中心として佛米その他の國民性に對する所見を語りたいのであるが、私の言ひたい事はむしろ西歐的なるものの特性であり、それによつて日本的なるものを反省したいのである。

二

私は西歐への途次埃及に來て、ピラミツドを見、あの木乃良を見た時西洋文化の淵源が埃及文化にあるやうに感じた。埃及人の宗教思想として靈魂は不滅であるから肉體が保存されれば魂の再生が出來ると信じ、その再生のためには眞なきがらを保存するために木乃良とするといはれる所に、肉體的なるものを尊重する思想を認めた。一生をかけてそのなきがらをそのまゝに保存するための營みに從事したといふ埃及人の信仰の中に、ヨーロツパ的なるものの本質があるやうに感じたのである。更に歐洲の博物館の至る所で見たギリシ

ヤ彫刻の寫實性は、驚くべきもので、それ以後の彫刻のゆくべき道を十分示して居るやうに見られた。かういふ點はギリシヤ神々の上にも見られる。ギリシヤ彫刻はこのギリシヤ神話のツエウスやアポローや、アフオロデテイ即ちヴイナスを人間的に肉體的に表現したのであつて、あのギリシヤ彫刻の現實的な寫實性はギリシヤ神話の特性ともなつて居るやうに感じた。ローマ時代になつて、繪畫の題材として極めて多く用ゐられて居る幼きキリストの母マリヤにいだかれて居る繪は私に人間的な慈愛をしみ〴〵と感じさせたが一方にキリストのはりつけの繪は餘りに肉體的な慘酷性を見せつけられたやうに感じたのである。

かういふ歐洲文化の歴史をたどつてゆき、また歐洲の自然、それは日本のやうに田畑を中心とするのと違つて牧場を主として居り、山川の起伏なくして平坦な自然であり、一年が二期にわかれるに過ぎない歐洲の季節を見て居ると、西歐的なるものの特性がある程度まで理解されるやうに思ふ。肉體性の尊重といふこと、神に遠い現實的人間的な西歐精神が見られるのである。神をも人間的にする傾向が見られるのである。人をも神に高める日本的なる特性と遥かなるものを感ずるのである。

すべてのものに形を與へようとするこの傾向は歐洲の至る所にある記念像にも見ることが出來る。ゼノア其他の墓にとり〳〵に彫まれた亡き人の姿をきざんだ像にも見られるのである。私はさういつた中に亡き人を思ふの情を見る。しかしさういふ事をしないで、小さな墓石に亡き人のすべての魂をこめて追慕する、日本人的なる特性との相違を見る。神を神殿の奥深き中に見て西歐のやうに彫刻化しない所に西歐と日本的なるものとの相違を見るのである。全體として西歐的なるものは形を精神よりも大きく表さうとする。尠くとも形が内容よりも小さくなることを好まないに對して、日本的なるものは形を出來るだけ小さくして内容を豐富にしようとする。尠くとも形が内容よりも過大になることを好まないのである。日本的なるものは形を小さくして、はては無くしようとする。しかし無くすれば藝術はなくなる。かくて形を存して而も最小にしようとする所に日本的なるものの特質もあり、日本的樣式もそこに見られるやうである。

形を尊重することはやがて形を出來るだけ精密に扱はうとするために寫實的になるのである。歐洲の繪畫彫刻その他の藝術の特質もこゝにあると見られるのである。

三

かういふ歐洲の特質は全體に共通するものであるが、なほ國々によつて相當に變化がある。それはまた國々の歴史と風土とによつて變化し、そこに違つた國民性を生ずるものと見られる。

私は英國に昨年の五月二十日に着いたが、ジョージ五世の御即位二十五年の覲典のすんだ後で、王の御通りが屢々あつたのを拜觀することが出來た。英國民はジョージ五世に對する深い信愛の情を示した。たゞその信愛の中には日本の國民が天皇に對し奉るやうな絶對的な神として敬ふ心持を見ることは出來なかつた。さうしてまた漱石によつて日本にもよく知られて居る倫敦塔の、出來てから八百年記念の野外劇が塔を配景として行はれたのを見た。それは塔の歴史を十數場にした劇であつたが、塔の歴史は英國の歴史でもある所に、その野外劇を通して英國の歴史を觀たのであるが、カンタベリイ大僧正の殺される場面などに花やかな英國の建設される途上にあつた暗いいたましい歴史の一面を見たのであ

ヘルマンの像

ヴツケブルグの豐年感謝祭（一）　（二）

る。また英國の國家的の行事のやうになつて居るダービーの競馬を昨年の六月五日に見た。王や女王も參られるのであるが、極めて多く集つて賭をする。ロンドンでは犬の競爭も盛んであるが、かういふ點の盛んな所に英國の功利主義的な特性が見られるやうに思つた。

同時に英國民が傳統を尊重することはその英國民の殘した藝術その他の文化に對する尊重によつて知られる。英國民が沙翁を尊重することは著しく、沙翁劇は夏期には殆ど連日行はれ、その古蹟には傳說の沙翁の跡さへ見られるやうである。この傳統を重んずることは英國民がその國の國語を尊重し、英語の外には容易に用ゐないことによつても知られるのである。かういふやうに歷史の方面から英國民の性格が作られて居るが、同時に英國特にイングランドを步いて見て、あの平淡な土地の中に牧場を主とした展やかな感じのする地形が國民にゆつたりした感じを與へて居るやうに見られる。これは同じ英國でもスコツトランドの方が山や湖水が多く起伏のあるためもあつてその性格が著しく感情的であり、尠くともそれが表面に現れて居るのである。これは複雜な事情はあらうがさういふ地理的

環境がある程度まで影響して居ると思ふ。さうして英國が四方海によつて圍まれて居ることがかういふ傳統を重んずる傾向を生み出したものと思はれるものである。その點は日本に於けると同樣であるが、ヨーロツパ的なるものや英國の歷史、風土の相違によつて南國民の性格の著しい相違を生み出して居ると思ふ。

四

英國から獨逸國の伯林にうつつたのは昭和十年の九月十一日であつたが、私は英國の國民性と獨逸の國民性との間に著しい相違を見出した。町を歩いても英國民のやうな整つた儀禮は見られない。英國民のやうな靜かな落ちつきはなく、情熱にみちた騷がしさが見られる。いかつい顏をして居る。しかしそのいかつい顏の下に親しさがある。正直な率直さがあるのである。

私はドイツで亡きチエンバレン翁とならび稱せられるべき日本研究家であるハンブルグ大學のカール・フロレンツ敎授やベルリン大學のシヤールシユミツト敎授にあつて種々語

ダルマシン人の大圖を見た時

つたが極めて率直で心の底からうちあけて語る性格を見た。イギリスの國民性が形を重んずる國民であるならばドイツ國民は心を重んずる國民である。この點が歐洲の中でも幾分日本に近い所がある所以であると思ふ。

さうしてイギリスの歴史に比して、ドイツの歴史は戰敗の苦惱を味つて居る國民であるだけに、その戰敗をそゝがうとする心が強い情熱となつて居るのである。私はその年の十月六日ビユツケブルグの豐年感謝祭を見にいつて、ビユツケブルグの岡をうづめた數十萬と號した聽衆の中でヒツトラーの演說を聞いたが、ドイツ人の情熱を見たのである。イギリスが個人の人格を重んずる國民であるとすればドイツ人は英雄によつて統率される國民であることを思つたのである。ナチスによる統制はドイツ國民性にはふさはしいと思ふ。

もとよりドイツ國民は感覺の國民ではない、ひらめきのある國民ではない。ドイツの近代の繪畫を見る時、全體としてその浪漫的なものは見られるがその色彩は極めて感覺的でないのである。むしろ思索の國民であり、物を組織だてる國民である。こゝに哲學は發達したであらうが、藝術的感覺は拙い。哲學的藝術といつた感が深いのである。かういふ思

索と體系の國民であることは歐洲の中でも比較的暗い北歐的な地理的環境が影響する所が多いと思ふ。私のドイツに居たのは九月から二月までの、日の短い時であつたためもあらうがやはり光線の尠さを感じた。この北歐的暗さは思索の世界を開くとともにお伽噺の世界をも開いて居る。ドイツに多い森をさまよふ時、暗い水の流れに白鳥の泳いで居るのを見る時、幾度私はお伽噺の世界に入つたか知れないのである。クリスマスの夜をベルリンで過したが雪の降る夜をグルウネ・ヴルドの教會に參り、森の道を歩いて歸る時、この北歐の雪の夜こそクリスマスにふさはしいと感じたのである。

かくしてドイツの國民性は素樸で正直で情熱がある。感覺には鈍感であらうが思索的であり、神秘的であり、浪漫的でもあると思ふ。たゞ歴史を重んじようとする心はあるが歴史が乏しく、こゝにドイツの國民性の寂しさもあると思ふ。

五

ドイツからフランスに入つた時、私は明るさを見た。十月の中旬に南佛のニイスの海岸

に立つた時八月のやうな明るい光があつたのである。寒い二月にパリにあつたがなほどこかに明るい感じがした。この地理的にもつ明るさが自らフランス國民性に影響して、ドイツ人とはちがつて、暗くとも表面は明るいのである。この明るさは國民性として感覺的な鋭さを生む。パリイの何處を歩いても感覺の鋭さを見るのである。それは服裝にも食物の上にも現れて居る。ドイツ語とフランス語とを感覺として聞いて居るだけでもこの點が首肯される。

さうしてドイツ人のやうな情熱はない。靜かで悠然として居る。二月の寒い夕ぐれにもセイス河畔に悠然と釣をして居るのである。この落ちつきはイギリス人にも似て居るやうであるが、イギリス人の落ちつきは生活に底力のある落ちつきである。フランス人の落ちつきは藝術的觀照から來る落ちつきである。フランス人はこの藝術的な直觀の鋭さとともに一面には理性的であり、合理的である。むしろ直覺的な感性の鋭さと合理的なものとが二元的になつて居るやうである。そこにフランス國民性の矛盾があるのではないかと思ふ。個人の自由を喜びながらナポレオンが出、ジヤンダルクが出る所にフランス人の二元的な

性格が見られるのではないか。

アメリカに於てはフランスの國民性にある直觀的な點、感覺的な點をヂヤナリスヂツクにした觀がある。これは文學研究の學風から見てもイギリス的な實際的な學風と、フランスの直覺的な點とを併せて通俗化し平面化したやうに感ずる。たゞアメリカに於ては極めて廣い土地と歴史のない寂しさとが國民性の深さを感じさせない。散漫になつて集中的でない點を感じさせる。

六

さうして國々を見て國語といふものが、その國の國民性をよく反映して居ることを見るのである。その國の言語の特質によつてその國民性が見られる。ドイツ語の精確さと固くるしい感はドイツの國民性を反映して居り、フランス語の短い句と軟かな發音とはフランスの國民性をよく現して居る。さうして同じ英語にしてもロンドンの英語が發音を不明瞭にするやうな表出に對してアメリカの英語は卷舌を用ゐる感がある。私の倫敦に滯在中アメ

リカの英語は英語ではないといふ論文がタイムスの讀書欄に見えて居たが同じ言語でありながら國民によつてかくも變るもののあることを感じた。さうしてその國語の多く行はれて居るほどその國の勢力の大なるを思はせる。英語とドイツ語とフランス語との普及の分布がそれ等の國の勢力を思はせるのである。スウイスの如きは小さい國でありながら北部にドイツ語、ジュネーブあたりはフランス語、南はイタリヤ語が行はれて居る狀態である。オーストリヤの如きその國語なき國は憐れである。ハンガリイやチェツコスロバキヤの如きその國語を有して街の看板はその國の語で記してあるが、會話はドイツ語が多く用ゐられて居るのである。

さうして私は歐洲の國民性の相違を見ながらなほそこに共通性を見た。歐洲はそれだけで一のまとまつた區域をなし、都市が中心となつて居るが、その都市の樣式は大體に於て同樣である。歐洲諸國に國家主義、民族主義は盛んであるが政治的な點が主であつて歴史的にさかのぼればギリシヤ、ローマになつてしまふのである。さうしてこの歐米の國民性やヨーロツパ的なるものの特質を見て、深く反省させられるものは日本の國民性である。

さうして日本の國民性の強みは建國以來連綿たる國體を有することである。國民性を反省する時、我々は同じ線の上をたどつて直ちに建國の古までさかのぼり得ることは日本國民の何よりもの強みである。美しき山川と風土とはこの歴史性と相まつて、日本の美しい國民性を形成して居るのである。この歴史と地理との上に日本の國民性がしつかりと結びつけられて居る所に、日本の國民性の獨自の強さを有するのであることを、歐米を歩いて見て、一層かたく信ずることを得たのである。さうして國民性は日本に於てはそのまゝ民族性と同意義に用ゐられ、國民精神は民族精神と同樣に用ゐられ得るといふ語を有することを附加へたいのである（昭和十一年五月）

四、歐洲の演劇所見

一

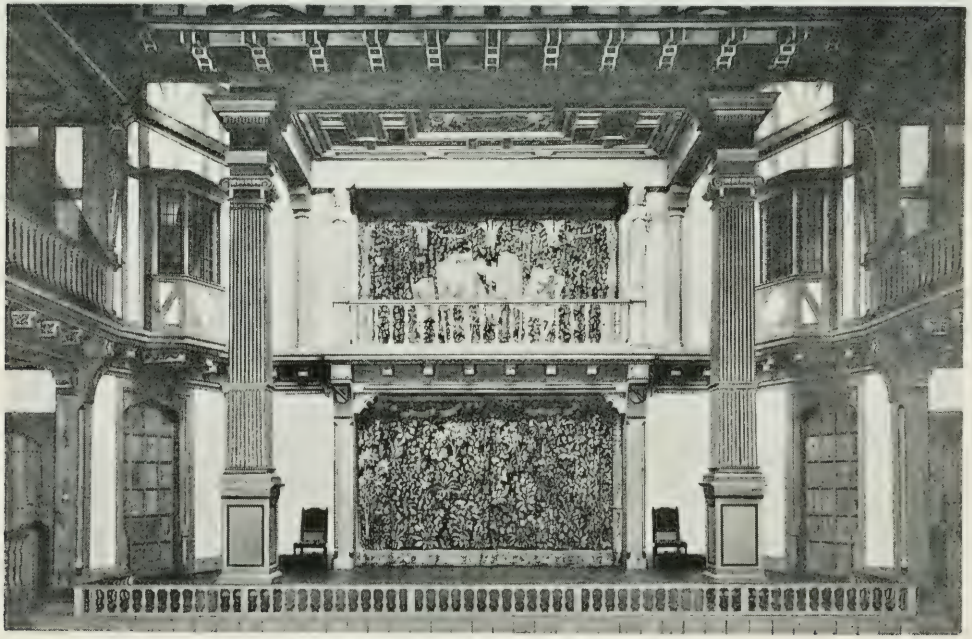
歐洲で見た演劇に關する所見をいさゝか述べたい。日本で歌舞伎を觀、淨瑠璃を聞くになれた私共は外國に來て、それ等を見ることの出來ないのに一種の寂寞を感ずる。たゞ日本にも西歐にも共通する映畫の次第に隆盛になつて來たのは兩者の共通性をまして來たが、日本に於て映畫に比較的親まなかつた私などは、はじめに相當に寂寞を感じたのである。それでも、最も便利のいゝ映畫に次第に親むことになつて來たことは自然の成行であつた。

さて西歐の演劇的なものとしては、第一に劇があり、第二にオペラがあり、第三にレビ

ユウ、バレツト、寄席があり、第四に映畫がある。是等の何れをも多少づつ觀たから、それ等に就いての素人的な印象を少しく記して見たい。

是等の中、はじめの三者は平常は夜の八時もしくは八時半、まれに九時にはじまつて十一時もしくは十一時半頃に終るやうである。土曜日の午後等に、マチネイのある場合もある。何れにしても一回が約二時間半乃至三時間位であるから、日本の演劇のやうな長時間に退屈することはない。かういふ短時間に行はれ得るのは西歐では一つの脚本だけを行ふ事による。レビユウなどは別として、劇及びオペラは一度には一の作品だけを演ずるのである。これは日本では容易に實行し難い點であらうが、まとまつた鑑賞にはいゝ點があるやうである。先づ劇の方面から記して見たい。

所謂劇といふ方面では英國では沙翁劇を三回と他のものを二三度見た。英國では沙翁劇の重んぜられることは非常なもので、私の滯英した間はいつでも沙翁劇の一つ位は何處かで演ぜられて居たやうである。一度は沙翁の生誕地ストラツトフオードへ行つた時、そこの沙翁劇場で土曜日のマチネイを見た。ベニスの商人であつた。午後の二時から五時頃ま



沙翁劇場（ワシントン沙翁博物館）

でかゝつた。ベニスの商人はかつて法廷の場を日本の東京劇場で左團次、松蔦のそれを見たので比較の上からも興味があつた。舞臺はさう廣くはなく、舞臺裏迄もむしろ衝單であつた。日本で見た時は法廷の場がいかにも階段なども大きく、御殿めやうに感じたが、ここでは非常に小さかつた。また質素に感じられた。それでも幕の開く時の形式的な仕ぐさは、助六のはじめを見るやうで古典的に感じられた、シヤイロツクに扮した俳優はいかにもふてぶてしく、がつちりしたよく透る聲でいかにもせまつてゐた。アントニオはそれほどでなかつた。シヤイロツクの女が月の晩に戀人と「こんな晩に」(イン・サッチ・ア・ナイト)を繰り返しながら、悲しく語る邊りなどロマンチツクな感じがした。それにしても臺詞は日本の歌舞伎のやうなゆつくりした誇張的抑揚は尠く、日常の會話と距離の尠いやうに感じた。さうして音樂的要素や舞踊的要素も尠いやうに感じた。勿論時にふざけた行爲もあつたが、一體に臺詞本位に近い事を感じた。

かういつた感じは、ロンドンでレジエント・パークで見た沙翁の野外劇に於ても裏付けられる。野外劇は一度は「十二夜」を見たし、一度は「眞夏の夜の夢」を見た。十二夜の方は雨

模樣の夜で天幕の中で行はれたので野外劇らしくなく、室内劇としては舞臺裝置がないので餘り興味を引かなかつた。それでもおどけた會話に分らぬながら、ある興味があつた。眞夏の夜の夢は全體に神秘的な劇で、馬やその他の動物も出て來るのであるが、自然の背景を利用してその効果が多く、殊に照明の巧みな點に一層神秘的な點が多くて、室内では見られない興味があつた。とにかく沙翁劇そのものも、日本の歌舞伎と比較すれば音樂や舞踊よりも臺詞本位であるやうに感じられ、それに舞臺裝置の簡單なことは意外であつた。後にアメリカのワシントンの沙翁博物館にいつた時、沙翁當時の舞臺によつて作つたという舞臺を見たが、二階立の舞臺であつた。が舞臺そのものは小さかつた。

二

次にオペラは主として獨逸で見たし、佛蘭西のパリでも一度オペラ劇場でファウストを見た。獨逸に居た頃はオペラ季節でもあつたのでベルリンやライプチヒその他で度々見た。たゞ墨逸では數ケ月ゐたのにファウストを一度も見る機會がなかつたが偶然パリイに三週

間ほど居つた間にファウストがあつたので見にいつたのである。どの國のオペラが一番いいとかよく聞く所であるが、ファウストなどはさういふことを離れて見應へのあるオペラであることは言ふ迄もない。パリではファウストやリゴレツトのやうなオペラを演ずるオペラ・ハウスと、カルメンその他喜劇的なものをやるオペラ・コミツクとがある。ファウストは夜の七時半頃からはじまつて十一時半頃に終つた。日本でもファウストなどは二度位は見てゐるのであるが、歐洲では伴奏のそろつてゐる點、劇場の落ちつきや、安定した點などと相まつてオペラなどは向ふで見るものであるといふ感がした。ベルリンで見た中では沙翁原作のオテロを興味深く見た。終の場面など心を打たれた。オペラこそ西歐の演劇の中でも劇場も壯麗であり、舞臺裝置も立派で觀衆も服裝を整へて一番形式的に中心をなすやうである。日本の歌舞伎と同じやうな位置を占めるのであらう。たゞ率直な印象をいふと、オペラは音樂が主であらうが、それにしても音樂と所作とがしつくり統一されてゐないので、何か不調和なものを感ずる。日本の歌舞伎のやうな音樂的要素と舞踊的要素と文學的要素とが渾然と融合したといふ感じが起らない。綜合藝術としての見方からいへ

ば、歌舞伎ほどの統一はないやうに思ふ。これは西洋音楽の徐り分らず、舞台での歌詞の殆ど通じない素人の印象のためもあらうが、しかし形態上のさういふ性質はたしかにあると思ふ。

次に寄席やレビユウといつたものでは猥褻で比較的多く見たが大體日本の言語本位のものと舞踊本位のものと輕業本位のものとに分れるやうである。落語本位のものは言葉のよく分らない外國人には興味も淡いわけではあるが笑によつて人生を明るくしようとする興行態度は輕業の氣持にも反映して居るやうである。茶番式のナンセンスに猥褻人なども興がる所がある。輕業本位のものは隨分危い芸もあつてたか〳〵器用であると感ずる。ベルリンのウインター・ガルテンなどはその代表的のものであらう。舞踊本位のは巨栄のどこにも多いのであるが、猥褻はやはり比較的地味である。佛蘭西の官能的なる、ニユウヨークのラヂオ・シティなどの女がゝりな規模等々によつてそれ〴〵異なるやうである。パリイのある寄席では若い歌手が小唄や民謡のやうなものを一時間位りひとりでうたつて人氣をさらつてゐた。映畫はどこでもさかん、而も觀客をひきつけて居る。ニユウスを主とした映畫

など便利なものと思はれた。日本の昨年の地震や水害なども數日ならずして向ふのニウスで見ることが出來た。獨逸で見た、ヂッケンスの「デッビット・コッパアフイルド」の映畫や、ゲーテの「ヘルマンとドロテア」を取材した作など興味深く見た。今年のはじめなどロンドンではチヤツプリンの五年振りとかの作が人氣を得て居た。

その他歐米諸國で街の見世物や街の音樂師が相當に多いことを感じた。パリイの街の廣場などでは各種の見世物が街ゆく人を止めてゐた。ロンドンの街路では街繪師が繪をかいてゐる。日本にも存したといふ砂繪を思ひ出した。街を歩いてゐると音樂師の數人が樂器を奏し聲をはり上げて居る。傍を通ると帽子を差出しては金をいれさせられる。スコツトランドの湖水のそばの山道でスコツトランド特有の樂器でうたつてゐるのに出合つた時などは興深く感じたが、ロンドンなどの街上でこれに出合ふ時など癪りいゝ心持ではない。流行歌見も見世物にまで下つたからこの邊でとゞめたい。

第三章　西遊日記抄　一

第三章　西遊日記抄　一

一、歐米をめぐりて

私のこの度の旅行は丁度一年間で、昨年の四月四日、花の咲き始める頃に神戸を出て、今年花の咲き揃うた頃に歸つて參りました。花に送られ、又花に迎へられて歸つた譯でございます。大體私の印象を纏めて申上げますと、四つに分けて見ることが出來ます。即ち四月四日に日本を立ち五月二十日に倫敦に着くまでの船中生活が第一期。五月二十一日から九月十日まで、即ち倫敦を中心とした時期が大體第二期。それから九月十日に倫敦を立つて十一日に伯林に着き、それから一月一杯まで伯林に居りまして二月一日巴里へ行くまでが第三期。二月一日に巴里に着きましてから四月十六日に日本に着くまでが第四期となるのでありますが、それ等の中で、殊に印象の深かつた點をば一二申上げることに致します。

神戸を出帆して倫敦に着くまでの行程は、普通に誰でも辿る道でございますが、郵船會社の香取丸に乗りまして先づ上海に上陸して見物し次に香港を見物し、新嘉坡や印度のコロンボでも降り埃及のカイロでは一泊致しました。マルセーユでも一日見物しました。次にナポリとジブラルタルとを見物しまして、倫敦へ着いたのであります。

日本を出てから段々南へ行きますと、新嘉坡では黒ん坊が港に集つて居りまして、非常に特殊の感じがございました。またコロンボでは彼處のカンデイに參りましたが、非常に長い道程をば自動車に乘つて走らせました。途中で象が遊んで居るのなど、初めての旅行者としての印象は非常に深いのでございますが、一番自分の頭に殘つて居るのは埃及であります。これは向ふへ行かれた方は誰方でも同樣であらうと思ひます。私共の船は朝五時頃にスエズに着きまして、それから團體として二十人ばかり一緒になつて砂漠を通つてカイロへ行き、一泊致しましたが、私はピラミツドやスフインクスを見まして、埃及人が何故あんな大きなものを造つたのであらうかといつたやうな點から、西洋文化の特質といふものが、あの埃及人の間から段々と發展して來たやうなことを感じたのであります。何故

十六世紀の木彫マリア（ライプツィヒ博物館、ミュンヘン）

あんな大きなものを造つたかに就いては色々意見があつたやうでございますが、今日としましては、國王が、自分の遺骸がミイラになつて、何時までも殘つて居れば、いつかは靈魂が戻つて復活するといふやうな信仰からミイラにしたといふことでありますが、斯ういふ點などはやはり肉體を重んずるといふやうな氣持、一方から申しますれば、精神といふものがある爲にはどうしても肉體がなくてはならないといふ考へ方でありまして、これは日本などに於ける信仰とはよほど違ふのではないかと私は考へたのであります。その點歐洲文明に於ては、精神よりも肉體を重んずるといふ傾向があり、神話などに於きましても、或はヴイナスの彫刻を寫實的に精密にするのであり、日本に於きましては何にもない所にも何となく神の尊嚴を感じて來るといふ氣持があります。それは西洋文明に於ける物質的と東洋文明の精神的との違ひになるのではないかと思ふのであります。その點で埃及文化が希臘の文化になり、更に羅馬の文化になり、更に歐洲の文化になつて來るといふその道筋に、私は興味を感じまして、さういふ氣持を持つて歐洲の博物館の繪や彫刻などを見て廻つたのであります。その意味で埃及のピラミツドなどを觀て感じた印象は、單に埃及の

ふれたしてではなく、何か歐洲文化の淵源といふやうな氣持で印象に殘つて居るのであります。それで倫敦に着きましてからも埃及の宗教を研究して見ようと思ひましたが餘り十分なことは出來ませんでした。途中の印象としては埃及は忘れ難い所であります。

倫敦に着きましてからは、埃及などの印象が深かつた所から、大英博物館の研究室に通ふことに致しました。さうして、藝術の起源といふやうなことを題目にして調べたのであります。倫敦を中心に色々の博物館を見ると同時に旅行も致しましたが、英吉利に於きましては一番私の感じた大きな印象としては、やはり傳統を非常に重んずるといふ事柄であります。英吉利人は自國の言語なり文化なり或は生活なりに非常な自信を持つて居ると申しますか、自負を持つて居ると申しますか、さういふ點が非常に強いのであります。アーサア・ウエレイ氏といふ日本文學の研究者にも會ひましたが、日本文學を相當に深く研究して居り、氏の英譯した源氏物語は、日本の學界にも大きな影響を與へましたし、英吉利の方でも多く讀まれて、最近は普及版が出て十志位の本になつて出て居りますし、亞米利加の方では二部本になつて居りますが、やはり相當に讀まれて居り、ウエレイ氏の譯も宜いと

いふ評判であります。氏は會話は餘り達者でないからでもありませうが、日本語を運んで話すことはしませんでした。ウエレイ氏に會ひましたのは、氏と親交のある東京美術學校の矢代教授が、氏の瑞西から歸られた機會に會ふやうに運んで呉れまして、一高教授の井上書と三人で會つたのでありますが、矢代教授も井上書も英語の巧みな方でありますから、その場合日本語を話す必要がなかつたのでありますが、さういふ場合にも皆ど他國語をほ言はれなかつたのでした。

又オツクスフオードの教育會議に參りまして、彼處のハートフオド、カレツヂの寄宿舍に一週間ばかり居つて、種々の人に會つたのですが、英國人は餘り外國語を使はない。自國語に對して非常に自信を持つて外國の言葉を使はうとしないといふ氣持が窺はれます。これが獨逸人とかその他の國の人と異つた一つの國民性の現れだと思ひます。それから英國人が文豪としてのシエークスピア等に對する國民的愛好の深さといふやうなことも、やはり自國の文豪に對する非常なる尊重の念といふものがあるのではないかと思ひます。私の參りましたのは五月の末でありまして、丁度シエークスピアの色々の催しのある時では

ありました。倫敦に於ては引續きシエークスピアの野外劇ベージエント、がありました。それから生れ故郷のストラツトフオードに於ては沙翁劇場で沙翁のものを演つて居りました。まういふやうにシエークスピアのものを見ようとすれば見る機會がいくらでもあるといふやうな點は、日本に於きまして例へば是迄居てしたら近畿の國民から愛好される程度の狂や物語たらば、高麗とか源氏とかいふものに對するそれ等と比較致されます。日本人に於ては、いくらでもさういふ自國文學を尊重するといふ點は相當に強いものではありませうが、英國人がシエークスピアに對する國民的尊重といふやうな氣持はそれにも劣らないと思はれます。

又倫敦に參りますれば誰も感ずることでありますが、非常に道路が狹いのでありまして、あの二階建のバスが街を通りますと、殆ど通りが一杯になつてしまつて參く餘地がないくらゐになります。私は倫敦の街はもう少し綺麗な街かと思ひましたら道幅が狹いばかりでなく、全體に煤けて黑ずんで居る、倫敦の一番中心でありますオツクスフオード・ストリート等に於てもさうであります。そんな意味で私の倫敦の街を見て感じた氣持は、美しいとかいふやうな感じよりは、如何にも古ぼけて煤けたやうな感じであつたのであります。

が、併しこの煤けた中にも英吉利の人の傳統を重んずる習慣がある。道路にしましても、少しも改修しないで昔の儘を通すといふやうな氣持が自然さうなつて居るのではないかとも感じました。これには種々の理由がありませう。日本のやうに地震がをいとか火事が多ければ自然道路を廣くする必要に迫られるでありませうが、さういふことがないからでもありませうか、全體として傳統の中に活きて居るといふやうな氣持が善い意味にも悪い意味にもあるやうに解せられます。昨夜私の倫敦に着きました頃はデヨーヂ五世のシルバー・ジユビリーの濟みました後でありまして、國王が夜々倫敦市の方々を御廻り遊ばし、一緒共も萬國綱通りを祭禮致しました。さういふ場合に英國人の國王に對する感情をじかに見たいと思つて注意して居りましたが、非常に親しさを以て迎へて居るのでありました。次、日本に於て、現御神として天皇陛下に對し奉る感情と違つて居りまして、そこに日本の國柄と英國の國柄との違かあり、さういふ點に同じ傳統を尊重するにしても違つて居りますが、英國人は英國の國柄の上に立つて傳統を尊重する點が多く、又英國といふものに對する一つの誇を持つて居るといふことを感じた譯であります。英國の國民性といふやうなものに

對してはそんな風に感じたのでありますが、先程申しましたやうにオツクスフオード大學の寄宿舍に居りました一週間ばかりの間は種々の會議にも出たり、或は大學の中を歩いたり致しましたが、オツクスフオード大學が今の日本の大學或は他の國の大學などと違つて、澤山のカレツヂが集つて居り、カレツヂは主として寄宿舍であり、またどのカレツヂにも教會があるのであります。私はオツクスフオード大學を見まして教會と寄宿舍とからなつて居る大學のやうに感じました。それだけに歐洲の傳統同じキリスト教の信同、同時に英國人の人格と申しますか、人間としての教養といふことを尊重するといふ點から教育をして居る。さういふ意味で所謂學問的な知識の深さといふよりも寧ろ人間的な教養が中心であり又さういふ宗教的な如何にも傳統の中に入つて居る氣持を感じたのであります。彼處の圖書館のありまする二階からオツクスフオードの大學の街を見下した時に、やはり英國の大學の傳統の古さといふものが感じられましたし、その意味では英國人としての傳統を尊重するといふ氣持があゝいふ一つの大學街を通して強く感じられました。歐洲諸國を巡つて來て英國といふ國が歐洲の中では最も傳統を尊重する國であるといふことを感じ

ました。尙ほ方々旅行致します中に吾々が非常に窮屈に感じまするのは、何處へ行つてもチップを渡すやうなことでありまして、斯ういふことは可なり煩雜に感じましたが、私は一度チップを斷わられたことがありました。實は私の失敗談になりますが、スコツトランドの方へ旅行しまして、エヂンバラを通つてグラスゴーへ行つて驛で何か買はうとして財布を出しましたら、バラ〳〵と落してしまつたのです。さうしますと十三四の少女が來て拾つて呉れました。非常に親切に思ひましたので御禮を上げようとしたら「ノー」と斷われてしまつた。私はこの斷わられたといふ事に對して一種の寂びを感じましたが、歐羅巴を巡りましてもチップなどの問題は不自由を感じました。これなどはやはり日本人と西洋人との生活の習慣の相違から來て居ることで、その中に入つてしまへば何でもないことでありませうけれども、さういふ點は日本としては何處か生活にピツタリ入り込めない點がありましたし、これを私共のやうな年を取つてから巡りました者にとつては一層向ふの氣持に入り得ない點も多いのでありますが、併し全體として考へますれば英國に居りまする間さう大して不愉快のこともなく寧ろ愉快に過し得たやうに感じます。

次に獨逸へ入つてからの二三の點を申上げますと、獨逸へ入りましてからは相當に旅行致しました。今度參りました研究題目は文學の研究法の研究でありますが、一方に自分としては、日本文化がどういふやうに西洋の方で研究されて居るかを調べて見たい氣持もありましたので、獨逸に參りましてからは旅行する場合には寧ろさういふ意味で、日本語の講義のある大學を歴訪して、その研究室を見たり、その講義をして居る方に會ふことを主として居りました。さういふ意味で十數人の日本文學研究家に逢ひましたし、又方々の研究室も參觀いたしました。

獨逸では自分として非常に印象の深いのはワイマールに參つたことであります。ライプチヒ大學のウパーシヤール教授の日本語教室を參觀に行きましてその歸りにワイマールに寄りましたが、ライプチヒを立つ頃から雪が降出しましてワイマールへ著きました時には一尺近く積つて居りました。雪の中を踏み分けながらゲーテの家やシルレルの家を見ました。ゲーテ臨終の間やシルレルの臨終の部屋なども見ましたが、私の特に感じの深いのは、丁度ワイマールの城の後ろの河を渡りますと庭園のやうな所にある小さい家がありまして

ゲーテのガルテンハウス（ワイマール）

ゲーテが夏毎に行つて居つたといふ所でありますが、ガルテン・ハウスと言はれて居ります。その邊りは雪が一面に積つて居る。呼鈴があつて押しますと遠くに留守番の婆さんの居る所に通じて、暫くして白髪のお婆さんが自分の小屋から出て來て案内して呉れましたが、その注意書きにも呼鈴を押してから五分か十分位待つて呉れといふことが書いてありました。雪の日に歩いたといふ點で私としてはワイマールの一日は一層感慨な思ひ出となつて居ります。ワイマールは獨逸へ行きますれば何人も訪問される所でありますが雪の時にガルテン・ハウスを訪問したあの思ひ出は何となく深く感じられます。尙ほ瑞西、伊太利などでも色々思ひ出はありますが、今日は略しておきます。最後に――巴里に三週間ばかり居りまして、大西洋を通り亞米利加を横斷して歸つたのでありますが、亞米利加ではボストンを訪れました時が最も印象が深くございました。殊にハアバード大學には東京帝大の國文科を卒業されましたエリセイフ氏が日本語の教授をして居られます。氏は歌舞を取る傍ら支那の文獻を主とした燕京研究所が出來て居りまして其處の主任をして居られます。エリセイフ氏には上田先生の紹介もありまして、色々御親切にして下さいました、エリセ

イフ氏としても日本に青年時代の七八年を送つたので日本といふ國が大きな印象を與へられて居ると言はれました。殊にエリセイフ氏は日本語が非常に達者な人で粹な所や洒落なども私共よりも遙かに巧みに言はれましたし、長者の家に生れただけに人柄も慇ゝでありまして、愉快に過しました。今年の暮頃に亞米利加を出發して支那にゆかれ日本へも來年の六月頃に來る積りであると言つて居られました。又ボストン美術館は浮世繪や室町時代の繪畫をはじめ日本美術のいゝものが多くありますが、日本の近世文學に關しても相當に多くの材料が集つて居ります。

獨逸では日本研究が全體として盛ではありますけれども、材料としては獨逸の方には良いものはないやうに感じましたが、英吉利とか亞米利加に於ては材料的に良いものが行つて居るのではないかと思ふました。尙ほ亞米利加ではナイヤガラの瀑を見ました。丁度その時は大雪で水が出た頃でありましたが、雪の中を蹣跚けて行つて見ましたけれども、瀧そのものゝ感じは幅が廣くて瀧らしくないやうな感じが致しまして、日本の瀧を見て居ります者に取つては、少くとも私には瀧といふやうな感じが餘りしませんでしたけれども名物

として見るだけのことはあります。亞米利加には四週間ばかり居りまして、ボストンに一週間居りあとは晴見町に通りましたが、あの美術館にも日本の平野女史といふ方が浮世繪の研究をして居られます。最近に清長に關する大きな研究が出るやうでありますが、葉盛頃のライブラリイ・オブ・コングレスといふ彼處の圖書館には日本部の方に坂西しほといふ女性が居られまして日本の文學を研究して居られる。最近では喫茶の一盤の砂、品子氏の亂れ髪その他の歌集を譯して居られますし、尚ほ引續き日本文學に關するものを譯するといふことでありましたが、色々圖書館の日本文學の資料なんかも見て來ました。歸りにはカリフオルニア大學で、高等學校の時教はりました原田次郎先生が日本美術の講義をして居りまして一時間ばかり話をして來ましたし、布哇には昨年來て居りました國友氏といふ方がやはり日本語の講義をして居られますのでその方に逢つて布哇を案内して貰きましたし、獨逸人の家庭にも招待されて家庭生活も經驗しまして一路太平洋を通つて歸つた譯であります。日本に近つくに連れまして、日本に著いたらどんな感じがするだらうといふ氣持で胸を躍らせて參りましたが、丁度四月十六日の晝頃日本が見えますと、以前見たよ

りも非常に精麗に感じました、横濱といふ港は私は嘗はよく知らなかつたのでありますけれども、今日来ますと決して西洋の港に劣らないやうな美しさを以て私に見られました。やはり日本人は日本が一番良い、やはり日本といふものは一番親しみもあり良く感じました、

今日では日本も決して西洋の何處の國にも劣らないだけの域に達して居る。即ち日本は今日世界のどの國の文化に比しても劣らない對等の位置を以て立ち得るといふことを感じたのでありまして、斯ういふ點では何處の國に行きましても日本人であるといふことが少しも輕蔑されるやうなことはなくて、非常に誇を以て闊歩出來るといふことは日本といふ國が世界的に位置が高まつて來たからでもありまして、私は日本人であるといふことを感謝する氣持を以て歐洲を旅行することが出來たやうに感じます。私共のやうな日本のことばかり致して居りまして外國といふものに殆ど理解がなく、外國語も未熟な者がどうして旅行をするかと參りますと前には思つて居りましたが、兎に角日本語と片言の外國語だけでしきり大して不自由もせずに一周出來るといふことは、やはり日本そのものに對して非常に感謝すべき點であらうと思ふのであります。（昭和十一年四月號）

二、上海日記

四月六日門司を出て、一路西の方に進んだ。香取丸は、八日の午前六時には上海につく豫定であつた。前夜船中の食堂で行はれた上海と香港との映畫で、大體の輪劃を與へられた。上海に着いたら船窓等はしめるやうにとの注意もあつた。友人大林君と、明日の上海見物の豫定を相談しながら、はじめて見る外國の風物を樂む心持があつた。

朝目を覺して、船窓からふと見ると、雨がけぶつて居る中に岸が見える。青い楊柳らしい木が細雨にかすんで見える。もう來たのだと、服に代へてデツキに出て見ると、すでに揚子江の支流、黄浦江に入つて居る、鴨田川の二倍はあらうといふ川であるが、岸が低く、すぐ陸地につゞいて居るので、長閑なひろ〳〵とした感がある。水が黄ろくにごつて居る

のも、この場合風情がないでもない。進んでゆく中に次第に港らしい風情になつてくる。アメリカの軍艦らしいのが碇泊して居る、小さな荷物船が通る、サンパンといふ小さい舟が水中を往來するのも、靜かな趣がある、春江の雨景といつた感がある。大林君がすでにレインコートを着、寫眞機を肩にして旅行度で出てくる、朝の食事は八時半であるから朝食をしないで降りようかと定める。その中、船は上海に着いて、棧橋に近く横づけになる。稅關には支那人が控へて居る。やがて船へ支那の商賈人がいろ〳〵入つてくる。金の兩換にくる、かねて知つてある船客の一人に相談して、十圓ばかり換へてもらふ、七弗二十仙ばかりになる、五弗の紙幣一枚と、一弗の銀貨一枚と、殘りを小紙幣でくれる。上海で通用するのは墨西哥弗といふのであつて、一弗は約内貨一圓に當るのだが、今は一圓二三十錢になつて居るのである。銅貨一仙が約一錢だが、それよりも高くなつて居るやうだ。その中、大林君の親戚の淺沼造氏が迎へにきたので、船を下りる。氏は東洋棉花株式會社に勤めて居る若い會社員である、稅關の所を出ると、普通バンドといはれる黄浦灘路である。電車と自動車の外に、人力車の多いのは驚かれる。自動車に乘つて廣い繁華な通り

に出る。南京路といふ上海で一番賑やかな通りである、こゝで下りて暫く街を歩く。官衙の前には鬚のあるいかめしい巡査がたつてゐる、これは印度人であるといふ、皆な關羽のやうないかめしい鬚面で威嚴がある、清邊氏によると印度人は忠實であるから、巡査に用ゐられるとのことである。がさう聞いて見ると、いかめしいのは形のいかめしさであつて、內容はないらしい、どうかすると案山子のやうな感もある。ゴーストップもあつて、交通整理はよくついて居る、建物はなか〳〵宏壯なものがある。書肆や商品館によつて見る。朝であるからまだ客もなく、がらんとして入口にはいかめしい番人が端然として居る。上海といふ町は塀の中にはまつて、形式だけとゝのへて居る。町は城內と、共同租界と、佛租界とに分れ、城內が純粹の支那街で、共同租界といふのは英國と米國との共同租界であり、佛國のが佛租界である。今通つて居るのは共同租界であるから、純粹の支那街ではないが、でも支那の匂はどこにでもある、通行人も支那人が多い。若い男は概當に優形であり、時たま清潔な支那人にあふ。がきたない支那人も多い。殊に人力車は汚く、臭くものもよぼ〳〵の爺さんが多い、全體に活氣といふものが乏しいやうだ、日本の丸ノ內の

明朗さに及ばない。

自動車に乘つて北の方間北の方にある渡邊氏の御宅の方にゆく、繁華な通りから漸く間合らしい景色になる。支那人街の汚い店に堂々たる漢字の看板がかゝつて居るのが、奇妙に感じられる。大きな肉の丸切れが店頭にさがつて居る。渡邊氏の宅は草花の咲いて居る庭のある小奇麗な家である。小憩の後、上海事變の戰跡を見にゆく。麥刈が多いが雜草の野原も多い。煉瓦造ての家が殆ど壞れて人も居ないのは、戰の犧牲であらう。日本人だけを葬る墓にゆく。たか〳〵規模が大きいが、殊に上海事變の戰死者を一所に葬つてある墓は大きい。春の小雨のそぼふる中を名譽の戰死者の靈に心からなる哀悼の情をさゝげた。それから野原の中に徒らに立派に縱橫に出來てゐる道を通つて市政廳の前に來た、青や赤を用ゐて綺麗に作られた、純然たる支那式の建築である、まだ中味はないらしい、この邊り、共同租界邊りの繁榮を奪はうといふ支那人の計畫らしいが、果して思ふ通りにゆくかどうか。その中、道の兩側の畑の中に所々高くなつて居る古墳らしいものがある、聞けば支那人の墓で、死人があると、卜つて、それによつて卜に出た土地に所かまはず埋葬する

といふ。宗教は道教が多いといふ。車は再び支那街の場末らしい所を通つて、南京街に來た。降りてぶら〳〵散歩する。そのうち道の傍に道教の寺があるのに入る、日本の古い寺院に似てある所があり、線香をたてることも同樣であるが、參拜する方法はまるで違ふ。立つたり、つくばつたりすること、十回に近く、その間絶えず呪文を唱へて居る。甲高い支那の老婆つ聲が何となく騒がしい感はあるが、しかし敬虔の情は感ぜられる。線香の烟に混れて汗々として居る。

その中、とある百貨店の前で人がたかつて居る、その中、病人であらうか擔架にかつがれて出てきて、車に入れられた。かういふ病人の車には外の車は道を讓らなければならないといふ。かういふ所には禮儀の國としての一面がある。船にかへつて同車の人からきけば、一人は結婚式の行列を見、一人は葬式の行列を見られたといふ。葬式の行列には泣男があつて、おい〳〵泣いてゐたといふ。上海の一日にも人生のすべてがあつたわけである。

ぶら〳〵歩いて居る中に正午になつたので、支那料理店杏花樓に入る。上海でも大きい店らしい。大樣者のかなたの數子の兩氏も見えたが、一人はかへられて、同人で車を囲む。

本場の支那料理の事とて、流石にうまい。食後、再び自動車に乘つて、西南の方佛租界の方にゆく。途中ジエスフイールド公園による。なか〳〵廣く設備もゆきとどいて居る。入口の方は植物も鬱く、芝生が多くて明るい感があるが、奥の方になるほど樹木も多く、西洋花が咲きみだれて居る。海棠やチユリツプその他色とり〴〵に美しい。支那建築の様式の休憩所がある。その前で寫眞をとる、或は日本の庭園式に築山に石と水とを配した所もあり、支那服の貴人らしい人も三々五々に散歩してゐて、まことに江南の春といふ感がある。公園を出て佛租界の方を通る。こゝには露西亞人も多くすみ共同租界とやや趣を異にする。この佛租界の隅にある自然科學研究所にゆく。主事の案内により所内を巡覽した。生物學、精理學等に分れ、なか〳〵規模大である。揚子江にある魚類など數百種あり、一々標本がある。日本全國の六十餘種よりも遙かに多いといふ。上階にあがれば上海全市を眺視することが出來るが、雨天のためひろく見えないのは殘念である。研究發表は英文その他外國文のもの(Journal)と日本文のもの(彙報)と兩方あり、これからの發展をいのられる次第である。

こゝに一高時代の生徒たりし某氏の勤務せるに逢ひ、感慨があつた。

濃くせまる暮色の中を再び渡邊氏宅に至り、小歩及び電車にのり、日本料理「桃太郎」に至り、日本料理に舌鼓をうつ、鮪の刺身、伊勢蝦、蛤汁その他日本料理を陳列する感あり、床の間の壁も紙張りにて、異境土らしきも、流石に思ひ出ふかきものがある。食後車の中から南京街の夜景を見る。赤色と黄色多く、ことに赤の色の濃きは重くるしさあり、明朗味に乏しい。八時頃船にかへり大林君、渡邊氏とともにスモーキング・ルームにて麦酒を拔いて、今日の一日の疲れを休めた。（昭和十年四月）

三、雨の香港

上海以來、晴れみ晴れみの空は、思ひの外に涼しく、岡倉氏の「茶の本」をよみたから日本の民族性など考へる餘裕があつた。上海では友人大村君の女婿遠藤氏の案内でいろいろ便宜を得たが、香港では佐原氏とともに島巡りをしようなど思ひ、くらしながら、明日の香港を想像して居る。

四月十二日目を覺すと、もう香港に着いて居るらしく、船窓から綿のならんで居るさまが見える。服に代へて甲板に出ると佐原氏はもう眼鏡で方々を見て居る。細雨が港の上にしと〳〵と降つて、島は夢のやうに煙つて居るが美しい。食事の時も雨ではといふ聲が聞えたが、私どもは出ることを定めて、船室に歸つて仕度をして居ると、思ひがけなき來訪

がある。それは矢野短氏夫婦であつた。こちらに居られるとは聞いたがまた御目にかゝつたことはない、夫人は、有樽千亦氏の令嬢で美しい小柄の人、矢野短氏は三井物産に勤められて歌も作られ、落ちついた方である。道祖神の現れたやうな喜び、旅に出て人の情をしみ〴〵嬉しく思つた。佐原氏、辻氏も一所になつて三井のランチで上陸する。上海と異なつて街が美しく人力車も清麗である。海岸通がコンノートロード（Connaught Road）で、明るい感がある。それに平行した次の通りが Des Voeux Road といつて、三井洋行や正金銀行をはじめ、堂々たる建物がならんで居る。更に山に近い平行した次の通りが Queens Road といつて、商居がならんで居る。此建築は各階に大きなベランダがあつて、古城を思はせるものがある。三井洋行で暫く待つて、それから、高橋氏の案内で、自動車に乗つて、見物に出掛ける。香港の眞中の道を横ぎつて、東岸に出る。附近には支那人の富豪の別荘などがある。香港ホテルの別館で休憩する。四時の花が庭に咲きみだれて居る。南國の花である。雨に煙つて、遠くは見えないが、入江になつて居る趣り案てゝ赤たい風情である。更に車に乘つて上る、上るほど霧が深くなり、ピークに着いた頃は五寸先きも見えない位

である。碧瀧がある、高野山等にあるのとは異なつて居るが、似て居る。車を下りて歩く、霧の中から少しつつ見えてくる。小便を高いピークの上の道傍ですると霧の中につゝまれてゆく。

ピークを五町ほど歩いてひきかへした。霧はどこまで行つても晴れさうにないからである。もと来た所へきて車に乘つて、降りると霧は晴れてくる。惜しいと思ふが、それは霧が晴れてきたのではなく、低い所には霧が渺いのらしい。畑の傍を通つたり、基督の寺のそばを通つたりする、基督の寺で降りて見る。岡の上の寺で、下を見下して墓がある。新墓には花がいけてある。國を遠く離れてこの土地で死んだ英國人の墓もある。車に乘つて、更に支那街を通つたりして香港大學の前に出、日本小學校のそばを通つて、もとの三井洋行まで來た。支那料理を三井洋行の方とともにとつた。廣東料理で味がくどくなく私どもには甘しい。暑いからこの方が人々にも喜ばれるのであらう。食後、佐原氏辻井氏と町を歩く。海岸通を歩く頃雨がまた降つてきたので、バルコニーの下の歩ける Queens Road を歩く、商店がならんで居る。一々入つて見る、百貨店といふべきものは何處の國にも發達

して小さい店をおびやかして居る。肉を賣るマーケットに入つて見る。薄暗い汚ない感がする。氣味が悪いので途中から出てしまつたが、男も女も晩餐の品であらう。肉の敎切と、野菜の若干を竹皮でつゝんで、それをぶらさげて中から出てゆくのが、妙に寂しくなつかしい氣がした。あの少い肉と野菜とで支那人の貧しい家族が楽しく食膳をかこむのであらう。そんな事を考へながら、町を歩いてゐる中に、五時近くになつたので三井洋行にかへる。河津氏に紹介される、東大の河津敎授の令弟とかいふことである。佐原氏、高橋氏等と矢野氏の御宅へいつて數寄燒の御馳走になる。矢野氏のお宅は舟で渡つて對岸の町にある。こちら側は香港と異なつて土地もゆつたりしてゐて住宅にはふさはしい。町も綺麗で靜かである。支那の骨董店の前を通る。一寸見ると古寺のやうに店の正面に古佛が飾つてある。

矢野氏のお宅は一寸奥まつた二階建の洋館である。應接室で主人愛藏の古陶器を見せていたゞく、青磁燒のとてもすばらしいのがある。なか〳〵この方面に通じて居られるらしい。古陶器の複製の書譜なども示される。久しぶりで眞水の風呂につかつて汗を流した、

それから矢野氏夫人の心盡しの數寄燒と、お壽司の御馳走である。國を離れてかうした日本的趣味や料理を味ふのも忘られぬ思ひ出となるであらう。お嬢さんや坊ちやんがとても元氣である。正樹や治夫や國男や明子もどうしてるか知らん、今頃は口爭ひをしてゐるかも知れないなど思ひ出す。食後、夫妻から繪葉書を出されたので、國の方々へ寄書をかく。

香港の平和な家で故國のことを思ひ出して居る中に、夜も遲くなつたので、矢野氏のお宅を辭す。夜ふけの町はいとゞ靜かで、街の方々にゐる人力車のかげもさびしい。またランチに乘つて香港の方へゆく。時間が少しあるので香港の町を少し歩いて、十時頃ランチに乘つて船に歸つた。船から見る香港の島にはイルミネーションが島中について書のやうな景色だ。詩のやうな島だ。私は暫くぢつとみつめて居た。デツキには支那人の商人の甲高い聲がまだ聞える。

翌十三日午前十一時、香港を出帆した。出帆の前に矢野氏夫人が再び見えた。

港を遠ざかりつゝいつまでも小さくなるランチを見つめてゐた。昨日からの小雨が晴れてきた。これからは次第に南の方へと船は進んでゆく。（昭和十年四月）

四、シンガポールとジヨホール

シンガポールに着く頃はやはり雨である。神戸から寄港地ごとに雨である。船出の時の悲みの涙が寄港地ごとの雨となつたでもあるまいに。シンガポールの波止場に着いたのはすでに午後六時頃、薄暗が港をたれこめる頃である。波止場には腰に赤い布をまいた黒人が集つて居る。髪と顔の色とが匹敵する位であるから、その色の黒いのが想像される。佐原氏の知人南部氏が御出で下さつて、辻井氏と三人で船を出る。すぐ車に乘つて町を通る。町の巡査は背中に棒のやうな細長い板を負つて居る。身體が動くと、それが動くので巡査もなか〳〵大變である。その代り手を動かさないでも、身體を動かせば方向を指示することが出來るわけである。不精のためかとも思ふが、しかし手も動かして居るやうである。

町は香港と同じく相當に綺麗である。その中植物園の中に入る。なか〳〵設備がよいらしく、廣いが薄暗い中でよくは分らない。椰子の大きい木など目につく。その中大きな池のほとりに出る。水をためておく所で、かういふ所が三ケ所もあるといふ。邊りは極めて靜かで、水面に突き出て作られて居る亭に居ると、蟲の聲が聞える。日本の秋の夜の風情がある。自動車に乘つて更に進む、運轉手は黒人で髮を長くし、白布をまきつけてある。

車は玉川といふ海に出て居る日本料理屋につく。日本の女性が年若くしてこゝへきて經營して居る家といふ。何かの役所の跡を譲りうけたとかで、宏壯であり料理屋らしくない。正面の建物など御殿のやうで、全部大理石まがひの石で作られて居る。その建物の下階に浴室がある。一寸體を洗つて海ぞひの部屋に來る。隣室には三好さんや白井さんが居ると佐原さんがいふ。日本料理が出る。刺身・茶碗むし・吸物等に、たいして味はよくないが、異境で味ふ日本料理の味は流石になつかしい。マンゴを澤山たべる、香港のよりは味がいゝ。シンガポール生れの十五歳の女中は聲も上づつて日本人ながら混血兒のやうな感がある。十六歳といふ女中もこの地の日本人の小學校を出たといふがこの方は美しく日本

人と一目みてわかる。それでもどこかに日本人らしくない所がある。この家を經營する主婦は流石にしつかりした所がある。

夜もふけた。隣室からは三好さん等の濕い歌が聞えてくる。潮騒の音も聞えて、話はしんみりする。浴衣を洋服に着かへて家を出ようとすると雨がざつと來る。夜ふけの町は流石に人通りも淋くなつて風もいくらか涼しい。車を降りると、土人が何か話しかけてくるのを振り切つて船に歸る。

朝七時すぎに南部氏の部下が案内に來る。今日はジョホールに案内していただく筈である。途中土人のいろ〳〵の風習を見る。殊に面白いのは草を刈るさまだ。長い柄のある草刈鎌を一定のリズムで振りまはして、少しづつ草が刈れる。これを見て思出すのは、かつて田舍の少年であつた折、草を刈りに出かけて、どうかすると手を切りさうなので、草をにぎらずに鎌をふりまはしてゐたことがあつたが、恰度それと同じ工合になる。不精のやうだが、南國には惡蟲も多からうから、うつかり手を草の中に入れたらどんな蟲にかみつかれるかも知れない。そのためにでもあらうと同情する。土人の土工のやうな人達が道で

普請をして居るが、態度が緩漫でのろ〳〵と歩いて居る。餘りはげしい運動や動作は南國の暑さでは堪へきれまい。ジョホールにさしかゝる。

ジョホールは半島の南端にある部分で、橋によつてシンガポールと堺せられて居る。今は獨立國とかで英國の保護のもとにある。入口に稅關があつて、一寸車の中を見る。町は支那人が多い。王宮のそばを通り、回々教の寺のところに出る。寺は白堊建の明るい建物で、高い眺望のいゝ所にたてられて居るので、殊に明朗の感がある。その上、回々教の寺の例として、メツカへ向けて禮拜するのみで、佛像もないから極めてガランとして、せゝこましくない。暑い國の宗教ではこの方がどれ位人の心を安らかにさせるか分らない。寺を出て、傍のある私人の所有の動植物園の中を歩く。カンガルーや七面鳥その他の鳥や獸もある。ゴムや椰子が至る所にある。その中白栗鼠が枝の中を傳はつてゆく。一週してまた車に乘る。稅關の前を通つてゆく。所々道傍にゴム園がある。一二ケ所降りて見る、ゴムの樹に傷をつけて滴る白汁を茶碗にうけてある、手にとつて見るとぬら〳〵してやがてかたまつてくる。建物は一體に床が高くて、ガラス戸が殆どないのは暑く、また毒蟲の災も多

い土地から來た自然の要求であらう。博物館まで來た。

博物館は規模がなかなか大きく、船や家屋や調度をはじめ、南洋の動物の標本が數限りなくある。船も木をえぐつたまゝのものもあり、山田長政の繪にあるやうな綺麗な船もある。そゞろに當時の雄圖が忍ばれる。また三味線に類する樂器がある。絃を支へるものも同樣である、七絃のもの、二絃のものもある、三味線の南洋からの渡來といふことを思はせる。各種の蛇、昆蟲などの標本は面白い有益なものである。

博物館を出て、町を少し歩く、カウヒー店によつて、茶とサンドウイツチを食べる。十二時頃舟にかへる。小さい舟に乘つた土人が錢を求める、投げてやると水にくぐつてとる。老人が葉卷を加へて居る。錢をなげると、葉卷の火のついた方を口の中にふくんで水に飛びこんで、上つてきてはまた葉卷を吸つて居る。小さい舟と蛇一本、單純な生活である。

銅鑼が鳴つて船は出る。シンガポールよさらば。(昭和十年四月)

五、月光のもとの彼南

シンガポールを出帆してから一日ほどをへて船はマラツカ海峡を通つて彼南につく。四月十九日の午後八時である。海上はとつぷり暮れて十六夜の月が照つて居る。午前二時には彼南を出發するから彼南を見るにはどうしても夜でなければならない。月光を幸に私どもは彼南の極楽寺と植物園とを見るべく、船を下りた。小蒸氣で陸まで行つて、それから自動車に乘つた私どもの車は慶大の佐原氏、京大の大門氏夫妻、仙臺高工の辻井氏と合せて五人である。運轉手は土人であるから話は分らないが時々英語をつかふ。

明るい支那人町らしい所を通る。街路樹は椰子らしい木だが、月光のもとでぼんやりして居る。土人や支那人が夕涼みをして居る。

その中、人家のない椰子の林の中へ道は入る。月の光に照らされるあたりは寂しい。色々の空想が頭の中にわく。三十分も走つた頃、車は極樂寺へ着いたらしく止る。降りると案内人らしい十四五の土人の少年が、飛鳥の如く私どもを導いてゆく。何か聲高に話しながら寺内へ入つてゆく、が少しも分らない。懐中電燈をたよりに圍い廊下を通りぬけると、堂の入口らしい所へゆくが、もう九時すぎでもあるので、戸が閉つて居る。何かしやべつて居ると、その中、内から戸をあけてくれた。闇い中に佛像がある、更に横の戸をあけると堂の外になる。廣々と開けた中に池があり、右手に高い塔があり、左手には石段があつて、その上に堂がある。これが本堂らしい。屋根瓦などに赤や青の色がついてゐるらしいが、月の光には一様に白く一切のみにくさがなく、神々しい。池には龜が居り、それに蓮葉をやるやうにすゝめられる。二十仙とられる。石段を上つて本堂の前に出るがこゝも戸が閉つて居る。少年は聲をかけるが、内からは開けない。もう眠つて居るのだと言ふ。その中別の車に乘つた船の仲間の一行がくるので、急ににぎやかになる。

白々とした塔は聳えて、晝ならばもつと明らかに分るであらうが、却てこの方が美しく

神祕なやうにも思ふ。極楽寺は佛教の寺でこの地方には回々教の寺が主であるので、殆ど佛教の寺としては唯一であるといふ。思つたより莊嚴であり、またこの世ならぬ美さのあるのがゆかしい。しかしそれも月のためであるかも知れないと思ふと、たま〳〵夜に祝南につき、而も月の夜であつたことに言ひ知れぬ感謝の心がわく。寺を降りると、入口に繪葉書を賣つて居るので少しく求める。土人の少年にも一弗やつて寺を出る。

車はまた月の光の中を走る。寂しい椰子の林を通り、まもなく植物園を通る。なか〳〵規模は大きいらしいが、よく分らない。街燈も乏いので樹木の茂つて居る所はうすぐらく、虎でも出て來さうである。もしも土人の一隊が私どもを圍んだらどうしようとも思ふ。かつて南洋に道を弘め給はんとして、虎のために命をはたしたまうた眞如上人の事も思ひ出す。しかしそれは平安時代のことであり、今は虎も狩りたてられ、土人も極めて柔順である。私どもの空想はやはり夢であり、お伽噺の世界でしかない。

歸りに回々教の寺による。回々教の寺のならひとして寺内はほとんど空であり、たゞ西の方メツカに向けて禮拜堂があるのみである。こゝかしこの柱のかげに土人は眠つて居る。

私どもが來ると起上つて禮拜を始めるものがある。土人の顏は分らない。それでも私どもは何かしらたのもしいものを感じたと同時に、少しは氣味惡い感じも伴つて居る。回々教の寺といへばシンガポールで降りた時、ジョホールを訪うて岡の上の回々教の寺に詣でた。それは晝であつたので白い建物が清楚な感を與へた。殆ど裝飾もない。清楚な回々教の寺は暑い南國にはふさはしい感がある。旅をつゞけて見るとその土地の環境といふものが、如何に生活を支配して居るかに氣付く、日本の風土や環境の中にあつてこそ、日本的なるもののすく〳〵と生ひたつ理由も分る。同時に外國的なるものが、日本の風土や生活の中にそのまゝでは生ひたゝない點もよく分るやうである。

私どもは車を降りて、彼南の町をさまよつた。もう十一時もすぎたが、町から土人はさらない。道傍に土人はころがつて暑さをさけて居る。あのまゝで夜を明すものも多いであらう。マラリヤの蚊は今は殆ど驅逐されたとかで街を歩いても少しも居ない。お蔭で私どもも團扇を用ゐないで土人街の夜をさまよふことが出來る。町には自動車の外に人力車が多く通る。上海でも香港でも見たが、日本の人力車の榮耀の廣いのに驚く。しかし少しづ

つ形が異なつて、この邊では二人乘りである。私どもは二人づつ一臺の人力車に乘つて、波止場まで歸つた。月は眞上にあり、その光は澄んできた。船へ歸る小蒸氣に寄せる波がドブン〳〵と聞えて居る。月光のもとに眺めた彼南は私にとつてはどこまでも幻の島のやうな感がある。（昭和十年四月）

六、カンデイに詣づ

彼岸を出てからは雲と波とを見る事が幾日かつゞいた。波は少しはあるが、もう餘り神經にひゞかない。二十二日の晩にはコロンボとカンデイとの映畫がA甲板にあつた。その翌日二十三日は初めてデツキのプールで海水浴をする。夜はA甲板でダンスがあつて天城夫人、白井氏、三好氏その他が加はつてなか〳〵賑やかである。船室へ入つてもすぐそばなので靜かにダンスの花やかな樣子をきいて居ると、ダンスも出來ない野暮な自分が寂しくもなるのは旅心か。その中十一時頃東京音頭を最後にダンスはすんでまた船は寂寥にもどる。絃をうつ波の音のみが聞える。

四月二十四日は目をさますと、もう船はコロンボに着いたらしい。時計を見ると四時過

ぎ、眠りたらないのでそのまゝ床に居るが、五時頃になつたので起きて顔を洗つてゐると、ノツクして、寝着のまゝでいゝから食堂へ來るやうにといふ。今から旅券の檢査が始まると見える。ゆくと茂木氏、佐原氏、辻井氏なぞはすでに居る。船室でライスカレイと林檎の簡單な食事をすまして、ランチに乘る。ランチに乘る前にまた旅券を一寸しらべる。ランチには二等から大林君はじめ七人の方が居る。一等からも茂木氏、馬淵氏、大隅氏夫妻の四人が私ども三人に加はつて七人である。波止場について三臺の自動車に分乘してゆく。私どもの車は佐原氏、辻井氏の外に佐賀高校教授の青山氏が加はる。七十貫瀬あるカンデイ行きであるから朝も隨分早いが、心持がいい。コロンボでは島の大きいのに先づ驚いた。車が一寸とまつた時に、土人が花をくれる。うつかり貰ふと、チツプをねだる。十錢玉ひとつやる。船の事務長から、チツプはやらないやうにと言はれたのだが、やはり、やらざるを得ない。人からチツプをねだることを職業とするこんな土人の習俗にのろはしい氣も起るが、しかし、あはれみの心こそ起れ、怒りたくはない。その中、車は出かける。道々土

人の風習が目につく。マライ人よりは少しは高等らしいが、この邊の土人はシリーと言つて、蔓草キンマの葉を二三枚かさね、それに石灰と檳榔子の實を燒いたものをたべるので、口の中が眞赤である。黑い額や顏の中で口の中だけ赤いので異樣な感がある。腰に布をまいて居り、上半身は裸體のものが多いが、薄いものをまとつてゐるものもある。中には耳環をつけたもの、衣のやうなものを着て居るものもある。村落らしい所から、時々マーケットに出て來る、印度人が蝟集して、我等の車をみつめる。また時々學校のある所を通る。小學校であらう。かういふ所も訪問したい心持が起る。その中私的な植物園の所へきて、車がとまる。象が居る。その上に檜のやうなものをもつた土人が乘つて居る。動物園で見なれた象をかうして見ることは思ひがけない。植物園には大きな木がある。殊にバイマン・トリーといふ横へひろがつた樹がある。その下は百畳敷位はありさうだ。こんな樹の下なら靜坐も出來るだらう。更に車を走らせてゆく。絕壁の所へきた。大きな溪谷をへだてて、向ふにそゝりたつ山々は壯觀といふに値する。それにしても印度の南端の小さい島と思つたセイロン島が案外大きいのに驚く。九州位はあるとの事である。

カンデイも近づいた、と見える。カンデイの四哩ほど前の植物園にきた。なか〳〵大きな規模である。植物には固い自分であるから、何の木かよく分らないが日本には見られない樹がある。ブツタ・シヤカといふ樹の花は綺麗である。一寸下りると、土人の案内人が近づいてくる。その中、佛爪寺へついた。カンデイ湖の近くで、なか〳〵典雅な趣がある。車を下りると、土人が群がつてくる。案内するといふらしい。その中のいかめしいひげをはやした、土人の後についてゆく。石段のそばには乞食——それも手足のたゞれた——がうづくまつて居る。廻廊の邊りを通ると、上段の壁畫を種々説明する。釋迦のさま〴〵なる姿がかゝれてある。廻廊の所から、正面に出る。そこには赤い袈裟を來た僧侶が何か讀誦して居る。太鼓や盤のやうな樂器を、どん〳〵たゝくのでやかましい。その中、正面の背後にあたる堂の方へつれてゆく。靴をぬぎ、帽子をとれといふ。戸が開いて内へ入ると、戸がしまる。威儀のありさうな僧が種々説明する。佛爪といふのであらう。たゞきらびやかであるが、森嚴味は尠い。それから別の堂へつれてゆく。こゝは書齋といふので四壁の本箱に書物がつまつて居る。その上にさま〴〵の額がある。日本の高貴な方の額もある。棕

椶の葉にかいたといふ経文を見せられる。そこを出て、また廻廊を一周して、元の所へくる。椶櫚の葉に書いたのを六枚、一留といふのでもとめる。案内の土人に二留を一所にはらつて、土人はひきあげる。同車の青山氏夫妻の一行についてもう一度見るといふので、私共は園内を歩く。菩提樹の葉を一二葉ひろつてくる。釋迦の足跡のある堂へ入る。大きな釋迦の涅槃像もある。更に池の邊に小憩して、自動車で、ホテルに入る。なか〳〵大きいホテルである。肉がかたく、そんなに甘くもないが、しかし土人が親切にいろ〳〵言つてくれる。絵葉書も賣つて居る。

こゝを辭して再び車中の人となる。歸りは下りであるから早い。もと來た道であるが、何度見てもあきない。植物園の前を再び通り、屈折した道を通つて、土人の風習を再び見つゝ、コロンボについた。往きにも氣付いたことであるが、印度では馬は殆どなく、牛が車を引いて居る。二頭立で、檳榔であんだ、圓い筒の如き形のものがあり、その中に御者も入り、荷物を入れてあるのは暑さを防ぐためであらう。牛も至つて細く、時には鹿にまがふのがある。平安時代の風習と似た所がある。さういへば平安時代には檳榔毛の車もあ

つた。また田は、日本のやうにうねが作つてある。長方形のもあるが、一點から扇子の骨のやうに區劃したのもある。稻を植えてある所もある。まだ苗かも知れない。日本のやうに一株づつ植えてはない。しかし稻田の樣子は日本に似てゐる。犬や鷄も居る。草葺の小屋も日本と大差はない。たゞ何といつても椰子やその他熱帶植物が多いのが日本には見られない所であり、その中に象の悠々として水を浴びてゐるのは、日本では見られない所である。

コロンボの町へ下り、雜然とした通りに出ると、流石に暑い。それにシリイの臭のためかむつとして心持が惡い。ハシーム會社へ來る。こゝで自動車賃をはらふ。四人で廿圓六十錢づつはらふ。繪葉書も求める。こゝは寶石商といふことでいろ〳〵の寶石を買へといふ。これからの遠い旅行に、買ふ氣にもなれない。大林君その他の一行も來る。事務長に交渉して貰つて、三十分ほど自動車をかつて博物館の前を通り、港の方を通り、佐原氏の知る南部商會の方へ行つたりして、波止場につき、船に特別のランチで歸る。恰度三時であつた。四時には船が出る。やはり小舟に乘つた印度人が種々賣つて居る。甲板に紐をつ

けて、それに袋を結びつけ、品物をそれに入れて上からあげ、その中に錢を入れて下すといふ方法である。一人の西洋人が、約束より尠く入れたといふので、下で土人がわめいて居る。西洋人もうるささに錢をましてやつた。マライ人よりも少し上品な所がある。それにしても釋迦を出し、タゴールを出した印度人の自覺をまたれる。いづこの港にも去りゆく時の名殘惜しさはあるが、まさに東洋を離れんとするコロンボの邊り、去りゆくものの感慨は決して尠くない。（昭和十年四月）

七、船中雜感

神戸で船に乘つてから、最早一月餘りになる。上海を振り出しに、寄港地ごとに上陸して、その土地の風物を見るものの、大部分は船の生活で、三度三度食堂で西洋食をたべ、夜ごとに狹くるしい船室で寢るのであるから、單調この上もない。もつとも時々はみそしるや刺身の日本食も出るのであるが、それはあくまでエクストラであつて、定まつたものではない。かういふ單調な生活であるが、これまで少し忙がし過ぎた生活をしてゐた自分にとつてはとにかく變つた經驗でもあり、精神の休養にはたしかになつたと思ふ。船に乘つたら、書かうと約束したある啓蒙的な萬葉集に關する原稿は書かずに終つてしまふらしいし、少し勉強しようと思つた語學も何にも身につかないらしい。結局無爲に過した一月

餘りであつて、取返しのつかない氣もするが、しかし筆とることもしない無爲の日月の間に、自分に對する反省とか、過去の自分の凝視とかいふことも行はれないでもない。さういふことは暫く措くとしても、單調な船中生活の間に起る種々の事がらの中にも貴い經驗はなくもない。そんなことの一二を書きつけて見たい。どうせ波にゆられて夢心地で書くのであるから、たいしたことは書けさうにもない。

船の生活で先づ氣付くのは、船だけの小天地で、外界と交渉の殆どないことである。もつとも、門司を出るまでは手紙もいたゞいたり、上海や香港では日本字の新聞も見たり、印度洋上でも無線電信をうけとつたりしたが、しかし新聞も見ず時々簡單なニウスが謄寫版で配付されたりするだけであるから、その後の日本、わけて自分等の國文學の動靜など全くわからない。はじめの中はそんなことも思ひ出されたが、段々なれてくるともう、自分の世界から離れて、船の中だけが現實の自分の世界のやうになつてくる。現實に見たり、聞いたりしない世界は、考へれば勿論存在もして居り、深い交渉も感ずるのではあるが、船中の生活では、少しもそれ等の現實相にふれられないだけに、從つて現實への推移の跡

がたどられないだけに、しつかりとつかみ得ない感がある。肉親の子供の顔までが、お伽噺の子供のやうにも感ずる。今までふれてきた過去の生活が、夢ではなかつたかと思ふ。また、もし自分が死の世界へいつて死の世界から、現實をはるかに想望して居るやうにも感ずる。こんな場合、肉親や、知己を現實的に視たり感じようとすると、それが出來ないまゝに非常にいら〳〵してくる。そんな氣持をつきつめると、恐らく神經衰弱になるのであらうと思ふから、つとめて肉親や知己をも夢のやうに感ずるやうにして居る。さうするとさしあたり自分の見たり、聞いたり、ふれたりすることの出來る船中生活が、今の自分の現實生活である。この世界以外は、自分にとつては暫く夢幻のやうに感じておく。

さて船中の生活であるが、こゝはまた、特別の世界である。もともと船中の人々の中では高等學校時代の同級の親友、大林君とは知つてゐたが、それ以外は船中ではじめてあつた人々である。大林君は二等室にのつてしまつたし、二等客と一等客とは餘り自由な交通も出來ないとの事であつたので、さぞ窮屈な事であらうと思つた。だからはじめの中は、船中の人々につとめて近づいて、一人でも多く知りあつて置かうとした位であつた。とこ

るが船中生活をつゞける中に、知らず知らずの中に皆知つてしまふ。毎日甲板椅子で一所になつたり、食堂で一所になつて居る中に、極めて親しくなつてしまふ。もう知己の尠いことをさびしく思ふやうな感情は少しも起らない。それは日本人同志の船客に對してのみではなく、英國人、獨逸人等、國籍を異にして居るものに對しても、デツキで會へばお早う位、いひかはすやうになる。自分のやうな外國語の會話に拙いものでも、ブロークンな英語が時々自然に口から出てくることがある。まして、語學に達者な人々は外國人とも親しくなつてしまはれるやうである。さういふ意味で、こゝでは一應、日本人も外國人も一になることが出來る。まして假裝舞踏會や、運動會等になると、言語の異なる障壁も、國民性の異なる點も忘れて、一所に樂むことが出來る。とにかく船の中の人々が同じ氣持になり得ることは事實である。もとより一等客と二等客とは、食堂もその他いろ〳〵の行事も別々であるから、その間にはしつくりしない所もあり、また多少は個性の著しいために孤獨な生活を送る人もあるが、それは極めてまれで、普通の人間なら、船中のものが皆親しくなり得るのである。それは男性と女性との間に於ても同樣である。女性といつても若

い女性の一人旅といふよりは多くは夫にともなはれた夫人であり、子供を伴つた母であり、またともかく海外に出るほどの女性であるから、ものなれた社交的であるためもあるが、相當に親しくなる。かういふやうにして船中の親しい社交生活が始まるのである。とにかくこんな氣分になり得るのも、船中の人々がともに心持に於て共通するものがあるためかも知れない。前にいつたやうな誰れもが、その關はり深かるべき環境と、全く離れて、その音信さへも知らずに船中生活をするといふ心持の中に、共通なものがあるのである。ことに日本人であれば一年なり二年なりは故國とはなれて異境生活をするのであるから、切實な故國への思慕が起り得るのである。こんな意味で船中の人々がともにゆくてを語り、異國生活に對して、たのみ、たのまれようとする心持が一層指を結びつけるものともなるであらう。さうして船中の人々が從來の自分等の職業の關係から、範圍が限られて居るのに對して、種々な職業の人々が多いだけに、今までに接し得なかつたやうな人にも交ることが出來、學徒や教育家に見られないやうな人格にもふれることが出來るやうに感ずる。こんな意味でこの狹い船中生活の中にまた一の、從來見るを得なかつた廣い世界を見るこ

とが出來るのである。その廣い生活を顧みるとそこに教へられる點も多いのである。知己の悔いことをなげいた自分も、むしろ遠慮ない心持になつて、ながめて見たい心持も起るのである。（昭和十年五月）

八、エヂプト遊記

エヂプトへ立ちよることは西欧への旅の大きな期待の一であつたが、ことに各地の寄港地でも古代アジヤの原始風俗を見るにつれて、古代宗教に對する一の探索的興味が強まつてきたので、さういふ點からも埃及を見ることは何かしら光明が得られるやうに感じたのである。それは日本上代の神話文學、説話文學の研究にとつても意味のある役目をなしてくれるかも知れないといふ心持が起つたのである。

かねて私は比較神話學や比較説話學的な方面にくらいのを憾みとする心持があつたのを、こんな時にすこしでも目を開いておくのが、何よりであるといふ心持が動いてきたのである。そんな期待で埃及へ寄らうとしたのである。

五月五日早朝スエズに着いた。旅券は提出しておいたが、檢疫等のため、朝早く食堂へゆく。いろ〳〵準備があつて、ランチに乘つて、スエズに着いたのは七時も過ぎてゐた。自動車に乘つて途中稅關で一寸手荷物の調があつて、それから一路砂漠の中を走り出した。一行二十名ばかりで四臺に分乘して私どもの車には、船でも親しく交るもの同志の五人である。八十餘浬の砂漠を横斷した感想はたゞ大きいといふ感じである。かつて日本で常陸の童女松原を見る時に通つた砂丘の思出に比べてはるかに大きい感がある。車の速度が早いので風がつめたく、外套で腰をつゝんで冷さをふせいだ。車をとめると、割に日は暖かで、砂漠に當る日の光は強いのである。砂漠ではあるが、所々に雜草や小さい木が生じて居り、また道路はよく開けて埃及土人が勞働して居る。遙か向ふに水があるやうに見えて實は無いのは逃水といふのであらう。一二度とまつて、十一時少し前カイロに着く。樹木が無く、建物が白色で屋根もないので、何かしら物足りない。廢墟の跡のやうな感がある。それでも町に入ると、流石に大きい建物もならんでゐて彩は薄いが、なほ壯麗な感がある。案内の埃及人が車に乘りこんで、やがてオベリスクの前に出る。これは石の塔で、高さ七

十吹もあると云ふ。象形文字で書いてある。案内人がそう前で聲高々と說明する。やはり紀元前數千年前のものらしい。

そこを走つて、博物館にゆく。白堊建であるから、重々しさはないが、端整な心持がする。なか〳〵大きい。中に入ると、案内人が一々說明してゆく。各種の人の彫刻がある。アラバスクといふ石膏で作つたのが多く、中には大理石にまがふのがある。人間の彫刻は寫實的なのもあるが、怪奇な、空想的な方がむしろ多い。身體のある部分が非常に大きくて、他の部分が小さい所からくる怪奇さである。種々の鳥獸の彫刻もある。埃及には古來から動物崇拜が相當にあつたやうで猫、狼、五位鷺、鷹、蛇、鰐魚、甲蟲等が崇拜されたといふことであるが、とにかく種々の動物神みたいなものが多く、多少の怪奇さを持つて居る。彫刻には象形文字も記してある。これ等が數千年前のものかと驚かれる。ミイラの箱は多くあるが、中味は見られない。その中、ツタンカーメン王の墓から發掘された遺物の前に出る。二階である。かね〴〵聞いてきた通り、まことに壯麗なる限りをつくしてある。殊に金色燦爛たるに驚かされる。身につける調度も立派であれば、殊にツタンカーメ

ン王の靈柩は四重ほどになつてゐて、極めて壯麗なるもの、よくもこれが數千年前につくられたものと思ひ、またこんなによく保存されてゐたものと思ふ。

椅子とか履物とかも金色の美しいものである。考古學にくらい私には詳しい說明は出來ないが、何だか壓しつけられるやうなきらびやかさである。淸さとか幽玄味は感じられない。さるにてもこの遺物を千九百二十二年十一月カイロより四百浬上流のルクソルに於て發見したといふ英國貴族カーナヴオン伯の功績は記憶せらるべきである。

博物館を出てからホテルによつて、自分の部屋を定め、食事をした後、三時、出てピラミツドを見にゆく。ホテルから二十分ほどで、ピラミツドの近くにくる。車を下りて駱駝に乘る。なれてゐるので乘り心地は惡くない。馭者がそれ〴〵ついて居る。足をまげて居る駱駝が立上る時、一寸まごつくがそれでもどうやら落つく。徐々に進んで行く。段々坂道になつて、ギザのピラミツドの傍へゆく。近よるとなか〳〵大きい。船客でゆきあふ人もある。スフヒンクスの前に出る。發掘のため足の邊も明らかになつてきたが、なほ極めて不揃好な感がある。それだけに謎のやうな感がある。スフヒンクスの前で、一行がそろ

つて撮影する。それから駱駝を下りて、スフヒンクスの床下の説明など聞きながら歩く。さうして駱駝に乘つて、ギザのピラミツドの前まで來て下り、ピラミツドの中に入る。細い階段の道がついて燈がついて居る。たどり〳〵登つてゆく、隨分屈折して登つたかと思ふと、廣い長方形の部屋に出る。が暗い。こゝに王の柩を納めたといふのであるが、今はそれも存しない。徒らにこの世に再生する望みを示して居るだけである。また細い暗い道を下りて、もとの出口へ出る。時々金をねだるものがある。そこを出ると、自動車がきてゐて乘つてかへる。夕ぐれ近くカイロの街には涼風が吹いて駱駝に乘る土人の胸にあたる。この邊に多い綿の畑は青々として、砂漠と違つた感がある。ナイルの岸には涼みする人も出てゐた。ホテルに歸つて夕食をすませて暫しくつろいだ。

翌日は八時にホテルを出て、先づカセドラルにゆく。新しいものではあるが、ムハメツド教の寺としてメツカに向けての禮拜堂がある外、殆ど何もない。それから近くのムハメツド・アリの占領した舊城塞を見にゆく。數百年前の建築であるが、なか〳〵壯大なものである。ナポレオンの浴したといふ浴場もある。城塞の窓から見下すカイロの町はまこと

に廣やかなものであつたが、城塞のさまこそまことに古城の感が深かつた。一體に白堊の建物であるから、それでなくても廢墟の感があつたのに一層城塞を見ては荒城の感が深かつたのである。

更にカイロを通つた。風車が今はすたれた町の岩の上にあつたと再びカイロの町へきて、日本人の經營する日本館を見て、日本の物産と、主人の氣焰を聞き、驛からボートサイド行の汽車に乘つた。スエズ運河にそつて汽車が通る所があり、また蜃氣樓とおぼしきものが所々見られた。

私はピラミッドを見た印象をなほ追ひつゝ、西歐文化の發源といふことをしきりに考へた。埃及の宗教や文化の特質は、西歐文化の肉體性の尊重といふことに關係がありさうである。日本文化と西歐文化との相違もさういふ所から說明されさうに思へて來たのであつた。（昭和十年五月）

九、ヂブラルタル遊記

ヂブラルタルに船が着いたのは五月十五日の朝七時頃であつた。こゝは種々の紀行にも殆ど記されてない。それは殆ど大部分の旅行者がナポリもしくはマルセイユで上陸して、こゝを通られないからである。ゆくりなくも自分等はヂブラルタル海峡を通ることになつて、こゝを一見する機會を與へられたので、出來るだけ詳しく見ておかうとの心構があつたのである。ヂブラルタルは船中の時刻と一時間違ふので、船の七時五十分朝食があり、八時半ランチを出る。こゝは往復二志をとられる、船は比較的に大きいが距離は近い。皆が高いといふ。大部分は下りて、この町を見物するらしい。

ヂブラルタルは、半島の端の大きな岩からなつて居る町であつて、一見島のやうに見え

る。今朝も甲板から、島のやうな陸地が見え、松の木らしい木はあるが、大きな岩からなつて居るのを見て、不思議に思つたのであるが、それは後から考へれば、ヂブラルタルの東岸であつたのである。それから南端を廻つて、反對の側を今見て居るのである。やはり向つて見る右端（南端）は數段階をなして居るが、左端（北端）は切りたつた岩をなして居る。こゝがかつて希臘神話にもヘラクレスの柱として、見えて居り、世界の端と考へられたのもまことに故あるかなである。フニキヤ人もこゝを通つて、英國に行つたと言はれるが、既に千七百四十年から英國領となつたのである。それにつけても香港といひシンガポールといひヂブラルタルといひ、要衝を早く目をつけて、己が領とし經營つとめた英國の慧眼と經綸とはまことに驚くべきである。英國の覇を稱へた理由もこゝにあるであらう。食事で船長といつも話つたのであるが、英國傾くとはいへその落ちついた沈着そのもののやうな態度は、なほその勢力を誓くは保持するであらう。そんな事を考へて居る中にランチは岸についた。早速自動車に乘る。朝比奈氏夫妻と、大井、廣政、青山三氏と合せて六人である。臺つた室が少しく怪しくなつてくる。

その中、スペイン堺の方にいつたのであらう。門があつて、そこで案内者が、スペインの方を見物するならば各々一志といふ。時間もあるらしいから見ることにして入る。狭い町だが、道行く人の顔は日本人にも近い。果物を賣る店もある。またスペインでは八時頃（時差一時間）であるからか、戸を閉めて居る家が多い。それにしても少し寂寥の感がある。やがて闘牛場を見ないかといふ。一人六片づつとられる。入口の傍の闘牛に用ゐる刀やその他の器具が置いてある。闘牛場の模型もある。それから、闘牛場へつれてゆく。圓形で、周圍に見物席がある。こゝで血なまぐさい人と牛との闘が行はれ、それを、人々が胸躍らせて見るかと思ふと、こちらも胸が躍るやうな感が起る。

こゝを去つて、スペインの國を出で、ヂブラルタルの方へ出る。巨岩の下に出て、見上げる岩はすばらしく大きい。石灰岩のやうな岩である。一方は海岸である。まなぐる〳〵まはつて海岸に出る。南海岸である。こゝを去つて自動車は急な勾配の道を上つてゆく。空は雲が低くたれて雨が向ふの方に降つて居るのが見える。流石に道行く人が我等の車に目をつける。兵營の前に出た。英吉利兵であらう。公園の前らしく花が咲きみだれて居る。

ひなげしのやうな花がある。雨にぬれかゞやいて居るのが一入美しい。

坂を下りて、中心道路に出る。花を賣るもの、繪葉書を賣らうとするものが車に押しかける。日本の品も方々に見える。ジヤパニイスといふ聲も聞える。町は餘り美しくない。そこを通つてもう終りだといふ。はじめ見る豫定だつた山の腹にあるトンネルの中は終に通らなかつたらしい。雨のふつて居るためもあらうが殘惜しい。海岸まで來て、こゝで案内賃、六志を拂ひ、ランチに乘つたが、まだ一時間たらずある。その中晴れてきたので、廣政氏や青山氏と主要な通の入口まで散歩して歸つた。ランチでは風がふいて寒い。同船の外人は多く花を買つてゐた。船にかへつてから甲板で地圖をたよりにヂブラルタルを見る。やはり島のやうに見える。南端につき出て居る岬でまことに要害の地である。灣を出て、スペインの海岸を見ながらヂブラルタル海峽をわたつてゆく。對岸のアフリカの方も近くに見え、願望久しうして倦まなかつた。

一時出帆、午後三時半のお茶を、船長の部屋で、朝比奈氏夫妻とともにいたゞき、四方山の話をした。ノルマンディなどの大きな船の話なども出た。（昭和十年五月）

第四章　西遊日記抄　二

十、オックスフォード參觀

昭和十年五月三十日、曇りがちの空である。二十日に倫敦についてから十日、新緑の美しさは公園にもどこにも見られるが、氣溫はまだ低く、時々雨が降る。冬服で過すことが出來る。日本ではもうそろ〳〵暑く感る頃と思ふ。窓を明けて暫し庭を見る、庭といつても二十坪位の狹い庭で、木も餘りないが、隣りの庭の木が自然目に入るので、この頃の新緑を十分樂むことが出來る。猫が塀の所にうづくまつて居る。倫敦では動物を誰れも愛するためか、非常になれて居る。ハイド、パークなどでは雀が澤山居て、餌をやると、集つてきて、はては肩から、掌の上にとまる。そんな事をして雀を集めて居る老人や若い婦人を見かける。自分の居る部屋は一階なので、土地や、植物を近く見られるのが慰めである。

そんなことを考へながら、洗場をさかへ、洗面などすまして、新聞を見る、新聞といつても日本の新聞は一週間位まとめて來るので、毎日は見られない。タイムスといふこゝでの新聞である。なか〳〵讀むにも骨が折れるので、自分に關係の深い記事を探す位である。新刊小說の批評など割合丁寧であるが全體に文學的色彩は薄いやうである。今日は小川博士や村上氏とオックスフオードの方へ行くことになつて居るので、早く食堂へ出ると、小川博士もやがて來られる。その中、村上氏も見えたので出かける。ケンシントン・ハイ・ストリートから地下鐵に乘つて三番目のパッチングトンまで來る。こゝの驛からオックスフオードは直通である。乘る場所は一番である。まだ三十分ほどあるが、優著驛であるから、汽車が來て居る。一等と三等とが入りまじつてある。三等は八人乘りの部屋になつて居る。西洋人も同じ部屋に二人ほど乘つた。改札はないので、部屋の中へ切符を切りに來る。從つて入場券はないわけである。こんな所に英國人の自由さが見える。十一時五十分になると着もなく汽車は出る。

やがて郊外近くなると、家の建方も低くなつて來る。それだけ野趣を帶びて來る。家が

聖家族、レオナルド・ダ・ヴインチ筆

（ロンドン、ローヤル、アカデミイ、ドイプロマ・カラリイ藏）

ときれるやうになると畑や牧場が見えてくる。殊に牧場の多いのが目につく。青草が一面に生へてゐて、その間を牛や馬が悠々として遊んで居る。靜かな情景である。殊にこの頃は新綠の頃であらう、一層長閑な中に清々しい氣分が見える。やはり郊外の中にその國の民俗があるやうに感ずる。先日いつたウインゾルの傍を通るわけだが、汽車が早いのでよく分らない、それにどこにも止まらないので見當がつかない。賑やかな町に出る、リードイングだと小川博士が言はれる。町を出ると、また牧場である。殆ど高低のないために、廣い感じがする。はじめて汽車が止つたのはドーデコットである。線路を代へるために暫くとまる。

ドーデコットからは支線になるらしい。所々止る。一時二十八分頃オックスフォードに着いた。ベデカー（案内記）を取出して地圖によつて町の見當を見る。二階立のバスが通つて居るのはハイストリートへの道であらう。一人の籠をもつた老婆にきくと、實に丁寧に教へてくれる。先にたつて導いてくれる。一體に道をきくと丁寧に教へてくれるのを經驗したが、このお婆さんは殊にさうである。こゝらにも學府としてのオックスフォードの

附近の風景があるかも知れない。教へられたまゝにバスに乘る。少し過ぎると專掌がハイストリートだと言ひにくる。下りると川の橋の近くである。もうハイストリートを通つてマグダレン橋に着いたらしい。すぐ手前に植物園もある。さうすれば町はかなり狹いわけであろ。それにしてももう一時過ぎたから食事をと、あるレストランに入る。木曜日の午後は休みらしいが學生らしいものが數人居る。早々にすまして町へ出る。兩側にならんだ古めかしい建物は言ふまでもなく、カレッヂである。ガゼリナ・ストリートから入つてフエルトソオールド・カレッヂに一寸入り、それから傍らの圓形の建物のライブラリーに入る。二片はらつて中へ入る。ライブラリーには若い男女の學生が一心に讀書して居る。そばを通つてから薄暗い階段を上つて屋上に出る。その途中の階段には盛んに鉛筆で樂書がある。が不眞面目らしいものは見當らない。屋上に出ると、四方の展望が出來る。見渡すところ何れも羅馬時代を思はせるやうなゴシック風の建物である。ベデカで見ると、十三世紀からの大學の建物があるのであるから尤もだと思ふ。テームスの河の傍までかういふ建物がつゞいて居る。全くこゝは學校だけの所で、他に少々附場の建物があるに過ぎないの

である。かういふ所で學問に從事すれば世とは離れるかも知れないがしかし學校を中心とした人格が作られるであらう。世に聞くオックスフォード大學やケンブリッヂ大學の學風もまたそれを裏付けてくれるであらう。我々は屋上から下りて大學を廻りにかゝつた。ニウ・カレッヂの中へ入る。寄宿舍と見られる建物がある。下階と二階との一室を一人で占領して居るらしい。下階のは休息室や娯樂室である。窓の所には草花が一樣に植ゑられてある。一人の學生に聞いて階上に上らうとしたら私室だからといふので止めた。いつかゝかういふ生活にもふれて見たいと思ふ。(後にハートフォード・カレッヂに一週間生活することが出來た。そのことは別の機會にのべたい。)それから多くの大學を廻つたところでは何れも寄宿舍がなか〳〵大きな部分をなして居るやうに見られた。またどの大學にも教會がある。がそこから祈禱の聲が聞えてくる。マアトン・カレッヂであつたが、教會の中へ入つた正面にキリストの像がある。それ〴〵のカレッヂにかういふ教會を有する所に教育と宗教との結合、ひいては社會との關係も見られるかも知れない。丁寧に說明してくれる案內人に六片をはらつて出る。またある大學では劇場に入つて見た。一人のお婆さんが說

同してくれる、こゝでは音楽會や學生劇なども行はれるらしい。數百人は入れさうな建物である。マアダレン・カレッヂでは寄宿舍の傍を通つて、その左側のマアダレン・グローブに入つて見る。こゝは一面の芝生で老樹もある。老教授らしい人が若い學生と話しながら散歩して居る。若い男學生が女學生と話しながら歩いて居る。ある數人の男女の學生はそこを通りかゝつた老尼の姿をカメラに收めようとして居る。異國人としての私どもをも收めようとして居るらしい。そちらをわざと向いたら「見出された」と言つて居た。芝生の綺麗なのはうらやましい。

またある大學では食堂に案内してくれた。これは學生の食堂であつて、夕餐の時にはここへ出るのである。正面に教授席があつて、教授も出席するといふ。オックスフォード大學では學科よりは人格的教養を重んずる結果、この夕食は學校生活の中でも重要な部分を占め、服裝や禮儀作法なども嚴密に守られるといふ。教授と學生とがうちとけてかういふ集りをするのはまことに意義あることに違ひない。それにしても食堂は極めて質素で一見讀書室のやうに見える所にオックスフォードの學生生活も思つたよりは質實であると思ふ。

スコツトランドの音樂

グラスゴー大學

スコツトランド、
ロモント湖上

こゝを出て植物園に入つた。植物園といつても規模は小さい、ぢき牧場らしい所に出る。木のもとにあるベンチに腰かけて休む。傍には英國人も二三人腰かけて話して居る。全體に落ちついた氣分がする。

五時近くなつたのでまた歩を進めて、ハイストリートに出る。今度は植物園の側のカレツヂに入る。マートン大學は大學の中の最も古い大學で千二百六十四年にイングランドのチヤンセラーのウオルター・デ・マートンの創立したもの、誠に古色を帶びた建築である。受付にいつて見ると種々の掲示がある。各種の運動競技のそれが最も多い。寄宿舍の外廓はもう大分見たので、講義室を聞いて、指示する方にゆくと小さい教室がある。一列六人で五列ほどある。前に四方をとりまく机がある。その前に教壇があり黑板もある。至つて質素な部屋である。しかしこゝで幾多の英國紳士が養成されたかと思ふと感が深い、この大學は全體に小さい方で、三百人位であるといふから、教室は小さいのが多いであらう。ユニバシチイ・カレツヂや、オリエル・カレツヂなどを一瞥しながら、またハイストリートに出た、學生がラケット片手に町を通つてゆく。

五時五十分の汽車で歸る豫定であるから、バスで驛まで來て、茶を喫した後、汽車に乘る。歸りはリードイングまで停車しないで來て、それからは所々でとまつた。倫敦に着いた頃はもやがたちこめる頃であつた。はじめて乘つた英國の汽車、はじめて訪問した古き學都としてのオックスフォードに再びおとづれる日を思ひながら、なほ今日の思出はなつかしく心にやどつてゐた。（昭和十年五月）

ウエストミンスター寺院

大英博物館・キングス・ライブラリイ

ロンドン・テームス河畔

十一、エデンバラから湖水まで

一

オックスフォードのカレッヂに一週間の寄宿舎生活を送つて、ロンドンに歸つて來た頃には、もう秋らしい風が吹いてゐた。スコットランド地方はロンドンよりも隨分涼しいといふので八月の中に行かねばと思つて、八月二十一日に出發することにした。同行は同宿の樣學士の鈴木氏と大阪朝日新聞の特派員の菊波氏との三人である。菊波氏が英語はなか〳〵達者らしいので安心してゆける。エデンバラ、グラスゴー、マンチェスター等を一週する汽車の切符を求めて、後は宿などはどうにかなるうと、少し大膽な計畫のまゝで出かけることにした。荷物は書物鞄に入るだけ、極めて簡單な仕度で二十一日の午前十時にキング

スクロース驛から乘つた。

英國の汽車旅行も大分經驗したので、イングランドの牧場の靜かな景色もそんなに新しい興味をいかない。それにロンドンからエヂンバラまで停車せずに七時間半ほかり走り通すのであるから單調を免れない。それでもヨークの町を通る時には遠かに寺院らしいものを眺めて靜かな美しい町を想像したり、ニューカッスルを通る時にも町の外觀だけでも見たい心持があつた。この邊りからスコットランドらしい景色になる。山が見えて來る。平淡なインゲランドとは異なつた趣が見えて來た。汽車が海岸にそつて走る時には久しぶりで海を見る感じがした。

スコットランドに入るに從つて山と水との調和の美しさが增して來た。何となく氣候も異なつて來たやうである。五時三十分頃エヂンバラに着く。驛を下りるとすぐプリンス・ロードがある。世界でも名だたる道路と聞く。通りはなか〳〵賑やかで、その傍に公園があり、その低い所を越えて古城が聳えて居る。古典的な靜かな古都の感じがふかい。博物館も町にそつてある。クック社で明日のエヂンバラの見物、明後日の湖水巡りの行程を相談

沙翁の家

ケニルロースの廢墟

沙翁の家の一室

し切符をとゝのへて、宿をさがす。大きなホテルに行つても三人で、それ〴〵シングルの部屋を三室、しかも突然にいつて求めるのであるから適當な部屋がなく、幸うじてタイーンス、ロードに近い靜かな町の小さなホテルに入る。屋根裏に近い部屋である。鈴木氏や荒井氏と、最痢をこぼしながら、それでも宿料の極めて安いのがせめてといふ。町に出て夕食をすまし、散歩する。人通りはなか〳〵多い。夕ぐれのもやがたちこめて、古城も樓々のかとうすく、夢のやうに見える。暗くなるにつれ、この高臺の町にも化生のものが現るふうである。

二十二日、朝の食事はオートミールと卵とパンとコーヒーといふ変つた書通のもの、女中は若い親切な女、グラスゴーの生れで、父母は今住グラスゴーに居ないなど話をする。愛東ないこちらの英語もこんな場合には割にすら〳〵通じてくれる。食事をすまして窓の窓につて町を見下すと、向側の家の入口のあたりを老婦が掃除して居る。床をふいたり、なかゝ〻房念である。日々の生活をこんな所にも見られる感がする。宿を出ると前の晩は暗くとして居る。クック社にゆくと、見物の車が二臺來て、夫人が乘つて居る。その中、我

々の車には十人ばかり乘つた。城の方へゆく。この城は遠くから見ると如何にも要塞な所と見られる。日本の古城を遥かに望む感じがする。近づいて中を見ると期待に反するものが多いが、それでも大砲をおく場所など堅固さうに見える。メリイ女王の居間など質素な感がある。後に見た宮殿の方のメリイ女王の居室は相當に立派な感がした。メリイ女王の薄幸な御生涯は英國民の同情を集めて、倫敦塔の野外劇にも演じられて居たが、ことにスコットランドでは盛んじられて居るやうである。この城内には十三世紀頃になつたといふ古い教會もあるが、むしろ遥かに望むべきである。これは城そのものの特色かも知れない。

こゝを出てセント・チャイルス・カセドラルにゆく。教會は歐洲に來て至る所で見た。それはどこへ行つてもまことに壯麗である。ナポリ、マルセイユから、ロンドン、オックスフォード、その他至る所で教會を見た。そのサービスにも二三回席して見た。そこにはある感激は起るが、ウェストミンスター・アベイやセント・ポール寺院などを見た限には建築としての壯麗はもはや驚くにたりない。歐洲文化の傳統に如何にキリスト教の力があつたかは教會を見るごとに感ずる心持である。次にはスコットランドの宗教改革家ジョン・ノック

スの舊居を見る。地階、第一階、第二階とつづいて數室ある。これまでこの人の事はよく知らなかつたが、スコットランド史の上では相當に意義の深い人物であることを知つた。居間、寢室、書齋などそれ〴〵普通の住宅である。ロンドンで見物したドクトル・ジョンソンの舊居を思出させた。遺物や著書など豐富にならべてある。入口へ出るとそこに古い書肆がある。珍らしさうなものがあるが、すぐバスが出たので見る暇がない。

やうやく正午も過ぎたので疲れ氣味になる。案内者の說明もこちらの氣持がゆるむと少しも意味が分らなくなつてしまふ。

その中、宮殿へ來た。なか〳〵壯麗で、殊に、メリイ女王の居室が目をひいた。裏庭の寺は荒廢して數石のみ殘つて居る。

プリンス・ロードを通つてスコットの恐ろしく大きなしかし詩人のそれとしてはふさはしくないやうな記念像を見ながら、クック社の近くのホテルの食堂に落ちついたのは一時少し前であつた。午後はエヂンバラ郊外の見物であるからのんびりするだらうなど話しながら、食事をとつた。

午後の案内は附近の村落の古風な教會で一度バスを下りて見物したのみで、その外はバスの中から郊外の景色を眺めた。ロンドンの郊外に比べて、一層田舍らしい風物にみちて居た。畑には麥藁が束になつてつんである。鷄の放し飼になつて居る所や、藁葺の小屋など日本の田舍を思はせた。それにロンドン附近と違つて丘陵の起伏が多く所々山をも遠望するので一層日本の田舍を思はせた。暮れ近くなるとどこかもやがかゝつたやうになつて、氣持も何かしら哀愁を感ずる。バスは海岸通りに出てフォース・ブリッヂといふ極めて大きな鐵橋を最後に見てわれらのエヂンバラ市内に歸り、散會した。六時近くである。プリンス・ロードと古城との間にある公園で暫く休んだ。赤や紫の花が咲きみだれて居る。ベンチに一日の仕事に疲れた人々が休んで居る。十二三歳の可愛い少女が靜かに花を見ながら通る。古城は次第にかすんで來る。私らは夕食を町のレストランですまして、靜かな通りを歩いて宿にかへつた。

二

狹いホテルの部屋にも別れをつげて、二十三日の午前九時發の汽車に乘るべくプリンス

驛にゆく。書くすると皆が集つてくる。今日の一行は昨日の顏ぶれとは異なるが、年老いた婦人が多い。それに印度人夫婦も一所である。瀧水めぐりなどには二人か三人だけの旅のが氣持にあさとは思ふが、道がかなり複雜で一々切符があるのであるから、クック社にたのんだのである。私どもの車室には私ども三人の外に、アメリカ人の夫妻と英國の老婦人が二人とで七人であつた。クック社の案内の男が面白可笑しく説明する。はじめは別々に話してゐたが蘭濱氏が會話の巧な所からいろ〳〵話の中に入つてゆかれた。こちらは默つて聞いてゐたが、それ〴〵の國の人がいろ〳〵お國自慢をしてゐることに興がわいた。日本の櫻の花のことも言はれた。

景色は段々よくなる。山が深くなつてゆく。スターリンク等を過つて、カレンダーで汽車を下りて、バスに乘つた。山道に入つてゆく。本のある所もあるが、木が絶えて草原かりの所もある。高原の感じである。小さい紅い花が咲きみだれてゐる所がある。バスをとゞめて下りて花をつんで來る人々もあつた。私も一枝をもらつた。スコットランドに特有の花とのことである。

トロサックでバスを下りて、そこのホテルで晝食をとることになるが、三十分ほど餘裕があるのでその邊りを歩く。靜寂といつた感じである。食事の時は印度人夫妻から種々に話しかけられた。印度では相當教養のある部類の人であらう。なか〳〵丁寧であつた。しかし何處か間がぬけて居る。食後カトリネ湖まで一哩ほど歩くことにする。木の間の道をたどつてゆく、菊波氏や米國の人がそれ〴〵寫眞をとる。其中に歩いて居ると木の間から音樂が聞えて來た。日本でよくいた飴賣りの眠くなるやうな音樂に似て居る。何か鈍感ではあるが哀愁がある。見ると、道の傍に五十歳位の身なりの異形な飾りをつけた英國人が立つてパイプの樂器をひいて居る。そばに妻君やその子供らしいのが居る。妻君は帽子をさし出して報酬をまちうけて居る。私らも一片づつ入れてやりながら、この珍らしいスコットランド特有の樂器をしげ〳〵と見まもつた。

米國人はこの村の音樂師と義々とを加へて寫眞をとつた、菊波氏も同じくカメラに收めた。私らがそこを通りすぎてもなほ暫くの間は音樂は木の間をもれて聞えて來た。倫敦でよく見る町繪師よりも一層心をひかれた。

この邊り幽邃にして、芭蕉の境地を味ひ得る。英國の風景畫にもしば〳〵見られるものである。たゞ英國の風景畫は餘り寫眞のやうに細かくて氣分が出ない。その點佛蘭西のコローの風景畫のやうな氣韻はないと思ふが、しかし自然觀としては日本人にも同感されるものがあるやうである。スコットランドのかうした湖畔への道を歩いて居るとまことに英國の湖畔詩人の出現もうなづかれるやうである。この邊りから南に接したアバーフォイルはスコットの「湖上の美人」にも屢々出てくる所といふ。

やがてカトリネ湖畔に出る。さう廣くはないが美しい湖である。案内記にも「カトリネ湖のこゝは、スコットランドに於ける最も愛すべき土地の一と考へられてゐる」とある。湖を往來する汽船に乘るとやがて岸をはなれる。かつて國文學研究室の藤村先生や志田義秀氏等と箱根の芦湖を舟でわたつた思出、信州の野尻湖を舟で遊んだ思出が胸にうかぶ。水は餘り美しくはないが岸の樣子は芦湖のによく似て居る。

この湖から上陸すると今度は馬車である。赤い服を著た馭者が長い鞭で二頭だての馬車を指圖する。乘客の席は非常に高くなつて居て梯子でのぼるのである。席といつても板を

渡しただけのやうな粗末なもので極の隙間から足をふみはづしさうになる。少し危い氣持がするが、それだけ珍らしいと思ふ。元氣な若い婦人はその上から寫眞をとつて居る。行く道は木も碧く高原のやうであり、その間を羊の群が放牧されて居る。敷臺のかうした馬車がのろ〳〵と進んでゆくそれもこの景色の點景になる。その中松林があるが、日本の裝飾畫に見るやうな松である。無遠慮な米國人が「日本人よ、日本の松はこれより大きいか」と遥か前の方の席から大聲できく。ストロナッハ・ラッハロからインベルスネイドまでこの吉風な馬車で進つて、いよ〳〵ロモント湖に着いた。これはスコットランドでも最も大きい湖水との事である。湖畔のホテルで茶をのみ、そばの小さい瀧を見て舟に乘る。

スコットランドでは湖のことをロッホ（Loch）といふ。ロッホ・ロモントといはれるこの湖の名も何か餘韻がある。なかなか大きい湖水で數ケ所に碇泊しては乘客が下りたり、乘つたりする。湖水の色は美しくないが、邊りの風光は流石にいゝ、鷗が飛んで居る。湖畔の草は青く、家も所々ある。高く山に連つて居る邊りに夕べ近くの薄もやがかゝつて居る。遊子の心を感ぜ、かなしませるものがある。

私等とともに乘つた山登りの軽裝をした一人の青年と二人の女學生とが私どもの傍で歌をうたつて居る。菊淺氏にその青年が寫眞をうつしてくれといふ。相互に寫眞をうつした。私らもその女學生と一所に收まつて寫眞をとつた。聞けばグラスゴーの人で休日を利用して出また山と歩いてゆくのだといふ。山の間の小さい安い宿にとまつてゆくのだといふ。途中の碇泊する所でこの三人は下りた。握手して別れて、下りてからもしきりに手をふつてゐた。この瀾上にも人情がある。

その中島が見えて來た。いくつかの島の間を縫つて舟はゆく。その時妙なる音樂が聞えて來た。別に巧みな音樂でもないらしいが場所がら、また自然の美の極まつた所であるだけに、心を引かれた。なか〳〵舟の接待がいゝと後から話して居ると、例の帽子で金をあつめに來た。町藝人の一群であつたのである。しかし峠の音樂師といひ、場所をよく心得て居るのに感心した。こんな時には離れても一片や二片は投すことになるものである。

その中、鴎の群が舟の後から澤山集んで來る。見ると若い婦人がパンの片を投げてやつて居る。それを鴎等が落さずに巧みに口に入れるのである。まれには誤つて水に落すもの

もあるが、多くはうけとめる。何十となく集る鷗の白さが水の色や湖畔の青い色に映えて絵のやうである。

ロモント湖の舟遊もつきて岸につくと、すぐ傍に鐵道線路があり、汽車がとまつて居る。こゝはバロッホといふ所である。汽車に乘ると六時半すぎて居る。まだ明るいが夕ぐれの氣分がする。疲れた體を車窓によせて過ぎゆくスコットランドの風光を眺めた。この汽車がとまればグラスゴーである。日本ならば宿に着いてくつろぐのであるが、こちらのホテルのがらんとした部屋ではくつろぐ心地もしない。しかしグラスゴーの町はどんな感じであるか、今宵の宿は如何にと待ちうける心地もせられるのであつた。（昭和十年八月）

十二、スウイス日記

南欧の旅に出たのは秋も真中の十月の末ばであつた。伊太利や南佛にゆく途中でスウイスを見ることにした。さうして十月十日の朝九時頃ベルリンの宿を出て、アンハルター驛にいつた。まだ早くて誰も來て居ない。暫く待つ中に、青山君が來られる。その中數人集つた。共に十時五十分發の汽車にのる。一二等のFDツーグであるから早い。ハーレ、ーウルンベルグ、アウグスブルグにとまつたのみで一直線に南に走る。森がとこ〳〵に見え、ことに松林の多くあるのは風情がある。六時半頃にミュンヘンにつく。くらい町であつた。驛前のドイツ、カイゼルリツシュホテルにとまる。三階の小さいが、落ちついた部屋である。食事後散歩にでた。それにしても餘りにくらいので不思議に思つたが、聞け

ば防空壕の次第との事であつた。電車にのり、ミュンヘンの有名なビールのむ家にいつた。階下に千人、二階に數百人、三階に千五百人ほど集つて麥酒をのむ。壯觀だとへやうがない。

十月十一日　朝六時半朝食を自室ですまし、同行の岡氏と何くれとなく語る。七時半ホテルに集つた、同行の人々と出發した。汽車にのると、山々次第に起伏し景色もよくなる。十一時から食堂車で晝食をすまし十二時五分に汽車を下りてリンドウでパスポートや金の檢査をうけた。終つて湖上の人となる。水清く流石に秀麗である。半時間ほどして陸につい た。リーマンスホルンといふ所である。こゝでスウイスの稅關を簡單に終つて、汽車にのる。ヴインフエルダー、フラウエンフエルド、ウンテルツムを通り、三時二十分ほどにチウリツヒについた。荷物を驛にあづけて町を歩く。チウリツヒ湖をたがめ更に大學のあたりにゆく。岸になつて居て見下すとなか〳〵綺麗である。六時すぎまで町を歩き、驛のレストランで食事をすまして八時三十分ほどの汽車で出發した。九時四十五分ほどルツエルンについた。ルツエルン湖を闇の中にみつゝホテル、サヴエデにつき、一人部屋に納まつた。

時に十時半。

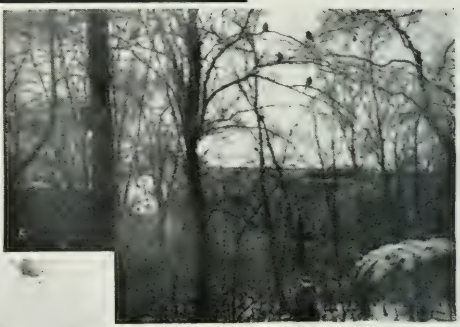
十月十二日　朝起きると雨が蕭々と降つて居る。山の秋の雨はさびしい。雨の中をグレツツエル、ガルテンにいつた。まづガルテンの前にある山のパノラマを見た。ガルテンに入ると氷河のあとがある。くぼんだ所は石が作るらしい。古代の遺物のムウゼアムもある。硝子の迷路にも入つて見る。こゝを出て、ルツエルンの町を散歩してかへる。なか〳〵水が美しい。宿で晝食をいそいでたべ、十二時四十七分の汽車でベルンにむけて出發した。二時頃ついて、荷物をあづけて例の白く町を歩く。川が中心になつてゐる。萬國郵便の記念の像が雨の中にたつて居る。橋をわたること、四つ、クウ、ハウスで茶をのんで、六時二十五分頃の汽車でインターラーゲンにゆき、驛前のユラ、ホテルにとまつた。夕食の時皆々名のりあふ。山の宿の秋の夜はふけては靜かである。十一時眠つた。明日の天氣をいのりつゝ。

十月十三日　七時前、起床、八時二十分の汽車にのるために、インターラーゲンの停車場にゆく。ホテル町といふべきこゝも秋たけては靜かである。汽車は流にそつてゆく。瀧

も岩の間に見える。ランテルブンネルで乘りかへた。道はいよ〳〵上りになる。雲の中につゝまれて暫く何も見えなくなる。その中雲がはれると見えたのは雲の上に出たのである。見上ぐる山はまことに雪をいただいて壯觀である。ユングフラウもそゝりたつてゐる。シヤイデックで更に乘りかへる。こゝからアイゲル、モンヒ、ユングフラウ等の山々がならびたつのが見える。ユングフラウまで殆どトンネルである。下りてたつさへて來たパンを食べて後、アイスバーンに入つてみた。氷の中につくられた道や、部屋抔、青く光つて水晶のやうである。二時二十五分再び車の人となりシヤイデツクで乘りかへて後は逆つた道をとり、グルンデル、ヴァルトで乘りかへた。牧場には鈴をつけた牛があり、山の家に母親と子供がむつまじく歩いてゐる。山の晩秋はあはれに興がふかい。六時インターラーゲンについた。八時に夕食もすましてお部屋でくつろいだ。

十月十四日　インターラーゲンを朝の八時廿七分頃たつた。約四十分でスピッツにつきこゝで乘りかへる。それからは溪谷の間であるヴァイゼンブルグ等をへて、ツアイジンメルでまた乘りかへた。雲が被ひかゝり、山容も半ばかくれるがその中、姿を現はした。雪を

スウイス、ユングフラウの雲海



ライプチヒの雪

スウイス、ルツエルンの
グレツツエル、ガルテン

いたゞいた連嶽は紅葉の間に見え、まことに絶景である。やがて十二時半モントローについた。こゝの驛前のホテルで食事をし、少し散歩する。レーマン湖畔にそふ綺麗な町である。二時半出發、レーマン湖をそつて汽車は行く。ボーデン湖とともに、更に少し大きい湖水である、琵琶湖の如き感がある。四時すぎジュネーブにつく。雨がふつてゐる。部屋に落ちついた後本屋などにゆき繪葉書をかつてかへつた。

十月十五日　九時宿を出て、國際聯盟を見にいつた。橋をわたり、レーマン湖畔を歩いて國際聯盟と國際勞働機關とヘーグ仲裁裁判の三部に分れ、勞働機關は政府委員二、民間代表一、勞働者一）二の比例で出る事、勞働時間の點が中心なることなどきく。室の調度は各國の寄贈になる由で、フランスのユブラン織、オランダの繪、日本の七寶焼、イタリイの本箱、スウイスの時計などそれ〴〵かざつてある、委員會室には吉阪氏寄贈の日本錦繪があり。朝日新聞寄贈の櫻五十本も庭にあるときいた。更に新しく出來る國際聯盟の建物を見、舊國際聯盟の建物にもいつて見た。原田氏が案内される。氏は青淵戸博士につい

て此地にこられ、十六年の間こゝに止つて居られるといふ。松岡氏畜圃の硝子の間や馬蹄形の十四の席などを見て日本の國際的位置などを考へた。いろ〳〵説明をきいて、宿にかへつた。晝食の後、ミラン行の汽車にのつた。（昭和十年十月）

十三、南歐遊記から

スウイスからイタリイに入つたのは十月十五日であつた。翌日來のスウイス旅行の最後の日をジュネーブにすごし國際聯盟の建物を參觀し硝子の間や十四の馬蹄形の椅子などを見た後、正午すぎにミラノ行の汽車に乘つた。モントローを過ぎ、シヤートウ、ランドの城をながめつゝ國境驛に着いて旅券などしらべられたが簡單であつた。イタリイはエチオピヤとの關係が險しいので一人旅よりは、大勢でゆく方が安心と思つたので、ベルリンからの十四五人の日本人の一行に加はつてゆくことにした。それだけに旅の閑寂は得られないが、また異國の旅に伴ふ氣苦勞もない。國境などを越える時には日本では感じられない嫌な氣持が伴なふのであるが、かういふ一行ではまことに太平である。一行中には譬者があ

り、技師があり、商會の支配人があり、また地質學の先生もある。餘技に三十一文字をつらねる人もあれば十七字をつらねる人もある。興至れば殺風景なホテルの一室に濃い一くさりをうたつてくれる風流の人もある。ともかく戰爭の始まつてゐるイタリイに入るとも見えぬ長閑な旅である。

その中シンプロンの十二哩餘にわたるといふトンネルを過ぎ八時半頃ミラノに着いた。思ひなしか町が落ちつかない感がある。部屋をそれ〴〵とつて食事がすんだ時には十時をすぎてゐた。ミラノの有名なスカラ座を見に行かうかとも思つたが、心もとない氣もするので止めることにして友人岡氏などと談笑しながらすごした。

十月十六日　九時からミラノの見物を自動車に乘つて始める。スカラ座の前を通り市内を一巡してから、パラッツオドゥモナに入る。極めて大きな敎會である。ボルネオ法王の遺骸がそのまゝに祀られて居るといふ部屋、ミケランジエロの作といふ十字架やジオットの作といふ繪などある部屋、ベルデノーが三十五年を費したといふステインド、グラスなど見る。說明がこと〴〵しいが半信半疑で見る。ここを出て小さい建物の中に入る。それは

ダヴィンチの最後の晩餐の壁畫のある寺である。これはダヴィンチの數拙い作品の中の大作であり、ミラノで一番見たいと思つたものである。もつともこの繪を彼の弟子がそのままに寫したといふ作がロンドンの國立美術院にあるのを見た。その方が剝落がなくてはつきりしてゐたが、原作はすでに剝落して居り、色もあせて居るが、なほ構圖といひ、キリストやキリストの弟子のそれ〴〵の個性や心理を出して居る所もほぼ分る。暫く見とれて居る。ダヴィンチのものはロンドンでも聖家族の下繪その他を見、其の後パリイのルウブル博物館でもモナ、リザをはじめ六七點を見たが、如何にも深みのある天才的な藝術家と思ふ。ミケランジエロが雄大であり、ラフアエロが優美であるとすればダヴィンチは幽玄であるなどと感ずる。最後の晩餐の繪葉書など求めてこゝを出る。

次にミラノの市民の墳墓の所で車を下りる。それ〴〵大理石の美しい彫刻が所せましと立つて居る。墓場はもつとつゝましくありたいと願ふのは日本人の心持である。こんな所に墓所の考へ方の相違があるであらう。宿にかへつて晝食して二時半の汽車で南伊のナイスに向けて立つ。ミラノにはもうすこし見たいものもあるのであるが、それ等はふまらめ

て出發した。七時半頃國境のバンミングラードで汽車を乘りかへる。旅客と荷物の檢査がある。イタリイとフランスとでは時間が一時間ちがふので少しくたごつく。夜の九時半すぎにニイスに着いた。途中セナコの小國市の國を通る。

十月十七日　午前は親しい人二三人とニイスの町を歩く。椰子が生じ、如何にも南國氣分のゆたかな所である。海岸に出ると十月の半ばであらうといふのに八月の太陽のやうな明るいものが海の上にさん〳〵と映えて居る。如何にも明るい感じがある。ジュネイブの會議に出席したといふ日本の人にたまたま出あつた。これからマルセイユへ出るのであると言はれる。きういへばニイスはマルセイユから近い距離にあるのである。今年五月の十二日頃マルセイユに一寸上陸して公園を歩いた事を思出す。その頃はマロニエの新綠が美しかつた。ノートルダムのある高い岡の上に上つて見下した南佛の海岸は明るかつた。今は秋といふのにやはり同じ感じがする。ニイスはマルセイユのやうな港でないだけに靜けさがある。海岸に下りて見る。波打ち際に老婦人がたゞれた足を海水につけて居る。治療のためらしいと思ふと興がさめる感じがする。とにかくベルリンの生活で北國に近づいて來る

冬を感じてゐた私どもは、南歐に來てこの明るさに觸れて歐洲の風土も南北で隨分相違のあることを感じた。北歐に思索的な哲學が生じ、薄暗い繪畫が生れるに對して南歐に感覺的な文學や藝術が生れ出ることの自然さを感じた。

午後は二時から乘合バスでモナコへゆく。山の上の道を通つてモナコを見下しつゝイタリイの國境まで行つて引返しモナコに着いた頃は夕ぐれ近い頃であつた。世界でも類のない小さい都市國家である。モナコは美しい海岸にそつた保養地のやうな町である。この町に有名な國立賭博場があることなどを見てもこのモナコの狀況が知られるであらう。太陽のある中は八月のやうな明るさをもつた南歐の海岸も夕暮になると流石に十月のつめたさが感じられる。モナコの町の燈の明滅するのを見ながら車を飛ばしてニイスの宿についたのは七時頃であつた。

十月十八日　朝ニイスの町を出て九時半頃汽車は伊太利への國境を越えた。再び伊太利へ入つたのである。伊太利へ入ると車中に兵士が乘つて居る。これは車中の盜難を防ぐために乘り込んでゐるのだとの事である。フランスから入ると、フランスの風物の明るかつた事

が感ぜられる。イタリイはしかし山も相當にあつて景色は悪くない。日本のやうに小刻みの畑が多いのに氣付く。車中で晝食をすまして居る中に二時三十分ゼノアに着く。コロンブスで有名な所、港としては相當に大きいのであらう。すぐ乘合車で市中見物をする。コロンブスの銅像が町の廣場にたつてゐる。コロンブスの舊跡といふ家もある。小學校時代からきゝなれた大陸發見といふことが今更に思出される。小學や中學で教はつた世界地理や世界歴史の復習を實地でやつてゐるやうに感ずる。なか〳〵高低のある町で低い海岸通りの町から隨分坂をのぼると眼下に港が見下される。澤山船があるゝイタリイで第二番目の大きさといふ四萬餘噸の船も居る。それからまた海岸通りに出てその大きな船を見、今度は世界第一といふ墓にいつて見る。ミラノでも見たが、大きな數々の彫刻がならんで居る。うら若き少女が花環をもつて死人にかしづく像もある。或は悲しく或はさびしく、或は偉大にさま〴〵の人の像がならんで居る。イタリイは大理石の産地であり、それ故に彫刻もギリシヤについで發達したのであらうが、墓場にまで惜げもなくそれを示して居るのは一面ではうらやましい氣も起るが、一面では却て墓らしくないと感ずる。一行中の元氣な本

田氏その他は葬場など見てもつまらないといふ。一方では見られるものは見るがよいといふ意見も出る。私などは先づ後者に從つて隅々を見て歩いた。町に出て車で宿の方へゆく。町々の家はあまり美しくない。窓から洗濯物などがほしてあるのは愉快なものではない。こんな風景はイギリスやドイツでは餘り見られなかつたやうである。宿もあまりよくない。食後本田氏のたてやまぶしその他を獨りでうたはれるのを聞いた。しんみりして來た。旅であることを感ずる。日本の秋ももう深いであらうなどと思ふ。

十月十九日　毎日よく晴れて居る。十時頃ゼノアの町をたつことになる　朝の二三十分をコロンブスの銅像のあたりを再び歩く。貧しき裏町を通つて見た。十二時半ピサに着いた。こゝの斜塔を見るためである。これも世界地理の復習である。斜塔だけでもつてゐるさびしい町である。五人乘りの馬車に乘る。秋風が馬のたてがみに吹いて居る。下りて斜塔のそばの大理石店による。なか〳〵いゝのがあるがいゝのは高く、また重い。斜塔は百五十米ほどのもの、少し斜めに傾いて居る。階段をのぼり頂までくると流石に高いのを感ずる。山々が向ふに連なつて居る。塔は歐洲にも多い。ロンドン塔などは宮殿であつて殆ど塔ら

しくないが、パリイのエッフエル塔などは高い事では隨分大きいと感じた。イギリスでは塔の研究に精しい慶大の佐原君と一所にゐたので塔の話は隨分きいたが、古い塔には勿論宗教的な意味が主である。古い塔で今殘つて居るものはなか〳〵趣がある。それにしても西歐の塔は圓筒形で遠くから見ても近くから見ても日本の五重塔や三重塔のやうな趣はない。奈師寺の塔などは世界の塔の中でも燦然とかゞやくべきものであると感ずる。斜塔などが有名になるのを見ても西歐の塔の大體の性質が知られるなどと話しあふ。

斜塔を下りて近くの教會と、洗禮場とを見る。洗禮場は中に入ると山響がする。こちらの柱にそつて言を發すると向ふの柱のそばで聞える。一人が物をいふといつまでも反響する。そんなことを眞がりながら暫く疲れた足を休める。歸りは電車で驛までいつたが、まだ發車までには二三時間あるので、二三人で附近の映畫館に入つて見る。恰度エチオピヤの風俗寫眞で割禮や子供の入墨、結婚式の風習などおもしろく見た。舞踊も原始的で、ことに裸體の黑女が十人ほど月の光のもとで踊るあたり、いかにもアフリカを思はせた。この映畫館に入る時、入口のイタリイ人が日本人たる我々に好意を示してくれた。六時半の

汽車でいよ〳〵ローマに向ふ。ローマに着くのは夜の十二時半の筈である。ローマとフロレンスで古藝術にふれる樂みが胸にわき起つて來た。歐外の即興詩人のことなど話しながら車中の退屈をまぎらした。ローマに着いた時はもう人通りも殆どなく、暗かつた。ホテルに着いて寢についたのは一時をすぎてゐた。雨がそぼふつて居る。（昭和十年十月）

（註、後の佐藤氏の文詞參照）

十四、即興詩人と羅馬行

森鷗外が明治二十五年九月から明治三十四年一月にかけて譯して欄草紙やめざまし草等に連載し、三十五年に單行本となつた即興詩人は私のかつて愛誦した作品であり、今も愛してやまない作品である。原作以上と言はれるあの典雅な文章にひきつけられて幾度かよみふけるとともに、描かれて居る伊太利の風物をそれによつて懐しく思つたのであつた。

冬の夕暮銀冶の火高く燃えて、道ゆく百姓の立ち倚りて、手を溫むるとき、我は家の窓に坐して、これを見つゝ時の過ぐるを知らず、かの銀冶の火の中には、我空想の世の如き殊なる世ありとぞ覺えし。北山おろし劇しうして、白雪街を籠め廣こうぢの石のトリイトンに氷の鬚おふるときは、我喜限なかりき

ローマの廢墟を顧望するゲーテ

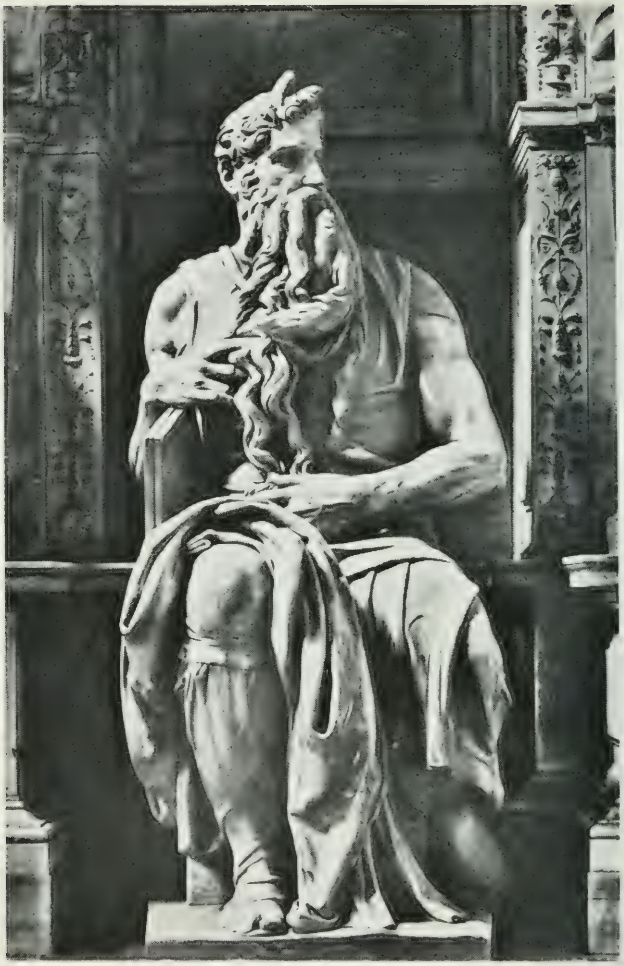
といふやうな文章を讀るゝ典雅な韻律と清新な抒情味は今讀んでも懐しいものがある、それは一葉の「たけくらべ」の文章の韻律にもやゝ似て、一層力があり清新である。私は昨年の五月西航の途上ナポリに上陸した時にも即興詩人に出てくるカプリ島を思ひうかべたが、更に伊太利旅行を秋深き十月の半ばに試みた際にも即興詩人の思ひ出を胸にうかべながら歩いた。殊に羅馬ではプラツツア、バリベリイニを通つてトリイトンの神の像のある美しき噴水を見た時、即興詩人の冒頭の句を思ひうかべた。

私どもの羅馬見物四日間のはじめもトリイトンの神像からはじまつて、即興詩人と同じく次にカツプチヨオの骸骨寺を見たのである。古藝術に生きる羅馬の町ながらカツプチヨオの寺には露骨な對蔕とは異なつた、不思議な感をいだかせられた。即興詩人の原作はアンデルセンの作であり、千八百三十四年に公にされたから、そこに書かれたものは百餘年前の羅馬である筈である、基督のかくれたといふカタコンバといひ羅馬には暗い陰鬱な遺跡が餘りにもいやうである。

さうしてパラチンの岡やラベンチーヌの岡に立つて羅馬盛時の遺跡を見た時、國破れて

山河ありの感が深い。月はカピトリウム（羅馬七陵の一）の背後を照せり。セプチミウス、セエルス帝の凱旋門に登る磴の上には大外套被りて臥したる乞兒二三人あり」といふ叙述にも「テエエル河に生ふる蘆の葉は風に戰ぎて、我ロムルスとレムスとの上を語れり。凱旋門、石の柱、石の像は皆我心に本國の歴史を刻ましめんとす」といふ感慨にも同感されるものがある。昔の共同浴場や劇場、さてはシーザアの演說をした所や墓などを見る時、その廢墟が殘つて居るだけに歴史を思出させる。ガリバリヂイの記念の碑のあるゼニコロの岡の上にたつて羅馬の町を展望する時同じ感慨があつた。後に獨逸のフランクフルトでゲエテが羅馬の廢墟の前にたゞずんで感慨にふけつてゐる繪を見た時、その心境が分るやうな感があつた。

しかし所々の寺院や博物館に藏せられて居る繪や彫刻を見た時、わけてバチカン法王廳博物館に入つて、名匠の大畫名作を見た時、藝術の永遠性を感じた。こゝにも伊達政宗の文字など日本的史料として珍らしいものもあるが、ラフアエルの「アテネの學校」その外數室にわたる壁畫と、ミケランジエロの世界創造の天井畫とは素人目ながら文藝復興期藝



ミケランジエロ作モーゼの怒り

術の偉大さを思はせられた。

たゞ羅馬の街を歩いてゐると過去の町であつて、現在に生きる町といふ感がしない。ポンペイほどではなくとも羅馬も過去の文化藝術に棲こるべき町であり、同時にその過去の文化藝術がそのまゝ生きて現在の羅馬に流れてはゐない感がある。さうして過去の羅馬時代と現在の伊太利時代とが離れ離れになつてゐるやうに思はれる。羅馬の町にある數々の遺跡や藝術の博物館と現在の都市とは別々の存在であるやうで、統一がない感がある。日本の古藝術や古文化が國家的生命や精神を通して今に力强く生きて居るのと相違があるのである。私は秋雨蕭々たる日、羅馬の古藝術や古文化にふれ、即興詩人の情趣をたつかしく思ひながら西區文化の流轉の跡をしみ〴〵と考へざるを得なかつたのである。(昭和十年十月)

十五、黄葉紀行

今年の秋は落ついて紅葉を見る機會もなかつたが、それでも國文科の學生十人ばかりと筑波山にのぼつて紅葉を見、歸りに雨引の樂法寺に萬葉研究家惠岳上人の遺蹟をたづねて雨の中に暮ゆく紅葉を味はつた。それから奈良へあはたゞしい旅をして萬葉植物園を見たり、奈良の奥山の紅葉を探り晝間ながら鹿の一聲をもきくことが出來た。

それにつけても去年の秋見たドイツの黄葉が思ひ出される。日本では紅葉と書くのが普通であり、またそれがふさはしいほど紅色になる紅葉が主であるが、向ふで見たのは紅葉ではなくて、黄色の方が多く、黄葉と書いた方がふさはしいやうである。もつとも日本でも萬葉集時代は黄葉と書いた方が普通である。萬葉集總索引で見ても一字一音のは除いて、

ダンテハウス（フロレンス）

ポンペイの廃墟

外は黄葉と書いたのが大部分で、その他「秋葉」「黄變」「黄色」「黄」が多少あり、動詞として「赤」を「もみぢぬ」等と用ゐたのが二所「赤葉」を用ゐた所が一所あるが「紅葉」と用ゐた所は一所も無い。さうして古今集では漢字の場合は紅葉と用ゐてあつて、黄葉と用ゐた所は見當らない。まさか萬葉時代は黄葉が多く、後に紅葉が増したといふのでもなからうから、色に對しての見る人の感覺の相違であらう。優美を好むやうになつた平安時代から紅葉に對して一層愛着と關心とを多く有するに至つたのであらう。この點は現在までつゞいて普通紅葉と書かれるが、向ふでは黄葉が主であるやうである。たゞ私の見たのは西歐の黄葉の一部に過ぎないから、斷定することは差ひかへたい。

向ふで黄葉の頃にあつたのは南ドイツの旅に於てであつた。恰度十月十日からスウイス、イタリイの旅に出てイタリイの境近くにあるボツツエンに着いたのは十月二十六日であつたが、その宿の庭にあつた一本の黄葉した木が美しく感じられた。恰度南國から北に向はんとして見つゞ庭の黄葉に氣付いたのであつた。二十七日にはアルプスの續きの山であるドロミイテンを一日ドライブして、その翌日にはチロルの秋を車窓から眺めつゝオーストリ

ヤを通りぬけてドイツのミュンヘンに着いたのであつた。車窓から見る山々の黄葉はやはり黄色のそれであつた。それからは親しい岡氏と二人で南ドイツの旅に出た。

南ドイツではボン大學の日本學の教室を觀ることが主なる目的であつたが、その序にニウルンベルヒ、フランフルト・アム・マイン、ハイデルベルヒ等の郡市を訪れ、ヴイスバーデンの温泉にも一泊した。たゞライン下りをやつて見ようと思つたのであるが十月二十日以後は舟は出ないとの事で殘念ながら、汽車で河岸を通過することにした。それでも大體ライン下りといふものゝ樣子だけは分つたが、川の流れもゆるくローレライの岩の邊でも舟の衝突する心配はないやうに思はれた。それだけ日本の川下りの壯觀を聯想していつた私どもには失望の心持が起つた。たゞ兩岸に所々古城があるのは中世的らしい特徴が感じられた。しかし川を下つてボンの町に着いた時、靜かな町が美しく感じられたのである。ことに私どもの泊つたホテルの前の公園には黄葉が美しく色づいて居り、一面に散りしいてゐた。その黄葉を踏んで大學の前に出たら、こゝにも黄葉が美しかつた。

こゝの日本學の名譽教授をして居られた松本氏（今は日本に歸つて居られるが）に案内

されて大學の外側を一週し、別にある東洋研究室で日本學の研究室をはじめ、印度、支那等の研究室をも見せてもらつた。藤木氏の言ではこの大學では日本思想史の研究や講義を主として居るとの事であるが、さういふ方面の書物が多かつた。山鹿素行の論文なども出て居るといふ。それからこの大學に學ぶ二人の日本の方も加はつて黄葉の中を靖みつゝ方々を歩いた。黄葉がどこにもあつた。

この町にはベートウヴェンの家があつた。この偉大なる音樂家の古の家をこの靜かな黄葉の町に見ることは淋しき感がした。族では出來る丈け西歐の文豪や藝術家の遺跡は見ることにしたが、昨年の年の暮に雪踏みわけてワイマールにゲーテ、シルレルの跡をたづねた時と、黄葉の散りしく中をベートウヴェンの家をたづねた時とが一番印象に深く殘つて居る。

ボンから、またライン川の沿岸を汽車で通つて、ハイデルベルヒに着いたのは十一月二日の正午頃であつた。夕ぐれ近い頃古城の岡の上にたつて見ると黄葉は過に散りしいて居り、岡の下にネツカア川が長く流れて居た。岡の後ろの道を歩いて居ると、黄葉の中を若

者が車をつんで通つてゆく。日本の秋をしみ〴〵思出したのであつた。銀杏の黄葉もこゝで見た。歸りに大學の前を通る頃は暗かつたし、晩秋の寒い風が吹いて居た。町の方々の陽で賣つて居る燒栗の暖かいにほひが身にしみた。この町ではアルト・ハイデルベルヒで名高いケツテイの家といふのに行つて見たら松井須磨子の上演の寫眞などもあつた。面白いお婆さんが部屋の隅々まで案内して呉れた。

南ドイツの旅をすましてベルリンに歸つた時にはもう黄葉も大分散つてしまつて陰鬱な天氣ばかりつゞいたので、郊外の黄葉の印象も殆ど殘つて居ない。それにつけても西歐の黄葉は、やはり黄葉と書いておきたいやうに思ふ。一體に西歐では植物の種類が尠いのか、同じ植物がかたまつて居る。リンデンとかマロニエとかの街路樹の美しさもさることながら、同一植物だけによつて生ずる美しさである。それだけ單調である。地勢も平坦であり、季節も變化が尠い。日本のやうに四季の變遷がはつきりして居て山川の起伏の多いのに目なれた日本人には、單調であるといふ感が深い。黄葉の色も一色になつて居るのであらう。もつとも日本の自然でも松原の如く、吉野の櫻の如く一種の植物による美もあるのである

が、西歐に比べては種類が多い。少くとも文學に扱はれる場合に於て同じ種類の中に異なつたものを求める。萬綠叢中紅一點が綠の自然に對する日本人の美の感じであるならば、黃葉の中に紅葉があるのが日本の秋の自然の美である。（昭和十一年十一月）

十六、クリスマスから新年へ

今年もいつか年の暮になつてしまつた。いくつになつても年末、年始といふものはなつかしいものである。が、私には去年の今頃のことがしみ〴〵思出されるのである。恰度伯林に居たのであるが、十二月になると何處の町の隅にもクリスマスの木が賣り出されて居る。十九日にライプチヒの方へ行つたが、大學の前の廣場などは樅の木が一杯になつて居た。町の通りも歳の暮らしい心持がした。大學の日本研究室にウバーシヤール教授を訪ねて、この町へ來た一通りの目的もすましてから町をぶら〳〵歩いて居ると、天涯に一人といふ心持がしたが、それでも異境で歳のくれをかうして過すことに何かしら心をひかれるものがあつた。それからライプチヒからワイマールへいつた頃は雪が邊りを埋めてゐた。驛近

ライプチツヒ大學

ポツツダム、青年學校

ゲーテの書齋（ワイマール）

くの小さいホテルへ泊つたら客は私一人であつた、しん〳〵と積る雪の音を聞きながら寢牽に積はつた時は天地の寂寞を味つたやうな心持がした。その翌日雪の中を歩いてシルレルやゲーテの家を訪れたりしたが、この靜かな町にもクリスマスを迎へる用意が見えた。

伯林へ着いてクリスマスを迎へた。宿の主婦が友人の辻君と松本君と私との三人を晩餐に招いてくれたので、百貨店へさゝやかな贈物を買ひにいつたりした。普通ならば日曜日は百貨店は閉ぢてしまふのにクリスマス前の日曜日は開いて居た。二十四日の四時半頃から主婦のヨーキツシュ夫人と辻君との三人で郊外のグルウネ・ヴルドの教會へいつた。雪がちら〳〵降つて居る晩だつた、教會へ着いたらもう席が無い位であつた。正面の壇の傍には大きな機木が美しく飾られてあつた。讃美歌があり、牧師の說教が行はれる。パイプオルガンの音がしめやかに流れる。三十分程で終つた。それから雪の道を踏んで宿にかへり臘燭の灯影のもとで食事をする。昨年の春なくなつた夫の寫眞が飾つてある。クリスマスの晩は外へ出て居るものも皆それ〴〵の家庭へ歸つてゆく。レストランも休みとなり、全く家庭に皆がこもつて靜かに一年を顧みるのであらう。それにしてもクリスマスといふもの

は日本で想像したよりは遥かにしんみりとした趣のあることを感じた。北歐の雪に埋れた夜の灯影にしめやかに語る思出といつたものを今でも感ずる。

巴里などで迎へたら或はあれほどの趣はなかつたかも知れない。北歐の雪の夜といつたものが私どもの想像するクリスマスの氣分と合つて居る樣な感がする。サンタ・クロースの出て來るといふ想像も北歐の雪の町に於て始めて調和するやうである。

クリスマスのしんみりとした情趣に比べて、年の暮から新年へかけての趣は私には失望を與へた。年越の晩は街邊ではレストランで殆ど夜通し騷ぐやうである。あらかじめ席を豫約してレストランに集る。私どもは日本の友人四五人と宿で食事をしてから日本料理屋で年越のそばを食べ、十一時半頃から町を歩いて見た。十二時を合圖に家々の窓から花火を投げる。道を歩いてゐても花火が頭上に落ちてくる位花火を投げる。この時レストランでは燈を一度消すさうであるが、私どもは道を歩いて居たのでそれは經驗しなかつた。その中レストランから出て來る人で道は賑やかになる。とにかくクリスマスの晩のしんみりして居るに比べて年越の晩の騷々しさは全く反對である。

元旦は獨逸の人は殆ど寂正月らしい。私どもは十時から大使館の員谷氏の御宅で御屠蘇をいたゞき、それから大使館邸で在留邦人が集つて拜賀の式を擧げ御壽司などの御馳走になつたので、全く日本的な新年を迎へたのであるが、歐米人は元旦は殆ど寂正月らしい。それ〴〵國によつて異なるであらうが、こゝに日本に於ての新年を再び迎へることの出來る幸にあつて、異境で淋り迎へた年末年始を少しく思出して記したのである。(昭和十一年十二月)

十六、パリイ日記から

二月一日—今日はパリイ行の日である。五月ばかり居た獨逸生活が流石になつかしく思出される。宿の主婦にもお別れを告げ、タキシイでツオ驛に行つた。獨逸にゐる友人等が見送りに來てくれる。岡氏にオリンピツクの寄附追加を賴み、汽車に乘つた。八時三十八分發、折よく隣室に海軍技師の中前氏が居られ、席をその隣に移した。食事をともにしながら午前中話つた。アーヘンは四時頃。ドイツの金のしらべもすみ、ベルギーに入ると荷物の調べがあつた。六時頃フランスの方では荷物をあけて調べたが、無事すむ。雨が時々降つて來る。ベルギイ国やゝ岡があつた。一時間遲れて九時三十分頃パリ、ノルド驛に着くと思つたが、時間が一時間遲つてゐて八時三十分頃に着いた事になる。中前氏も迎へ

の人が來て居り、こちらも宿のものが迎へに來て居たので別れる。凱旋門の邊りは流石に美しく明るかつた。

二月二日―輕い食事の後、十六番のバスに乘つて凱旋門を通り、ルーブル宮殿の前に出た。セイヌ川にそつた景色のいゝ所である。廣々として居る。川には釣する人が五六人ある。水は黄色い。廣場には像が多くあつた。十時にルーブル・ムウゼウムに入つたが、日曜であるから入場料もない。彫刻を見る。ヴイナスの有名なのがある。二階の左翼は繪畫の部である。ボッチェーリイ、チ、アンなどの畫も目につく。バンゲイク・ルウベンス・レンブランドもある。その中、フランスのミレイ・コロー等の繪の前に出る。淋漓ひろひ、晩鐘などしばしみつめる。いゝ繪である。コローのものは殊に多い。コローは自然畫家であり、ミレイは自然の中に生くる人生を描いて居る。ダヴインチのジョコンダの外、ダヴインチのものが四五點あつた。何れも同樣な精神がある。ミケランデニロが雄大であり、ラファエルが優美ならば、ダヴインチは幽玄であるなどと感ずる。附近のレストランで食事の後、再び見物。セザンヌ、マネー、ルノアール、ゴッホなどの近代フランス畫を見る。

ルネッサンスを全く遂つた近代性を感ずる。散歩しながらバスで歸つたが道を間違へた。英獨の片ことでどうやら西歐の國々を歩いて來たが、パリイの町を歩いて一番當惑した、國語といふものに就いてしみ〴〵考へさせられる。

二月九日―朝食をすましてぼんやりして居ると、交換學生としてソルボンヌ大學で研究して居られる澤潟氏が來られた。暫く話をする中に晝になつたので、晝食をともにすまして、ベルサイユ宮殿に案内してもらふ事になり、近くからメトロに乘り更にバスに乘り換へて、一時間足らずでベルサイユに着いた。宮殿はなか〳〵大きい壯麗な部屋が多い。歴史的題材を扱つた畫がつづいてある。ナポレオンやジャンヌダルクなどの畫が目につく。所謂名畫といふものはない。出て庭園を歩いた。明るいフランス的な庭である。手入もゆきとゞいて居る。二月の光は明るい。澤山あるマロニエの花咲く頃はどんなに美しくあらう。川べりを歩きながら西田哲學の話などする。澤潟氏は京大の哲學科出身で西田門下の一人である。三時半頃歸途に着いた。往路と同じ乘合に乘つて歸つたのは五時過ぎである。六時半大使館の花見氏來られ、お宅に着く。お嬢さんも元氣よく迎へられた。小學一年の、

パンテオン・パリイ

パンテオンの内部

パンテオンの壁畫
シヤバンヌ筆

由、小學と中學とがともになつて十一歳になると、聞く。十二歳になると中學校（リセイ）にうつるとの事である。自由なフランス式の教育の話など興深く聞いた。木芽田楽などまことに珍らしく、日本料理に舌鼓をうつた。歸つたのは十二時近かつた。花見氏とは西航の船中にはじめて知つたのであるが、パリイでは再會の機會を得て種々御世話になつたのである。

二月十二日―午前にギメイ、ムウゼアムに行つたが、十二時からとの事に引きかへしてマグダレムまで行つて、オペラ附近のにぎやかな通りを歩いた。雜貨店で簡單な食事をして、また、ギメイ、ムウゼアムに引きかへした。三階からなり、佛像等東洋のものが多い。憲心院高都源信彫とある六地藏の像は一寸心を引かれた。日本の刀の鍔、煙草の根じめにもいゝものがあつたが、浮世繪も若干陳列してある、歌麿のものが相當にあり、豐國、國貞、等もあるが、どく後期のものもあつた。こゝでは毎日講演があるらしくアカン氏をはじめ數人の人が代る代るするやうである。夜アグノウエル氏に電話をかけ、金曜日の晩食事をする約束をする。アグノウエル氏の弟子の方から電話がかゝり、明日來られるといふ。

二月十三日―午前にアグノウエル氏の弟子でウインの人、アチアス・エドラー氏來られ

る。日本にも四年半ほど居られ、金澤の鴻巣氏にも親しき由語られる。そのために萬葉集の研究を志し、ことに上代の文法を研究し、ドクトル、アルバイトにするとかにて、いろいろ尋ねられる。接續語の「ま、」「さ、」「い」等の事を話され、また活用の「き」など研究されるといふ。それをすましてから日本に行かれる由である。將來の大成を祈つて別れる。ルボン氏の日本文化史、アグノウエル氏の講義をきかれるとの事、ルボン氏の日本文學史（千九百二十八年パリス刊）を示さる。その獨譯もある由である。午後は大隅氏を尋ね、ナショナル、ビブリオテイクに行つていたゞく。大隅氏の佛語により何くれとなく世話され、千五百九十九年刊、千六百三年頃刊のキリスト教に關する日本研究書二冊を見る。日本に關する目錄など見て、こゝを出る。にぎやかな通りを通つて、數日の中に別れるべきパリイを今更に考へた。（昭和十一年二月）

十八、思ひ出すことなど

早いもので、歐米の旅から歸つてから間もなく一年になる。四月十六日に日本に歸つた翌日は久しぶりで東京の櫻を見たのであつた。櫻はたしかに日本の花のほこりであるが、歐米にも所々櫻が移植されて居る。スウイスのジュネイブにも日本の櫻が植ゑられてあつたし、米國のワシントンにも櫻があつた。それ等は日本の櫻として向ふの人にも愛されて居るのである。しかし私が同ふで櫻の花の咲いて居るのを見たのは、まさに歐米を去らんとする一日前に桑港の公園にある日本庭園の櫻を見た時のみであつた。向ふへ着いたのはもう新綠の頃だつたので、結局最後に見たのであつた。花は滿開であつた。たゞ日本庭園と言つても狹い中に日本の寺も鳥居も茶室もあり、鬪度にしてる鐘も佛像もすべてあるといふ

やうに餘りに日本のものを不統一に集めて居るので、落ちついて味ふことは出來なかつた。

日本の文化にしても隨分向ふに渡來して居るけれども、まだそれが十分そのあるべき所を得て居ないものも尠くないのである。歐洲の博物館には日本の美術も多く收められて居る。ボストンの美術館、ロンドンの大英博物館をはじめ日本の美術、典籍を藏する所は多い。さうして典籍などは陳列といふ事を主としないからさまで目だたないが、美術その他になると陳列をしてあるためにすぐ目に付くのであるが、日本の美術工藝品などの陳列の方法など不滿の點が尠くない。殊に歐洲に多い民俗博物館には南洋その他の原始文化とともに必ず日本のものも陳列してあるが、それ等の中には眞に日本を侮へるにふさはしくないものも多く、またその陳列の態度や方法に於て日本の位置をわきまへないものもある。一のものが所を得ないことは寂しいことに違ひない。文化日本が西歐に於ても適當な位置と所を得つゝあるやうに進んで居ることは認められるにしても、まだ十分に所を得て居るとは言はれない。

さういふ感じを以て日本に歸つて見ると、日本の文化は日本に於てはとにかく所を得て

居る。櫻の花も菊の花も日本の家屋も庭園もしつくり落ちついて居る、和服にしても日本の家屋に於てはじめてしつくりする。日本の婦人の服裝はたしかに美しい、世界にほこるべきものである。たゞそれがもつとも調合ふのは日本の家屋に於てであり、庭園に於てであつて、西歐の家屋や生活樣式に於てはどこか落ちつかない。一種の美はあつても、しつくり落ちついて所を得て居るとは言はれない。

日本文化の海外進出はまことに喜ぼしいことである。たゞそれを如何に進出せしむるかといふ事は極めてむづかしい問題がある。西歐文化を日本にとりいれた仕方に於ても、今日より見て種々反省すべき點があるが、日本文化の海外移植といふことにも同樣に愼重に考へるべき點があらう。文化にもそれ〴〵所を得させる必要がある。個人にしても民族にしてもそれ〴〵の所があるべきであるのと同樣である。

今年は落ちついて日本の櫻を見たいものである。（昭和十二年三月）

十九、遊歐吟詠

日本をたつ

はろ〳〵に行くともわれは皇神のみかげに生くるやまと男の子ぞ

月光のもとに彼南の極樂寺をとふ

月の下びに白々たてる極樂寺のきざはしを行けばこだまする足音

南國の彼南の寺のあらぬぎは月の下びにそびえてありけり

彼南の町に二人乘の人力車あり珍らしければ友と乘る

月の下びに彼南の町を歩きつゝ親しき友と相乘りしかへる

○

印度洋の夜はふけにたりざゝと寄する波の音きゝて思ひはろゝなる

埃及のカイロの博物館にツタンカーメン王の遺物を見る

いにしへのツタンカーメンの御はかべにうもれてありしうづ寶はも

航海終らんとす

伊勢住吉香取の神のみめぐみにわが船たびも事なく終へぬ

ロンドンにて明子の死をきく

吾子生れし時信濃路にありき吾子の死をはるかにありて聞くが悲しさ

新家のことほぎのうたげ聲あげてうたひし明子今は世にあらず

紅色のマントを着ては家中をかけりし吾子を見る日あらなく

明治神宮に吾子の手ひきて詣でしもはろ〴〵と今思ひいづなる

「お父さんがねなくなるとさびしいな」といひし吾子父が歸る日も汝はあらなく

たつあした「何を土産に」といひし時「眠る人形」をといひし吾子はも

紅色の着物着よそひ東京驛に送りし吾子は目にあるものを

父の厄母の厄をば身におひてゆきしか吾子のいとけなくして

五年の短き命しかれども汝のひとよはうつくしかりき

はるかにある父が身にそふ吾子のたま夢にも見えよひ〳〵ごとに

雄一も母も五月に世を去りき明子もゆきつ五月のやみに

憶良の歌好みし我はひとよにわが子の死をぼふたたびは見つ

今生にさちうすかりき彌陀の世にときはに生きよをとめさびして

父あらでさびしかる家に明子なくて妻子らいよよさびしかるべし

ウエストミンスターの夕べの鐘はなりわたる逝きにし吾子のたまよやすかれ

ハイドパークにて

夕近き芝生にあそぶ羊のむれ横にひろがり縱にながくなり

傾く日かげマロニエの葉うらにすきて見ゆ木のかたかげは緑くらしも
芝生も緑あせ枯葉まじりてロンドンの夏もいつしかたけしを思ふ

ヴツケブルグの豐年感謝祭に來て

われ遙かにヴツケブルグに來ヒツトラーの雄たけびをきくと思ひかけきや
バート・ビルモンドの秋深みたり牧場に草はむ牛たゞ一つ見ゆ

ベニスにて亡き子を思ひいでて

ピヤツサンマルコに立ちて豆まけば鳩がより來る手、頭、胸に
鳩にからだを埋め父われの立つを明子もみて笑みなむか
ベニスのピヤツサンマルコの鳩のむれに豆まくわれもうらさびしけれ

南アルプスのドロミーテンにて

山深くわれはきたりぬ谷ぞこの民家の軒に垂水たるみゆ

エーデルヴアイスとは草花の名なり常白の花か

アルプスの雪どけ道に頰赤き少女賣るなりエーデルヴアイス

雪の日ワイマールを訪ふ

窓ゆさす光求めしゲーテの臨終の部屋にしばしをありぬ

雪ふみわけわれはとひきぬ夏ごとにゲーテがすみしとふガルテンハウス

門のすゞをならして待つ間雪にうもれしガルテンハウスをしばしみまもる

雪つみし石段を下りくる白髪の嫗この家を守りて年老いぬらし

質素なる家にはあれど窓ゆ見る雪にうもれし庭のよろしさ

かつてわれシラー傳を教室にならひしも二十年のむかしとなりにけるはや

二十年まへよみて深くもなつかしみしワイマールを今日われおとなひつ

シカゴを出發してより汽車はひたすらに荒野の中を走りき。數日の汽車旅行はやがて單調となりぬ。それとともに米國の廣きことをも感じたり。

グランドキヤニオンを見物せしはその單調を破りて爽快なる感を與へぬ。

春雪は霏々としてふり來ふりやまずグランドキヤニオンのきりたゝれたる岩はだ

土人の踊をみる

古びたる家ぬちに土人ら踊り居りとのもは雪のいやふりしきり

北米合衆國・アメリカ・インヂアンの踊

陶器の寫眞に

青色のほのかににほふ花がめのうつし繪さへに見つゝたのしも

○

わがかへる時は來にしを亡き吾子はとぼ〳〵としていづちゆくらむ

わを送りしなれをふたゝび見んとする願ひむなしく吾はかへるなり

春雨のそぼふる朝にわがたちしその春はまためぐり來りぬ

追　記

西歐に於ける日本文學に關するさゝやかな調べを行つてからすでに一年餘りは過ぎたがその間に日本語や日本文學の世界に於ける關心は一層高まつたやうである。新聞に傳へられた外務省の調によつても、世界で日本語又は日本文化を教授してゐる國が二十ケ國にわたるやうである。獨逸國でもその後ミュンヘンの大學に日本文化の講座が設けられたが、米國でも日本文化を教授する大學は十數所を數へる。たとへばカリフオルニヤ州のボモナ大學にチヤールス・フアース博士が日本文化講座を開いた報告が見られる。オーストリヤ、ハンガリイ、チエツコスロバキヤ國等の日本文化研究も次第に隆盛になつて來たらしい。また西歐ではないが濠洲の日本文化や日本語の研究も益んになつて來たやうである。かくして日本文學が世界の着目する所となりその眞價が一層闡明されるやうになるであらう。さうして日本語が廣く行はれるやうになることが望まれるのである。

跋として

佐原六郎

昭和十年六月の或る夕、私はスタツフオード　テレースの宿舍に久松さんを訪ねた。翌日一緒にケインブリツヂへ行く約束があつたので、その打合せをする心算だつた。私を自室へ迎へ入れた久松さんは、いつになく、元氣のない聲で、「悲觀しちやつた」と一言云はれた。私は何の事か一向解らず、そのまゝ御顏を見詰めて居たが、やがて愛孃明子さんが五月五日東京で死亡された由を語られた。その時の久松さんの沈痛な御顏を今に忘れる事が出來ない。五月五日と云へば、私達がカイロの見學をした日だ。オベリスクにピラミツドに或は又ツータンカーメンの燦然たる遺物に、古代埃及の文化を偲んだ日だ。終日の見學に疲れた身體をメトロポリタン、ホテルの一室に横へた久松さんが、祖國に殘せし愛孃の死など、どうして想像し得たであらうか。遠く海外に旅する者にとつて、寸時も忘れ難きものは祖國とそこに殘せし家族とであらう。恐らく、その夜も久松さんは家族の無事を祈りつゝ寢に就かれた事と思ふ。その後私達が、ナポリに、マルセーユに、慌しき見物をすませ、一人はジブラルタルを廻り、他は巴里を經て、英京に再び相會した時、御互の健

康を喜び、留守宅の無事を語り合うたではないか。然もその頃、明子さんの死を傳へる悲しき手紙はシベリヤの長途を走る急行車の中にあつて、刻一刻久松さんの心を掻き亂すべく急いで居たのであつた。久松さんが歐洲に於て最初に受けとられた故國よりの便が此の死の通知だつたとは餘りに痛ましい。私も我が子を失つたやうな心持で久松さんの悲しみを共感し、その後一緒に綠濃き公園などを散歩して、無心に遊ぶ五歲位の女の子を見ては密に久松さんの胸中を推察して同情に耐へなかつた。

久松さんが此の書を明子さんの靈に獻ぐべく準備をはじめられたのは、既に倫敦の寄舍に悲しき便を手にせられて間もない事であつた。その計畫を私に傳へ、且つ私にも何か書くやうにと希望されたのは、確かケインブリヂへの旅行を終へて餘り日のたゝぬ中だつたと思ふ。今度愈々本書を出版されるに當り、私も倫敦での約を果さねばならなくなつた。甚だ申譯なき事ながら特に御目にかくべき適當なものもないので既に他の機會に發表せし次の二文を御送りする事とした。一は久松さんと一緒に通つた讀書室の思ひ出であり、他は私の見た二三の塔の感想であるが、これが明子さんの冥福を祈る供養塔となれば幸である。

一、倫敦の大讀書室

倫敦滯在中、私は大英博物館内の讀書室へ通つて調べものをする日が多かつた。此の博物館は古代より近世に至る、未開及び文明の人類文化史を貴重な實物標本に依つて一目瞭然理解せしむべく周到に設備された學問上の一大寶庫であつて、此處に陳列されてゐる標本は、一個の石塊、一片の羊皮紙と雖も、迂濶に看過し得ざる意味深きものである。例へば、かの有名なるロゼツタ・ストーンの如き或は又、ゴデツクス・シナイテイクスの如き多少の豫備知識でもなかつたならば、恐らくそのまゝ氣も附かずに通り過ぎて悔を永く遺したかも知れない。知識狹く、趣味少き爲に寶の由に入り乍ら、寶を寶として認識する事すら出來ないのを誠に腑甲斐なく思はざるを得なかつた。私はテームス河畔にクレオパト

ラの針と呼ばるゝ古代埃及の大オベリスクが、恰も英國の埃及征服を誇る戦利品でもあるが如くに建てられて居るのを見、又大英博物館に古代文化の貴重なる史料が無數に集められて居るのを見て、最初は、流石海賊の子孫といはれるだけあつて、英國人はよくもこんなに澤山の寶を未開、文明、世界各地から容赦なく奪つて來たものだと、寧ろ癪に障つた程だつたが、然し、後には恐らく現地にそのまゝ置いても、朽果てるか、盗まれるか、或は奸商の腹を肥したに過ぎないであらうやうな此等の遺物を莫大なる費用と周到なる研究とを以てよく蒐集保管し、然もそれらを獨り英國人にのみならず全世界の志ある人々に開放し、以て世界文化史の研究に資せしめんとして居る英國當局の奉仕に對して、深き感謝を表せざるを得なくなつた。

この感謝は更に大讀書室の利用を許された外國人にとつて一層痛切なるものがあらう。大讀書室は大英博物館内中央の位置を占めて居る。博物館は萬人に開放され毎日數千の訪客を迎へて居るが、讀書室の方はその性質上相當な制限があり、入口の監視人は入室許可證を有する特別の研究者でないと入場を許さない。讀書室といつても、それは高さ一〇六

呎直徑一四〇呎もある圓天井の大廣場で、何の事はない兩國の國技館の土俵を中心に放射狀に机をならべたやうな形をして居る。中央には圓周狀の受け附臺があり、數名の館員が閲覧者の差し出すカードをアルファベット順に受け附け、又圖書に關する種々の質問に應じて親切に答へてくれる。この受け附臺の周圍にはこれと同心圓的に設置された大小二周の弧形書架があつて、この書架には一千册を越えるフォリオ型大目錄書が並べられて居る。閲覧者はこれらのカタログから所要書籍の番號を見出しカードに記入するのである。閲覧席はこれ等同心圓的書架を中心として放射狀に配置され、黑い革張りの机にはペン、インキ、吸取紙等が用意されて居り、高い硝子窓から萬遍なく入る光線のため、どの席に着いても手暗がりになるやうな事はない。暗くなれば各自勝手に自席の電燈を點ずればよい。室の周壁は三階まで數十萬の書物のギツシリ詰まつた書架を以て埋められ、その中一階の書架には辭書、百科全書、雜誌の合本、英國の地方誌等があり閲覧者は勝手にそこへ行つて所要の書册を引き出して自席へ持つて來る事が出來る。その他の書物はボーイが書庫から出して來て閲覧者の机の上に運んでくれる。又特別の貴重書はノース・ライブラリーと稱せられ

る別室で繰り見られるやうになつて居る。日本人の著書では矢代幸雄氏のボツテイチエリーの限定初版本三卷の如きが特別書の中に入れられて居る。此の大圖書館の藏書は一九三五年度において約三百六十萬といはれ、書棚の延長五十五哩に及ぶとの事であるから量的に見ても驚くべきもので、更に英國で出版される書物は如何なる小冊子と雖も必ず一本を此處に寄附しなければならぬ事になつて居るので年々の增加率も高まる一方である。閱覽席は同時に五百人を收容し得る設備となつて居り、それが殆ど常に滿員に近き盛況を呈して居る。一般に若き學生よりは中年の學者風の紳士が多く婦人の閱覽者も仲々多い。外國人も相當に多く、私が通つた時分には五六名の日本人も居た。私の最も感心したのはどんな書物を借り出しても殆ど埃のついて居ない點で、あの無數の書冊を毎日埃の附かぬやうに掃除するだけでも容易ではあるまいと思つた。同時に又室內の靜肅にして淸潔なる點も、閱覽者の熱心なる勉强振りと共に感心させられた、華美な壁畫や優雅な大理石彫像等を以て飾られた多くの歐米の圖書館を見馴れた目にはこの大讀書室が餘りに實用本位に殺風景に見えるかも知れないが、然し周圍に開く高い大きな窓の下にチヨウサー、シエークスピヤ

等よりテニスン、ブラウニング等に至る英國の誇る文豪の名を一つづつ書いた質素なパネルこそは一切の裝飾物にも增してよく英國文化の粹を象徴して居るのではないかと思つた。

二、カムパニーレと圓塔

私の或る友達は「欲しいものはその場で買へ」と云ふ主義で古き鄕土藝術の優れた作品を盛に蒐集して居る。僅かばかりの金を惜んで切角の掘り出し物を逸して了ふのは斯うした蒐集家には耐へ難き痛恨事なのであらう。私は別に何の蒐集家でも無いから旅行中に買ひ損ねたものに對しても大した執着は持たない。その代り「見たいものは逃さず見て置くべきだつた」と思ふ事は隨分ある。私の最も殘念なのは伊太利でラヴェンナへ行かず、從「サン・アポリナーレ・イン・クラツセの古寺を見なかつた事だ。ボロニヤでトーレ・アシネ

リ及びトーレ・ガリセンダの二斜塔は見なくとも、ラヴェンナにだけは行くべきだつたと惜まれて仕方がない。歸朝後もサン・アポリナーレの教會堂とその脇に立つ圓筒狀の鐘塔との寫眞を眺める度に何故同地を訪れなかつたかと後悔して居る。

吾々は歐洲各地を旅行する時到る處に美しき尖塔が會堂の屋根に聳え、永きキリスト教文化の光を象徴して居るかに見受けるのであるが、一般にキリスト教會堂の塔は、佛教寺院に於ける五重の塔や多寶塔のやうに本堂から離れた別棟の獨立建立建築物たる事は少く、殆ど皆會堂の屋根の上に聳える附屬的建築物である。勿論斯うした附屬的の塔にも、例へばストラスブールのミュンスターやフローレンスのテンピオ・デイ・サンタ・クローチエの鐘樓のやうにすばらしく優れたいゝものもある。だが、私の興味は寧ろ佛塔の如き獨立建築物としてのキリスト教の塔を見る事に在つた。それにはどうしてもラヴェンナのカムパニーレを見逃すべきではなかつた。

伊太利ではヴェニス、フローレンス、及びピザの三都に在る三つの全く異れる樣式の獨立建築物的カムパニーレを見た。現在ヴェニスの聖マルコ廣場に立つ三百廿五呎の大塔は

一九〇五年以後に改修された新しきもので、上へ行くほど少しづつ細くなつて行く赤煉瓦の方形塔身、白い石灰岩の鐘室、四面に夫々聖マルコの獅子その他の浮彫のくつきり現はされて居る屋階（フッチカ）、金色の天使像を風見とするピラミッド形の屋根、等が調和よく統一され、然もどの方向から望むも周圍の建物と協和せる誠に麗しき存在である。又フローレンス大伽藍（ドゥオモ）の廣場にはジオツトーの設計により一三八七年に完成された豪奢な大理石のカムパニーレがどつしりと立つて居る。高さは二百七十六呎その下部はその後ドナテルロその他文藝復興期の優れた彫刻家の手に成る立像や浮彫を以て飾られ、結構この上もなき美事な角塔である。恐らく有ゆる塔建築の中で最も立派なものであらう。ガリレオの引力の實驗で名高いピザの斜塔は一三五〇年に成れる高さ百八十一呎のカムパニーレである。廣々とした草原に靜に傾く純白大理石のこの塔は伽藍、洗禮堂及びカンポ・サントの美しき建物と共に綜合建築群の一部を爲し、恰も法隆寺の建築群に於ける五重の塔と同樣そこに無くてはならぬ美的存在である。六階まで圓筒形の塔身を圍む澤山の大理石柱は單調なるべき外壁に無限の趣きを添へて面白い。塔上に立つて四方を見渡せば眼界極めて廣く遠くアル

プスの山々をも望み得て誠に愉快だつた。

以上三つのカムパニーレは互に全く異れる獨特の樣式を示し乍ら何れも立派に完成されたキリスト教的塔建築の代表的傑作である。けれども餘りにとゝのひ過ぎた此等の塔には近づき難き威壓的な力はあつても、同胞的な親しみや野趣的な面白さは感ぜられない。然るにかゝる親しみと面白さを私は愛蘭土の圓塔に於て見出す事が出來た。一九三五年の夏私は特に圓塔を見る目的を以て愛蘭土旅行を企てた。だが、同國に現存する圓塔は比較的不便な僻地に散在して居るのと、私自身に時間上の餘裕がなかつたのとで、僅にアントリムとグレンダロウとに殘る二つの古塔を見得たに過ぎない。アントリムは愛蘭土北部アルスター地方の一小村で、ベルフアストの北西十九哩の地點に在り、又グレンダロウは中部愛蘭土ウイツクロウ郡の山間の僻村で首府ダブリンから約廿三哩南へ下つた風景麗しき場所である。

圓塔は愛蘭土の古き石造宗教建築物として考古學上幾多の疑問と興味とを喚起した謎の塔で、これと多少似た塔はアイル・オブ・マンに一つ、スコツトランドに三つ殘つて居るだ

けで、他の何れの國にも現存して居ない。所が、獨り愛蘭土にのみは略々完全に近きものが廿個、更に既に破損せる殘骸をも數へるならば百十數個も見られるのであるから、此等の圓塔は大體に於て愛蘭土特有の古き宗教建築の遺物だと見做して差支ない。圓塔の高さは一定して居ないがアントリムの塔は九十三呎、グレンダロウのそれは百十呎だつたと思ふ。用材も處によつて異り、砂石、石灰岩、雲母片岩、花崗岩の何れかゞ主として用ゐられ、塔は此等の自然的石塊を其まゝ、又は多少ハンマーを以て平面やカーヴを作つて、積み重ね、少量のセメントで固めて築いたものゝやうである。圓錐筒狀の塔身の頂上には同じ石材を巧に重ねて作つた陣笠のやうな形の塔蓋(トトップ)がついて居る。私の見た圓塔の外壁は何れも苔が一ぱい生えて居て古色蒼然たるものがあつた。多少ふくらみのある塔身の直線は、之を遠くから眺めると、一種のやわらかみを帶びて、云ふに言はれぬ親しみを感じさせる。殊にアントリムの圓塔では屋階に近き外壁が一部分少しく歪んでゐて、どこか、とぼけた、ほゝえましき面白さがある。塔の入口は地上六呎乃至十八呎位の高さに在り、梯子を掛けなければ到底登れない。入口以外に、各階一つづつの窓が互違ひの方向に面して

作られて居り、最高の屋階に於てのみは四つの小窓が東西南北に開いて居る。塔内各階の床は板張りで、その間に階段はなく、恐らく移動的な梯子を以て連絡したものゝ如くである。

圓塔の作られた時代をB・C數百年の遠きに求める學者もあるが、今日では大體A・D八世紀乃至十三世紀の間だらうと云ふ說が有力である。又附近に教會堂の遺跡が多い事、その他の事實から、圓塔を以てキリスト教建築物だと見做すのが定說となつて居るが、中には異教的起原說を唱へる學者もある。塔の用途に就いても、鐘樓、城砦、物見櫓、貯藏所等種々の說を爲す者があつて久しく論爭が戰はされた。中には拜火教の殿堂であつたとか、或は又陽物崇拜の遺跡だと主張する者さへある。此等考古學上の問題に關しては今こゝでは論評する必要はない。只西洋の最も珍らしい宗教建築物の一つとしての圓塔を讀者諸氏の中、未だ御存知なき方々に、御紹介申上げるまでゞある。

14.11.24

昭和十二年七月十五日印刷
昭和十二年七月十九日發行

西歐に於ける日本文學

定價金貳圓貳拾錢

著者　久松潛一

東京市牛込區揚方町二十七番地
發行者　佐藤正叟

東京市京橋區銀座西二丁目三番地
印刷者　高橋郁

東京市牛込區揚方町二十七番地
發行所　至文堂

電話牛込(二二)四四五五番
四四五六番
振替口座東京二九五〇七番

(三協印刷株式會社印刷)

東京帝國大學教授文學博士 久松潛一 著
日本文學評論史 古代中世篇 近世最近世篇
送料 定價 二・〇〇 三〇〇

東京帝國大學教授文學博士 久松潛一 著
上代日本文學の研究
送料 定價 三・八〇 一四〇

東京帝國大學教授文學博士 久松潛一 著 增訂
萬葉集の新研究
送料 定價 三・〇〇 一四〇

東京帝國大學教授文學博士 久松潛一 著
萬葉集に現れたる日本精神
送料 定價 〇・八〇 一〇〇

藤村博士 功績記念會編
國文學と日本精神
送料 定價 四・五〇 二〇〇

藤村博士 功績記念會編
近世文學の研究
送料 定價 五・〇〇 一〇〇

文學博士 藤村作編 頭註
古事記
送料 定價 二・〇〇 一〇〇

文學博士 藤村作編 校訂 頭註
萬葉集 上 下
送料 定價 各 一・八〇 一四

文學博士 藤村作編 頭註
古今和歌集
送料 定價 二・〇〇 一四

文學博士 藤村作編 註頭 新古今和歌集 送料 定價 二・〇〇 一四〇

文學博士 藤村作編 註頭 清少納言枕草子 送料 定價 一・六〇 一四〇

文學博士 藤村作編 註頭 平家物語 送料 普及版 定價 二・七〇〇 三・二〇〇 一八〇

文學博士 藤村作編 註頭 徒然草 送料 定價 二・〇〇 一四〇

文學博士 藤村作編 註頭 俳文學集 送料 定價 二・五〇 一四〇

學習院教授 岩田九郎 著 增訂 奥の細道詳講 送料 定價 二・二〇 一四〇

文學博士 藤村作著 上方文學と江戸文學 送料 定價 二・八〇 一四〇

京城帝國大學教授 麻生磯次 著 近世生活と國文學 送料 定價 三・〇〇 一四〇

兒山信一著 日本詩歌の體系 送料 定價 三・〇〇 一四〇

大西貞治著　古代純日本思想　送料定價　三・〇〇　一四

大西貞治著　古代日本精神文化の研究　送料定價　三・八〇　二〇

廣島文理科大學助教授　倉野憲司著　古事記の新研究　送料定價　三・〇〇　一四

東京帝國大學助教授　池田龜鑑著　宮廷女流日記文學　送料定價　三・〇〇　一四

手塚昇著　源氏物語の新研究　送料定價　二・八〇　一四

法政大學教授　片岡良一著　井原西鶴　送料定價　三・〇〇　一四

東洋大學教授　湯地孝著　樋口一葉論　送料定價　三・〇〇　一四

東京帝國大學助教授　守隨憲治著　日本戲曲選　送料定價　二・五〇　一四

東京帝國大學教授文學博士　平泉澄著　萬物流轉　送料定價　二・〇〇　一〇

東京帝國大學教授文學博士 平泉澄著 我が歴史觀 送料共 三・四〇 一四〇

東京帝國大學教授文學博士 平泉澄著 國史學の骨髓 送料共 一・八〇 一四〇

東京帝國大學教授文學博士 平泉澄著 建武中興の本義 送料共 二・〇〇 一四〇

東京帝國大學教授文學博士 平泉澄著 武士道の復活 送料共 二・八〇 一四〇

東京帝國大學教授文學博士 平泉澄著 闇齋先生と日本精神 送料共 一・五〇 一二〇

東京帝國大學教授文學博士 平泉澄著 中世に於ける精神生活 送料共 四・〇〇 一八〇

東京帝國大學教授文學博士 平泉澄著 中世に於ける社寺と社會との關係 送料共 三・〇〇 一四〇

九州帝國大學教授 竹岡勝也著 近世史の發展と國學者の運動 送料共 三・〇〇 一四〇

東京帝國大學助教授文學博士 坂本太郎著 上代驛制の研究 送定料價 二・二〇 一四

東京女子大學教授 原田亨一著 近世日本演劇の源流 送定料價 二・二〇 一四

京城帝國大學助教授 末松保和著 近世に於ける北方問題の進展 送定料價 二・二〇 一四

東京帝國大學史料編纂官 小野均著 近世城下町の研究 送定料價 二・五〇 一四

東京帝國大學講師 小林健三著 日本神道史の研究 送定料價 二・五〇 一四

東京帝國大學神道研究室 寺田剛著 大橋訥菴先生傳 送定料價 二・五〇 一〇

拓殖大學講師 松本純郎著 山鹿素行先生 送定料價 一・五〇 一〇

東京帝國大學助教授 山中謙二著 西洋史概說 送定料價 三・〇〇 一四

2398

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02998 9431